

と曰へり。然るに哲理上の難問たる自由意志の爭議起りて、インゴルスタットの教授ヨハン・エツクは教會の元首は教皇なりと曰ひ、ルーテルは耶蘇基督なりと主張し、延きて黄泉贖罪の諸題に及び、論議益熾なり。ライプチヒ大學長は決する能はず、巴里エルフルト諸大學に通じ、兵を以て論者の舍宅を擁護し、ルーテルは諸論を公にして羅馬教會の專權を否認するに至る。是に於て當代の學者エラスムス、ウルリヒ・フォン・フッテン、フィリップ・メラニヒトン等漸くルーテルの説に傾聽す。エラスムスは希臘文新約全書を出版し、『^{ラウスムスツレチエ}恩愛論』を著はして諷刺の妙を極め、ウルリヒ・フォン・フッテンは『エビストレー・オブ・スクロム・ギロルム』を著はして僧侶及び煩瑣哲學を難し、メラニヒトンは本名をシユアルツェルドといひ、キツテンブルグの希臘教授にして、みな當代の名士なり。況んや貴族門閥またルーテルを助け、嘗て大に羅馬教の爲に盡瘁せし撰侯フリードリヒは公然新教義に贊し、千五百二十年四月一日書を教皇に呈して、力を以てルーテルを屈せんとせば教會の禍を致す可しと警め、ルーテルまた書を呈して論議するところあり。調停殆んど成す可からず。レオ十世乃君牧師會を開き、六月十五日有名なるエキスルグ・ドミニ(神をして起

羅馬教會新教
義の破裂

デルムス會議

たしめよ、詔を宣し、ルーテルの論議四十一條を異端妄議と爲し、その著述を焚き、ルーテル六十日間に改悛せざれば破門す可しと爲す。十二月十日ルーテルは教皇の宣詔寺法反對黨の諸著をキツテンベルグ城外に焚き、翌れば千五百二十一年一月其徒は悉く破門せられ、贖罪教符の非を論せしより此に至りて三年、ルーテルは羅馬教會派の一僧侶より變じて新改革の主唱者と爲り、供養を否認し、教會の七聖禮を洗禮懺悔、聖餐の三禮に減じ、教皇を非基督として攻撃するに至れり。嚮にマクシミリアン帝の殞落するや、英吉利王ヘンリー八世、佛蘭西王フランソア一世各厚く撰侯に賂ひて皇帝たらんとせしも、効無く、サクゼン撰侯フリードリヒ其撰に當りしも辭して受けず。マクシミリアン一世の孫西班牙王カルロス一世撰ばれて帝位に即く、是則カール五世にして令を發して悉くルーテルの書を燬かしむ。然るにデルムスに會せし諸州侯伯は宗教革新の説既に深く人心に入りたれば此の如くにして禍亂を惹起せんことを恐れ、帝に勸めてルーテルを召して自陳辯せしむ。ルーテル召に應じて起つや、北獨逸の侯伯民衆歡呼して送迎し、恰も王公を遇するが如く、四月デルムスに至り陳疏具に盡して説を變せ

す、聖典を以て信仰の唯一條規と爲し、苟も背く勿らしむ。五月下旬帝チルムス告示を發してルーテルを異端とし、之を保護し、其書を公にし、賣讀するを禁ず。ルーテル還りてアルテンスタイン附近に至るや、一隊の甲士あらはれ、ルーテルを奪ひ去る、皆以てルーテル害せられたりと爲せしも、實はサクゼン撰侯告示出で、ルーテルの害に遭はんことを慮り、旨を部下に傳へて奪ひ、密に之をワルトブルグ城中に幽禁し、以て世を欺きしのみ。

獨逸にルーテルの改革を唱ふるや、瑞西亦ウルリヒツキングリありて出づ。ツキングリは千四百八十四年トッゲンブルグのキルデンハウゼンに生れ、千五百六十年グラルスに僧と爲り、夙に教界敗類の狀を痛嘆し、千五百十六年君牧師シンネル、コンスタンツ僧正に、教會法規の改革を爲さざれば天下の民細流を惡み、教法を尊まずして邪路に歸せんことを説き、ルーテルに先ちて改新を唱ふ。既にしてミラーのフランチェスコ派の一僧ベルナルドサムソン贖罪教符を瑞西に賣りしかば、ツキングリ之を排斥し、サムソンは千五百十九年瑞西を去り、コンスタンツ僧正はツキングリ等新派の説教を禁ず。千五百二十三年チュリヒ會議の開くるや

ツキングリ新
義の唱道

ツキングリ其説を公にして曰く、教會の裁可を経ざれば福音書の尊なしと爲し、書外の教訓口牌も書中のものと同じ價值ありと爲すは誤れり、供養は基督犠牲の紀念に過ぎず、教皇僧正の權は聖典の所載にあらず、神は結婚に制禁を爲さざれば之を僧徒に謀る要なく、懺悔は赦罪を價するものにあらず、金錢を以て教符を賣るは賣職の罪なり、黄泉冥土の説は聖典に所見無し、僧徒の行ふ裁判は俗權にして、箇人の立説は緇徒に禁せらる可らず、但公安を紊らば官吏の禁制す可きものなりと、以てルーテルに比して一層甚激なる改革の意見を見る可し。かくて二百會議に於てコンスタンツ僧正の副師フアベルは教法の疑議は必ず教會總會の決を待つ可しと論せしも、ツキングリは固執して屈せず、福音を説くこと前の如く、チュリヒ附近は唯聖典の所定に従ふ可しと決せり。次で千五百二十四年チュリヒにては畫像聖物供物其他舊様の粧飾は悉く毀却せられ、四方續々之に倣ひ、翌千五百二十五年の始供養の儀は廢せられ、次で聖餐はツキングリ改定の典式に従ふに至る。改新の勢迅速なること以て知る可し。

之に反して獨逸新派の進歩は遅々たりしが、ルーテルはワルトブルグ城中に

隠れて經典の反譯に従事し、また連りに小冊を著はして懺悔、誓盟、獨居、祈禱等を論じたり。是より先七十餘年、マインツのヨハン・グーテンベルグ印刷術を發明し、其門下ヨハン・フスト、ベーター・ルシェフェル等此を大成し、千四百六十二年、マインツ陥落以後、フストの徒弟諸國に離散せしより、印刷術四方に傳派し、今や古學の復興と與に近世文化進歩の功を奏し始めしかば、ルーテルの著は忽獨逸國中に流布し、北方の僧侶は寺刹を出で、娶り、供養を廢し、ザルムス會議の後、カール五世帝、チーデルランドより西班牙に去り、監國皇弟、フルヂナンド幼にして、威力微に攝政顧問の一たるサクゼン侯、フリードリヒのルーテルに善きを機として、新教義の形勢漸く盛なれども之を制する者莫し、然るにルーテルに代りて、キッテンベルグの神學教授と爲りしカールスタットは結婚を誇示し、畫像を毀ち、聖水を禁じ、聖典以外の書、大學に用なしと爲し、人は皆勞役に服す可しと爲し、躬踐してその徒を導き、ストルク、ミュンチエル等と連りて、人心を聳動す。ルーテル之を憂へ、千五百二十二年、キッテンベルグにかへりて、溫和説を立てしも、カールスタットは之を罵りて、偶像信者、公侯の嬖寵と爲して、從はず、終に公安を害する者として、サクゼンを逐

カールスタット

はれて、瑞西に奔れり。千五百二十一年十二月一日、教皇レオ十世暴に殞落す。時人或は佛蘭西王フランソア一世の毒殺に出づと爲すも、證左明ならず、而して後任は君牧師ジュリオ・デ・メヂチにあらざれば、カール五世が推立の約を結び、英吉利のウルシーならんと云ひしに、ウトレクトの僧アドリアノ六世法燈を繼ぎたり。此間に久しく皇威に屈せし獨逸の貴族武士は、宗教改革を表目として、また漸く強横を逞うし、就中フランツ・フォン・ジッキンゲンは、ライン豪族同盟の首領と爲りて、シュプーベン同盟と争ひ、千五百二十二年トリールを圍みしも、功なく、カイセルスラウテルン附近のランドスツール城に據り、翌年五月城陥りて、戦歿し、アドリアノ六世は、ザルムスの告示を有功とし、ルーテルを死に處す可しと令せしに、獨逸諸州は應せず、ジュリオ・デ・メヂチは、アドリアノに代り立ちて、クレメンヌス七世と號し、君牧師カムベジヨを遣はせしも、諸州服せず、カムベジヨは羅馬黨の君公をラチヌボンに會して、異端撲滅の事を誓ふとともに、諸公は羅馬失政の釐革を要求したり。然るに北方獨逸は、改革の氣運太熾なるも、他は然らず、カールスタット一派の激行に驚きし、バイエルン諸侯は、此年春領内の新教を禁じ、塊地利と結びて、その撲

獨逸瑞四ル
の形勢の比較

滅に盡瘁せり。年末ル、テルは獨譯の聖典を公にし、翌千五百二十三年供養排斥
 説を立て、千五百二十四年には僧綱を廢し僧衣を脱し、茲に所謂新教派の成立完
 くなれり、世に之を稱してルーテル派といひ、瑞西の新教派と名けて福音派とい
 ふ。蓋し此二派の運動は時を同ふして行はれしも、形勢は太異なれり。革新の實は
 瑞西獨逸より過ぎたりと雖も、其手段は獨逸瑞西よりも激烈なり。これ瑞西は民
 主の勢大にして政府弱く、且山間懸絶の地にして教皇の干涉少きも、獨逸には帝
 權強大にして教皇の防止に力を用ふる多きを以て勢激争を免れざりしなり。
 之よりさき上獨逸の貧民は苛政重税に苦しみ既に屢ば蜂起の徴候ありしが、
 ルーテルが皇帝諸侯の失政を難するに及び、千五百二十五年の始シユターベン、フ
 ランケンフランクの百姓蜂起し、終にシユターベン同盟の爲に地を奪はれしユルテンベル
 グ公を將として所在を殘壞し、一時頗る猖獗を極めしも、ルーテル其暴を惡みて
 與みせざりしより、暴徒はタウベル河畔ケーニヒスホーフケニヒスホーフに擊破せられ、數月
 の亂に十萬の民を失ひたり、其慘禍知る可し、又別に再洗派再洗派の領袖ストルクが門
 下ミユンチュル此暴徒と氣脈を通じてチュリンゲンを亂り、五月中旬フランケンハウ

獨逸の動亂

トルガウ同盟

センに敗れて事平ぎしも、此間にサクゼンのフリードリヒは歿し、弟ヨハンつぎ
 てまたルーテルを助け、ルーテルはさきに尼たりしかタリナ・ナオンボラと婚し、
 其教は此年を以て普魯西に入れり、始めトルン條約の結果、普魯西の大半は折け
 て波蘭に歸し、遺地僅にチュトン武門の有たりしに、チュトン社の座主ブランデン
 ブルヒのアルブレヒトは波蘭と戦ひて破れ、千五百二十一年カール五世の調停
 に由り僅に四年の休戦を約せしも、領内互解衰弊して再舉の方なし、ルーテル之
 を見てチュトン社を解き普魯西を以て一俗領と爲す可きをす、む、此年に至り休
 戦の期満ちしかばアルブレヒトは之を納れ、クラカウに至りて波蘭王シギムン
 ト一世と和を約し普魯西の東方を得て王國の附庸と爲し、翌年噠馬の公主を娶
 り、東海の邊に據りてルーテルの新教を採用す、勢此に至りて皇帝攝政と雖もま
 たルーテルを抑制する能はざるなり、大勢此の如きを見て加特力の諸侯は七月
 デッサウに會してその防止を議せしに、却つて翌千五百二十六年三月新教徒は
 トルガウ同盟を組織し、當時佛蘭西王と伊太利に角逐せるカール五世來伐の報
 を得てヘッセンのランドグラフ、フィリップ、サクゼン撰侯ヨハンを領袖と爲し、スバイ

スバイエル
會

エル國會の閉鎖に乗じて防戦の準備を爲す。始めルーテルは全く人民に黨して貴族の爲に革命の唱主と目せられしも、一びワルトブルグに保護を受けてより諸侯と連絡し、爲に民間の名聲稍失墜したるも、北獨逸の侯伯は争つて新教に歸し、由つて以て教皇、皇帝の羈扼を脱せんとす。蓋し帝は外邦の産にして常に外に在りて佛蘭西と拮抗し殆んど獨逸の治亂を以て意と爲さざればなり。然るに伊太利に於ける西佛の第二役局を結びしかば、帝は千五百二十八年八月スバイエル議會召集の令を發し、苟も其告示訓令に背違するを許さず、悉く異端新義を禁制す。是則内亂の宣言に等しく、翌千五百二十九年三月議會開くるやヨハン、フィリップは兵を將て會し委員等日を期して獨逸の一市府に教會總會を開く可く、若し能はざれば獨逸諸州會を徴して教争を斷す可く、アルムス告示は勵行す可く、今後百方新教を排し神聖羅馬帝國の諸州はルーテルの教義禮典を准可す可からずと爲す。ルーテル派の諸州君公之に服せず。四月十九日諸侯及び十四皇領市は抗議書を上る。のち、新教の徒を目して抗抵派プロテスタントと稱するは實に此に淵原せり。帝時に伊太利に在り、書を得て其便を獄に下し、教皇と連和して強兵を以て宗敵を威壓

抗抵派の稱

カール五世の
南征

せんとす。然るに新教派は内和せず。或は兵力に訴へんとし、或は和平を欲し、南方獨逸の諸市はルーテルに畔きてツキングリに合せんとす。ヘッセンのフィリップ深く之を愛ひ、十月ルーテル、ツキングリ及び二者の黨をマルブルグに會して合同を謀り、協議して十四條の教旨を一致せしも、晚禱の項に至りて議合はずして已む。ルーテル新義を教界に提唱してより此に及びて實に十又二年なり。

此頃恰もカール五世は佛蘭西と伊太利を争ひて遂に志を得、新にカムブロー嬢々和約を爲せしかば、千五百二十九年八月教皇より帝冠を受けんため伊太利に至り、十月さきにフィレンゼを逐はれしメヂチの一族を歸復せしめんとして、オラニエン公をしてフィレンゼを攻めしむ。城中よく防ぎ、コンドチエリ、フランチニス、コフエルト、マラテスタ、バリオニ及び繪畫彫刻、建築に兼曉せる南歐有名の美術家ミカエル・アンジェロ等之に與りしが、フェルッチイ、オラニエン公ともに戦歿し、千五百三十年八月フィレンゼ陥り、八萬クラウンの償金を輸し、アレッサンドロ・メヂチ以下府にかへる。後八年アレッサンドロは刺客の手に殞れ、コスモ・メヂチつぎて遂にトスカナ大公と爲れり。かくて西班牙獨逸の主たるカール五世は今や羅馬教

皇と連和して殆んど伊太利半島を威服して歐洲に於ける版圖の大、カール大帝後未だ會て有らざるところ、況んや大西洋外には此時墨士哥、秘魯の征服成れるをや、四方を顧みてまたよく之に敵する者莫し。但最も憂ふ可きは新にスバイエル會議に抗議せし抗抵教派なり。カール帝乃教皇クレメンヌに宗教會議を開きて之が策を講せんことを勸めて用ひられず。此年六月二十日アウグスブルグ國會を召集し親しく之に臨みて頗る盛觀を極む。然れども帝の議に臨むや、抗抵派の諸侯は悉く引去り、獨りサクゼン撰侯は職を以て侍し、ルーテルは國禁の身なればメランヒトン代りて會し、二十五日、二十八日教條を提起す。所謂コンフェシオ・アウグスタナ是なり、然れども教條納れられず。改革は總べて撲滅す可し。たゞ羅馬教皇若しくは教會擁護の皇帝の旨を奉す可しと決せしが、ヘッセンのフィリップの奮然辭し去るを見て、帝は其同盟を糾合して教軍忽至らんには加特力派と雖も塊地利家の隆昌を忌みて動くものあらんを恐れ、且土耳其西侵の鋒急なるを憂へて、終にアルムス告示により強めて抗抵派を壓抑せざることとし、十一月末議會を解けり。果して十二月抗抵諸侯伯はシユマルカルド同盟を組織し、互に相扶けて新教の

コンフェシオ・アウグスタナ

シユマルカルド同盟

普及に力め、外フランツァ一世、ヘンリー八世を援きて助と爲さんとす。フランツァ一世は只舊敵カールを屈せんにはその道を選ばず、瑞西のツキングリと氣脈を通せしが、千五百三十一年チユリヒの新教徒はシ、ワイツ、ウリ、ウンテルワルデン等の羅馬信徒と戦端を啓き、十月ツキングリは二千の兵を以て大敵とアルピス山に戦ひて敗死し、死に臨みて義を變せず。此間に帝は弟フェルチナンドを羅馬王に拜したれば、サクゼン撰侯は新教徒の名を以て之に服せず。フランツァ一世も之を口實とし、千五百三十二年五月抗抵派に結ぶ。時に土耳其の侵畧益急にして、帝和を求めしも土相イブラヒム・パシヤに拒まれしかば、内憂を除かん爲に七月シユルンベルグに抗抵派と和し、總會、若しくは國會の開設まで新派の禁を解き、相ともに土耳其を防ぐに決す。故に櫻里丹スレイマン來り侵せしも志を得ずして退きしが、佛蘭西王フランツァは嚮に密に土耳其と通じて帝を挾撃せんことを謀りしが、今また帝の東征の隙に乗じ英吉利王ヘンリー八世、羅馬教皇クレメンヌ二世と連り、千五百三十三年十月第二子オルレアン公アンリの爲に故ウルビノ公ロレンゾ二世の女カタリナ・デ・メヂチを納れて、再び伊太利の克復を謀りしが、

カール大帝對フランツァ王

翌年九月クレメンヌス歿し、パオロ三世立ちしかば、嗣南の謀立たず、偶々帝海南の強賊ハイレツデン、バルボッサを伐ちてツニス略し、そのかへるや伊太利ミラノ公フランチェスコ二世薨じ、スフォルサ家絶へて其地帝に歸す。フランスア之を争ひ兵を發し、系統を争ふに託して叔父サチア公の地を征して南征の途を開きしが、千五百三十六年皇師之をファンノより逐ひてプロワンスを侵し、マルセイユを圍み、終に兵三萬を損じて退きしも、由て以て佛王の南下を挫けり。翌年フランスはフランスドルを侵して功なくして休戦を約せしも、太子の殞落を以て帝の毒に遭ふと爲し、土耳其の櫻里丹と通じバルボッサをして南伊を侵さしめ、相呼應せんとす。教皇パウロ三世爲に麻譟、末教徒侵寇の途を開くを恐れて帝王の間に周旋し、千五百三十八年六月ニツに十年休戦の約を爲さしめ、翌千五百三十九年一月トレドに於て永年の和約と爲し、ニツ以外のサチア公領を帝王の間に分てり。

トレドの和議

佛蘭西王フランスア一世は國內にては改革派を虐遇し、千五百三十四、五年には多く新教徒を殺すと雖も、カール帝に抗せんため獨逸端西の抗抵派と結び、或

再洗派の蜂起

はメラシヒトンを招聘せんとし、シマルカルド同盟に加はり、獨逸新教派の歡心を得るに汲々たりき。然るに今や帝と和したれば忽地相助けて新教禁遏の方を取る。之より先一び敗れし再洗派ゾリクの餘燼またサクゼン、フランケンに燃え、獨逸チーテルランドに教せし教徒は所在に並起し、ハアルレムの賤民ヤン・マチエセン僧正と稱し、ミュンステルのベルナルド・エツベルド、リング、ロートマン等之に應じ、之を迎へて府城に據り、アチーセン陣歿してのちは、レイデンのヤン・ポックルズオン代りて事を執りて多妻説を唱へ、教會を毀ち、イスラエルの古制を復して十二判官を置き自ら君王の尊を以て居る。僧正皇師の援助を得て之を圍み、千五百三十五年六月之を陥れ、ロートマンは戦死し、ポックルズオン、ニツベルド、リング等は慘刑に死す。然れどもシマルカルド同盟は勢再び盛にして、ヘツセンのフィリップは千五百三十四年五月皇弟奥公エルデナンドをハイルブロンに擊破して、翌月カダン和約を結び、ウルテンベルグをその舊公ウルリヒに復し、フエヂナンドの羅馬王たるを認めたり。是に於て抗抵派はウルテンベルグ、ホルスタイン、ポムメラニエン、ブランデンブルグ其他を根據と爲し、獨逸に於ては抜く可からざる大勢

獨逸抗抵派の確立

力と爲れり。請ふ轉じて歐北の形勢を見む。

始め千三百九十七年カルマル條約により歐北の三國は一王の下に併せられたり。然るに瑞典は分離を欲し上下相軋りて國力衰へしが、千四百三十九年オルデンブルグ伯クリスチャン王位に即き、同二世立つに及び、千五百二十年ストックホルムの戴冠式に於て、瑞典の貴族僧侶を除きて一時其自立の志を挫きたり。之をストックホルム血浴といふ。時に瑞典の名門にグスタヴ・エリクソンあり、父を殺されて江湖に落魄し、報復の志を起し、ダルカリアの農民を嘯集し、烏合の衆を以て地方を陥れ、ストックホルムを圍み、遂に王を廢す。グリスチャンはケブンハウン諸島諾威を有するも、諸將を信せず、獨逸に奔りて救を妃兄カール帝に求しも、帝應せざるを以て、更に永くフレンドルに留り、千五百三十一年遂に皇妹ネーデルラントの攝政マリアより水師を乞ひ得て、瑞典を伐ちしも志を遂げず、歸途捕囚と爲り、叔父ホルスタインのフリードリヒ一世に送らる。フリードリヒ乃之をゾンデルボルグに幽して自ら噠馬諾威王と爲り、瑞典に君臨せんとす。瑞典従はず、グスタヴ・エリクソンを奉じて主と爲す。グスタヴ・ワザ王則是なり。噠馬王クリスチ

ストックホルム
△の血浴

グスタヴ・ワザ
王と新教

噠馬王室の
と新教

ンの一時ルーテルの意見を用ひしは、寺領を奪はんが爲に過ぎずして、直ちに教皇の宣詔に歸せしも、此時教法改革の波動は此地に及び、瑞典王グスタヴは衆に先ちて新教派に歸し、宣教師をラブランドに遣り、聖典讚美歌をフィン人に頒ち、羅馬舊教徒に迫りて、寺領を公收して滅罪赦符を廢停し、羅馬上訴を禁じ、僧正の城邑を沒し、租税を僧徒に課し、或は新教歸依を強るに至り、千五百四十二年議會は國內の異教派を排除し、抗抵派に誓ひたり。噠馬にてはフリードリヒの立つや、僧侶之と結ばんとせしも、王は應せずして、専貴族と結び、千五百二十七年にオデンゼーのステーツは羅馬教界と絶つ。故に千五百三十三年フリードリヒの歿するや、僧侶は長子クリスチャンの新教派なるを忌み、其獨逸人たるを非とし、末子は噠馬に生れたれば宜しく王たる可しと稱して奉じて王位を争ひ、自家の利福を復せんとす。一時ハンザ同盟の盟主を以て昌榮北歐に冠たりしリュベックは、嘗て噠馬と敵視せしが、今や噠馬王室の争ひあるを見て、過大の要件を以てクリスチャンを助け、其議納れられざるや、ゾンデルボルグに幽せらるるクリスチャン二世を復すと揚言して、オルデンブルグ伯クリスチャンを勸めて噠馬を伐たしむ。噠馬乃フリ

ードリヒ故王の長子を立て、クリスチャン三世と爲し瑞西王グスタヴウザの援を得て連りに外兵を破る。之を伯の戦役といふ。千五百三十六年和議成り、僧侶と農民とは屈敗し、貴族官吏權を諸威嚇馬に弄するの端を發し、新教派歐北諸國を風靡して終にアイスランドに及びて、殆んど北方の地を窮めたり。

西の方英吉利を見れば、夙にキクリフの教界改新の唱首たるありしも、大陸にルーテル、ツキングリの新義を唱提するや、國內未だ動かず、革新の緒は却つて一び羅馬教皇の黨たりし國王ヘンリー八世によりて解かれたり。ヘンリー八世はヘンリー七世の第二子にして、千五百三年その長姉マルガレットは蘇格蘭王ジェームス四世の妃と爲り、一百七十年來相反目せし英蘇兩國始めて和好を得、後百年を経てジェームス一世の英蘇統一の淵源を此に託せり。マルガレットの婚後六年、ヘンリー即位し、兄アーサーの寡婦アラゴンのカタリナを納れて后妃と爲し、治世の初、銳意治に勵み、英主の名あり、西班牙王カルロス羅馬教皇等を連和して、佛蘭西に抗し、千五百十三年親ら海を渡りて佛軍を破り、翌年妹メリーをルイ十二世に嫁するを約して和し、次で佛王の黨與たる姉夫蘇王ジェームスの入寇を撃破して之

英王ヘンリー八世の初世

護法王教皇と
乖離す

を斬る。蓋し當時西南歐には佛蘭西、西班牙の覇を伊太利に競ふありて、互に英吉利の歡心を得るに力めしかば、ヘンリーその間に乘じて威武を逞ふす。ヨーク大僧正トーマス、グルンシイ國事を用ふる十五年、カール五世より教皇と爲すの約を得て、千五百二十一年佛蘭西夾撃を約し、教皇レオ十世また與り、ヘンリー八世はルーテルの革新を唱ふるを駁して、小篇を著はし、教皇より護法王プロテスタンツァーの美稱を享けたり。然るに後六年を経て王は羅馬教會に畔きて、英吉利教會の獨立を爲すに至りしは奇とす可く、既に羅馬と絶ちて後、英吉利王のなほ歴世護法の稱を冒すは更に奇なり。其來由を討ぬるに、ヘンリーの妃カタリナは王より長すること六歳、王は此縁に由りて帝位の候補たりしことありとも、終に之を得ず。其二子夭折し、其色衰ふるを見て悦はず、之を廢せんことを羅馬に訴へ、若し聽かれずば羅馬と絶たんと威喝す。適ま妹佛蘭西王妃メリーの宮に奉侍せしエーリッポレンバ里より還りてカタリナに侍す。千五百二十七年に芳春正に二十、ヘンリー其美を喜び、廢後の意益堅きも、教皇クレメンヌ七世はカール帝を憚りて決せず。蓋しカタリナは實に帝の叔母なればなり。ウルシイは教皇の位を得ざるを憤り、王の爲に

ルイ十二世の公主を娶り佛蘭西と結びて帝に報いんと欲したるも、王が公主を排してエーンプォーレンを立てんとするを看破するや、之を妨げて王の怒にふれ、千五百二十九年十月職を失ひ罪を得て憤死す。王乃トーマス・モリア、トーマス・クロムエルを任用して國會を召集し、其議によりて重税を僧侶に課し、自ら教會の元首と號し、翌年更に僧徒の權を削殺して、教皇に酬ふ。然もクレメンヌは利害相及ばずとして顧みざりしが、千五百三十二年ヘンリーが羅馬に輸する歳貢を否定するや、教皇は初めて驚き、トーマス・モリアも爲に職を辭し、クロムエル王をたすけて連りに新派を勸む。翌年春王は教皇の許可を待たずして終にエーンプォーレンを立つ。カンターバリー大僧正クランメル爲にカタリナの婚を不當と宜し六月新後の戴冠式を舉げ、英吉利議會は國內の教皇の諸權を否認し、千五百三十四年僧侶は皆王命によりて會す可く、宗制は王の裁可を經可く、悉く羅馬に輸し諸貢納を禁じたり。斯くて英吉利羅馬の交誼は全く破れ、國中の僧舍寺院は悉く王家に歸し、國中を新六僧正領に分てり。然れども大陸諸國の改革は主として宗義革新なるも、此土の改革は實に政治的の改革にして、抗抵派と雖も英吉利教會に

英吉利教會と
新舊兩教派

血律

ヘンリー八世
の妃子

屬し王を教界の主と仰がざる者は羅馬舊教徒と等しく迫害禁厄を免かれず。國會によりて化體、獨居、供養、懺悔の教義を定め、苟も其制を破る者は極刑に處すと爲せり。然れども國會國民は羅馬と分離せしを以て甘んぜず、進んでルーテル、ツキングリ、若しくはキクリフ、フス等の新派に赴かんとし、エセックス伯トーマス・クロムエルは宗界の革新に力むるに急にして職を奪はれ、キンチヌター僧正ガイデナー事を用ひ、千五百三十九年有名なる諭告六條を發し、羅馬教會の所定の儀典に背く者を重刑に當つること、爲せしかば、クロムエル之を争ひて千五百四十年終に刑死したり。世に此の諭告を稱して血律といへり。

千五百三十五年の末ヘンリー王の前妃カタリナ薨じ、翌年后エーンプォーレン姦通の疑案を以て誅せられ、ジーン・シーモル國色を以て后位を得しが、二年に滿たずして千五百三十七年十月に歿す。次で千五百四十年王はクリーヴス公の妹エーンを立てしも半年にして之を廢し、更にカセリン・ハワルトを納れしも亦姦通を以て誅し、終に千五百四十三年カセリン・バルを立てたり。蓋し六比后妃を更ふるは異常に屬すと雖も、ヘンリーの意は専ら正嗣を求むるに在り。カタリナの

エドワード六世

出にメリー、エー、ン、ボレインの出にエリザベスありと雖も、みな母後の故を以て正嫡たるを得ず。ジェーン・シモルに王子エドワードあれども蒲柳の質にして人皆之を危めり。千五百四十七年ヘンリー八世歿し子エドワード六世立つ。叔父ソマーセット公、カンターベリー大僧正クラムメルと之を輔翼し、通俗祈念經を編纂し盛に新派の教義を鼓吹したり。王の末年ソマーセット公薨じてノサムパーランド公事を用ひ、子ギルトフォード、ダッドレーの爲にヘンリー八世の従女孫ジェーン・グレイを娶り、千五百五十三年七月エドワード歿するやメリー、エリザベス二公主を排してジェーン・グレイを擁立す。而も國民はメリーを立て、ジェーン・グレイを誅し一時英吉利はまた舊教に復歸せしも、新派の民心に浸染すること既に深く、メリーの世を終ふるとともにまた新教に向へり。

蘇格蘭の狀勢

蘇格蘭王は從來英吉利との抗爭よりも深く北方ケルト諸會の鼻強に惱めり。アイルスの君は歴世ヘブリデスの元首を以て權威蘇王を凌ぎ、千四百十一年ハルラウの戦に挫敗せしも餘烈尙存し、ハイランドの諸會強横にして王命を重んぜず。然るに千五百十三年九月ジェームス四世南下してノサムバランドを侵し、義

獨帝佛王の離合

兄ヘンリーの將サレー伯とフロッチン野に戦ひて戦死するや、十三伯十五男會帥土豪皆斃れ、蘇格蘭の封建貴族殆んど竭く。時にヘンリー王の姪たるジェームス五世は僅に一歳なり。然るにヘンリーの羅馬教皇と絶つやジェームスは伯父の勸に從はず、千五百四十二年英師の入寇を境上に擊破し、ノルfolk公の軍を威壓し、貴族の諫諍を容れず。オリヴァー・シンクレルを將として南征せんとして敗れ、憂憤して歿し、公主メリー立つ。蓋し王は舊教を墨守し貴族は改革派を重んじ上下相和せずして此に及びしにて、革新の首唱は巴里獨逸に遊びて大陸革命の氣を傳へたるパトリック・ハミルトンにて、後ジョン・ノックス出づるに及び新派遂に盛なり。千五百三十八年佛蘭西王フランソアはカール帝と連和しともに英吉利を伐ちて三分し、北を蘇格蘭に與へ、自らテムス河南を取り、帝をして其間を得せしめんと謀り、羅馬教皇パオロ三世之に加はりしも、適ま土耳其の西侵急にして皇弟埃公フェルナンドは敗れ、且匈牙利女王チーデルランの攝政たる皇妹マリアは課税兵役のことを以て帝の故郷ゲント(ガンの)民怨を買ひ、千五百三十九年府民蜂起し救をフランソア一世に乞ふ。フランソアは應せず、翌年カール帝路を佛蘭西

に借りてゲントに入り、亂民を嚴罰し、古來享有せし市府の自由を遞奪す。ゲントの衰へてアントワルプの興るは此に始まり、是に於てフランソアは帝にミラノを乞ひしも帝與へざりしかば、深く之を憤り、翌千五百四十一年帝南征して麻訝末教賊をアルジールに伐ちて敗るゝを聞きて、大に悦びて救はず。帝王の交誼此に破れ、フランソアはクリュークス公と結び、瑞典噠馬と相援けて帝に當らんとす。時に瑞西にはジョンカルギン出で、新教益盛に、抗抵派は政争の紛々たるに乗じて勢力を扶植せしも、帝は外土耳其を恐れて力めて内訌を避け、女王マリアも専ら對佛對羅政策を執り、教皇も敢て迫まらず。耶蘇會を興して内改革を圖り、レーダスブルグ國會は宗教和議を延期せり。千五百四十二年佛蘭西王は三軍をネーデルラントに、二軍を西班牙の境ビエモンテに出し、西南に破れしも、東北は連りに利を得たるも、カール帝のヘンリー八世と結びてクレグ公を降したるを見て敢て公を救はず。麻訝末教の首魁バルバロッサを招きて伊太利を侵さしめ、千五百四十三年與に水師を將てニツアを陥れしかば、基督教徒は皆佛蘭西王を惡くみ、翌年スパイエル國會にて帝は土耳其の愛を攘はんには佛蘭西を敗る可しと

トリエント會議

ルーテルの卒

云ひ、噠馬は佛蘭西と絶てり、佛蘭西はビエモンテに克ちしも、ローレンは皇師の征伐を蒙り、ブロンはヘンリー八世に陥られ、千五百四十四年九月クレピの和を結び、第二子オルレアン公の爲に帝の公主を娶り、ミラノに封せんと約せしも、公薨じてミラノは依然帝の手に残りたり。かくて佛蘭西は多年の角逐に疲弊せしも、なほ英吉利と戦ふて已まず。教皇パウロ三世其間に乘じて其子をバルマ公に封ず。カール帝之を憤りしも、尙教會を捐てず。千五百四十四年十一月教皇はチロルのトリエント(トリデンツム)に宗教會議を召集す。斷續前後十八年に亙る宗教史上著名の會議實に此に始まり、新舊兩教の向背此に決し、爾後三百餘年教界の運命を決せしもの是なり。然れども其始め會するもの少なく、議開けず、獨逸の形勢漸く迫るに及び、千五百四十六年二月宗教革新の首唱マルチンルーテルは享年六十三にてアイヌレーベンに逝き、四月始めて宗教會議開け、トリエント會議はまづルーテルの説を非とし、古傳不經も聖典として信す可く、羅句譯經獨り憑る可く、教會獨りよく聖經の縁たる可しと決し、次で化體、淨界滅罪、獨身、懺悔及七儀典の制を定む。然れどもドミニコ、フランチェスコ兩派相競ひ、佛蘭西獨逸の僧正

は伊太利人と争ひ、西班牙の緇流また教皇の徒と、末節を論じて決せざるうちに、獨逸のシユマルカルド役起れり、而して此會議中に最も發達して後來世界史上に基督教の運命を指導するに至りしは耶蘇會にして、耶蘇會成立の近因は實にカルギンの新教提唱に在り。

カルギン派

ヨハン・カルギンはルーテルに亞ぎて新教興隆の木鐸なり、カルギン原の名はジャン・シローエン、千五百九年ピカルヂーのノアヨンに生れ、少うして疑を羅馬教に挿み、巴里に改革を唱へてフランソア王の妹ナブラのマルガレトの保護を受けしも、終に國を逐はれて江湖に漂泊し、千五百五十五年「耶蘇教制」を著はし、千五百四十一年瑞西ジネーヴ共和府に據りて其教を天下に公にし、天下翕然として之に向ふこと響の應する如く、抗抵教派爲にまた振ふ、その「耶蘇教制」の出づるに當りて、西班牙の勇士ドン・イニゴ・ロベツ・デレカルデは耶蘇教會を組織して羅馬教會に盡瘁せんとす、世にいふイグナチウス・ロヨラ(サンチニ阿斯)是なり、千五百二十一年佛軍ナブラを征するやロヨラはパンベルナに傷きて囚虜と爲り、聖徒傳を讀みて奮起し、躬踐力行宗教に盡瘁し、遠くエルサレムに詣り、かへりて羅馬に

ロヨラの耶蘇會

入り、千五百四十年土耳其西侵の日、教皇パウロ三世の命によりて同志と耶蘇會を創め、少壯を教育し、教を民間に説き、異教及び不信の徒を防ぎ、宣教弘法の使徒を派遣して基督教の宣布流傳を謀らんとし、久しく有名無實なりし形式虚儀を打破して専ら實功を奏せんことを期す、一時西方世界を席捲せんとせし新教の勢を防止し、南方加特力の地を存したるもの、海外宣傳の蹟と與に實に耶蘇會の功に負ふこと多しとす可し。

シユマルカルド戦役

獨逸新教派の諸侯はカール帝の武力を以て新派を壓せんとするを見て、千五百四十六年七月終に兵を起す、帝は獨逸、西班牙、伊太利の衆を合せて親征し、サクゼン公モリツ之に通じて勢を振ひ、シユマルカルド同盟の領袖サクゼン撰侯ヨハン・フリードリヒ、ヘッセンのフリーツプはアウグスブルグの將軍シユルトリンに掣肘せられて各引き還り、フリードリヒはモリツの占領せるサクゼンの地を復す、帝時に南の方ウルム、アウグスブルグ、ストラスブルグ等を伐ちしが、千五百四十七年フリードリヒを追躡して四月之をミュールベルグに擊破して侯を生擒し、悉く下サクゼンを降だし、皇弟フルデナンドはベーメンを平ぐ、然るに此年英吉利王ヘ

英佛の向背

ンリー八世歿し、次で佛蘭西王フランソア一世また歿して子アンリー二世嗣ぎ、フランスの主たるカール帝を戴冠式に列せしめんとし、パウロ三世また新王を助けて帝を拒ぎ、伊太利のジョヴァンニ・フェスコは佛蘭西の爲に帝黨たるアンドレア・ドリアを刺さんとして其従孫デ・ネチノ・ドリアを殺し、伊太利亂れ、教皇はトリエント會議をボロニヤに徙す、帝乃二十六條のインテリムを發して教争を決せん、とす、新舊兩徒ともに之を非とし、アンリー二世は父王の遺言を用ひず、ギース黨の人々をして對外の事を執らしむ、ギース系はロレーヌ公レネ二世の第五子より出で、蘇格蘭王ジェームス五世の妃は實に其家より出で、公主メリーを生みしかば、ギース黨は佛蘭西太子フランソアの爲に、英吉利宰相ソマーセット公は王エドワード六世の爲に、皆メリーを娶らんとす、偶ま聖アンドロウ大僧正ピートン殺されて蘇格蘭亂れ、佛兵至りて聖アンドロウを陥れ、ソマーセット公また境を侵す、女王乃女メリーを以て佛蘭西に歸し、佛英敵國と爲りしが、ウルキク伯英相と爲るに及び、千五百五十年三月ブローロンを割きて和を佛蘭西に約す、然るに教皇パウロ三世歿し、此年二月ユリアノ三世立ちて帝と和し、また會議をトリ

エントに徙し、帝は西班牙の宗教裁斷をチーデルランドに移し、嚴刑を以て北方の抗抵教派を歴せんとし、千五百五十年七月アウグスブルグ議會に於てさきにシニカルカド同盟に反きてジョン・フーリドリの地を奪ひしサクセン撰侯モリツが徐ろに反意を示せるを悟らず、之をして同盟軍の根據マグデブルグを襲たしむ、千五百五十一年十一月モリツはマグデブルグを陥れしも、抗抵派を厚遇し、また竊に外佛蘭西王アンリー二世とフリーデバルト條約を結び、内新教諸侯と結合し、翌千五百五十二年春突然兵を興して起ち、新教擁護、帝國憲制の安保シニカルカド役に囚へられしヘッセンのフリップを救ふを名とす、時にカール帝インスブルクに在り、報を聞て大に愕きしも、事急にして防ぐを得ず、ギルラハに出奔し、トリエントの會議爲に解散し、佛蘭西王アンリーは邊境の諸市府を陥れ、八月教皇とバサウ條約を結び、ヘッセンのフリップ、サクセンのフリードリヒを放釋し、南方にては佛蘭西に通せしバルバロッサの艦隊、麻罽末教冠ドラグートはアンドレア・ドリアをボンツア島に破り、ナポリ、シエンナ皆帝に背き、ブランデンブルヒのアルブレヒトは帝の内意を承けてバサウ條約を認諾せず、リネブルグのジーエルスハ

アウグスブル
クの宗教和議

ウゼンに戦ひて敗れしも、新教派同盟の領袖サクゼンのモリツは傷を蒙りて死せり。時に千五百五十三年にして、モリツ年三十二七月英王エドワード六世歿し帝の従妹メリー位に即き議會國民の意に背き舊教復興の爲に、翌年帝の皇子ナポリ・シチリア王ミラノ公フィリップと婚す。帝之によりて一勢力を加へしも、今やまた往日の勇なく、伊太利にはフィレンゼのコスモ・メヂチ權勢を振ひ、その疎族メヂチノはシエンナを陥れ、マリニャノ侯と爲りしも、幾ならずしてミラノに歿す。千五百五十五年帝はアウグスブルクに於て和を議し、所定の教條を承認せし侯伯都市は信文の自由、改新輸入の權利ユス・レフォルマンチを得、新舊兩教徒同等の政權を得しも、たゞ僧侶にして抗抵派に歸する者は官位封邑歳入を公沒せらるゝことに決し、歐洲を聳動せし基督教改革は茲に一局面を劃せり。之をアウグスブルクの宗教和議と稱す。次でカール五世は十月皇子フィリップを英吉利よりブリュセルに召して西班牙王位を譲り、ナポリ、ミラノ、フランシスコ、ネーデルラントを併せ傳へ、翌千五百五十六年九月皇位を皇弟フェルチナンド一世に傳へ、ハブスブルグ家の世襲地を以て之に屬し、親らブラセチアのサン・ユステテ寺に遁世し、千五

百五十八年九月に至りて殞落せり。

之より先二年、イグナチウス・ロヨラ歿せしも、其徒四方諸國に傳導を力めて不撓屈せず。之より後六年、ヨハン・カルギン歿せしも、其流を汲むもの諸國に多く、爲に教界の弊風を一洗し、學問は進歩したりと雖も、新舊兩派の争茲に盡きたるに非ず。唯概論すれば新教は主としてチウトン種、則ち日耳曼スカンデナヴィア民族の間に行はれ、羅旬ケルト種は概ね舊教會に歸依して、昨かず、其大勢は約此に定まれり。と見る可し。或は曰く此分離を見しは北方日耳曼種が南方羅馬種の下に屈するを耻ぢて、歴世の氣運此に發したるものなり。と之を要するに、教界の離合に起りし全歐の争議は、之より後年を歴るに従ひ漸く一變して、政權の角逐と爲り、爲に列強の面目を一新するに至り、西班牙の盛衰また此角逐と始終せしを知る可きなり。

第二章 土耳其と東南歐

イスマイル・シャー、セリム一世の征略、エチオピア匈牙利の征服、バルバ

ロッサ兄弟、スレイマン・エル・カナイの西征、土耳其佛蘭西の通好、佛陀の陥落、土軍維因を圍む、スレイマンの再征、カール帝對ハイルエツァン、マルメロッサ、グイッチとマルメロッサ、エネチアの領亡、土耳其佛陀を取る、カール帝兄弟の失敗、マルメロッサ、ドクラドの交代、ヨハン・シギスマンド、フェルザナンド一世、マクシミリアン二世、西班牙王フェリペス二世、マルタ島の聖約翰士、スレイマンの祖、セリム二世、レマントの海戦、セリム、アマラートの繼承、土耳其と英佛との關係、アマラート三世の西征、ムハメッド三世、シトフトロク條約、土耳其の領土、その富昌、露西亞のルリク朝、波蘭の諸王、露西亞サミトリの興、ロマノフ家の興始。

歐羅巴に於て基督教派分裂し基督教國攻争せる間隙は麻訝末教國たる土耳其が乗すべきの好機たり然れども其西侵の時に方りてまた東顧の憂生じたり波斯の崛起是なり波斯の崛起は中央亞細亞の特穆爾大汗國の崩解に託源すと雖も事は東方と連なるを以て唯其來由を略敘するに留めむ千三百八十一年特穆爾の建置にかゝる土耳其東境の汗國は十五世紀の末に崩裂の端を啓きその第四子シャハルックベハデル波斯に據り四十三年の盛治を致せしも千四百四十八

イスマイル・シャー

年に殞してのちは波斯また土崩瓦解し其東半は月即別の爲に略せられて基華新汗國に陥りしが後數年にして西波斯にイスマイル・シャー(亦思馬因)出づ昔麻訝末教國の盛なるや哈利發繼承の争によりてソクナ、シャー兩派と爲り印度より西班牙に達する全教徒は皆オミヤー家に歸せしも獨り波斯はアリー、ファチマの後を正統とし、他が默伽の麻訝末廟に賽するが如くケルベラーのアリー廟に詣で、またクーム、メシドを靈域として久しく節を更へず豫言者の直系たる十二聖僧を崇敬し其後必ず興るありと信せり十四世紀にアルデビルに第七聖僧ムサの後胤セイクサイフありて名聲甚高く子サドルウッヂン地方の酋帥と爲るサドルウッヂンの孫エナイドに三子ありイスマイルは其季子にして千四百八十年を以て生る年十八にして裏海のギランに入り少兵を募りてバクを取り衆一萬六千を得て追討使アラムト酋帥を破りてタブリヅに入り千四百九十九年自波斯のシャーと號す即ソフ朝の太祖にして波斯此に於てまた起り千五百十一年イスマイル東波斯の月即別よりは呼羅珊バルクを奪ひてより勢轉強大にして四隣の憂患たり土耳其の櫻里丹バチャシッド二世亦之を憂ひしも天資優柔年また老ひ

セリム一世の
征略

て之に當り得ず、寵子アクメトを後とせんとして長子クルドと合はず、内訌相
 繼ぎ終に季子セリムは新隊ニエズに擁立せられ、千五百十二年父バダシッドをして位を
 ルメリアのデモチカに避けしめて途に之を毒殺し、二兄五姪を殺して櫻里丹と
 爲る。セリム一世是なり。波斯のイスマイル・シャーは土耳其の内訌にアクメトをた
 すけ、ソシナ派を虐待したりしかば、セリムは千五百十四年波斯を侵し一びイス
 マイルを破ふりしも、失ふところ多く將士また進まず、退きて敵の尾撃を受けて
 破れしが、翌年再舉東征しデアルベキルを取りクルヂスタンを陥れ、威をワシ、メ
 ソポタミア地方に立つ、シャー乃アバシド家の後嗣たる埃及哈利發と通じ、土耳
 其を夾撃せんことを謀りしかば、セリムは轉じて志利亞を撃ち、千五百十六年八
 月アレppoに勝ちバレスチナを徇へて埃及に迫まる。哈利發憤恚して殂す。翌千五
 百十七年春埃及の將ツーマン・ベイ土耳其軍をカイロ府外に邀へ戦ひて敗績し、
 嬰守旬日、府城陥り、徹服して遁れしも終に捕へ殺さる。セリム兵を縦ちて剽略誅
 殺を擅にしアバシド家最後の哈利發麻訶末十二世を挿みて北に回り、馱伽エル
 サレムを巡拜してコンスタンチノポリスに還り、麻訶末より豫言者の偃月劔聖

エチチア、匈
牙利の微弱

旗法衣を得しかば、ソシナ派は爾後土耳其櫻里丹を以て麻訶末教界正嫡の元首
 と爲せり。たゞシャー派はもとより此に服せず。波斯は一時勢に屈せしもなほ千
 五百十九年ゲオルギアを取りたり。土耳其の波斯、志利亞、埃及に勝つや、其西隣匈
 牙利エチチアは自ら安んぜず、エチチアは土耳其の新捷を賀し、從來ブルス占有
 權の代償として、埃及に輸せし歳貢八千ヅカトを土耳其に輸し、千五百十七年和
 好を修めたり。匈牙利は嘗て東歐の一強國たりしに、ウラヂスラウ王政道を得ず、
 上下貧弱にしてチブス伯ヨハンツァ、ホルヤ國王擁立の功を負ひて事を用ひて國
 難を平げ、王の殂後威福を私せんとして貴族の忌むところとなりて外に遁れ、ウ
 ラヂスヅラの王子ルドギヒ二世位に即きしも國勢益揚らず、東歐の重鎮弱くし
 て土耳其西侵の途開けたり。羅馬教皇レオ十世之を憂ひ、歐洲諸國に十分一税を
 課し詔を發して基督教諸君王に五年の休戦を爲さしめ、マクシミリアン帝を大
 元帥として東の方土耳其を伐たんとす。然るに昔は遠く十字軍に従ひて異域に
 征きし歐人も、今や時勢一變して外教徒の來侵を防ぐの真情なく、獨逸、西班牙、英
 吉利皆起たず。セリム若し機に乗じて匈牙利に入らば向ふ所風靡せしならんに、

バルバロッサ兄弟

スレイマン、エルカナイの西征

新隊數ば反を謀りしを以て外に出づる能はず、千五百二十年九月都城の疾疫をアドリアノポリスに避けんとして途上に斃る。子スレイマン二世立つ。世に所謂エルカナイ(大帝)是なり。時にミチレネの産ホルジュあり、少壯にして麻譚末教に歸依し土耳其私船に乗り地中海に出没して伊太利、西班牙の富貨船を暴奪して一艦隊を組成し北亞非利加ツニス、ゴレタに據り國主ムレイムハメッドベイの保護を受け梟雄の名を博しバルバロッサの稱あり。バルバロッサの名は基督教徒其紅髯なるを以て名けしにや。將たババ(大爺)ホルジュの轉訛なるや詳ならず。千五百十二年バルバロッサ戰場に一臂を失ひしもアルジェリ人を助けて西班牙人を攘ひ、千五百十六年西の方フヅに抵る地を領有せしが、後二年西班牙の追討軍とマイレー河畔に戦ひて敗死す。弟カイルエツチン代りて衆を領しまたバルバロッサ二世の稱あり。兄の失蹟に鑑みて孤立の危きを知り土耳其櫻里丹セリム一世に降りてアルジェリア代王と爲り、以てスレイマンの繼承の時に及べり。

櫻里丹スレイマン既に立ち、和をエネチアと講じ、使を匈牙利王ルドギヒ二世に遣はし、幹都蠻帝國の附庸と爲りて歳貢を納れんことを約せしむ。匈牙利其使

土耳其佛蘭西の通好

を執へ殺す。スレイマン怒り大軍を發して三道並び進む。ルイ王救を羅馬教皇、皇帝、エネチア共和府に乞ひしも皆救はず。千五百二十一年七月サバツ陥り、諸堡壘を望みて潰え、ベルグラドの鎮兵善く防ぎしも、ブルガリアの傭兵内應して八月城陥りて匈牙利の運旦夕に迫りしが、偶まスレイマン轉じてロデスに向ひしを以て一び危運を免れたり。千五百二十二年六月スレイマンは水師を以てロデスを攻めしに、聖約翰士の大主フィリップよく防ぎ戦ひ、十二月に至り始めて和を乞ひて退き、後千五百三十年カール五世よりマルタ島を得て之に據りたり。ロデス陷るの翌年希臘の賤族にしてマクテシアに人と爲りしイブラヒムパシヤ土耳其の宰相と爲りて匈牙利侵畧の策を劃し、スレイマンを勸めて波蘭、佛蘭西二王と連和せしむ。フランツァ一世の楚囚と爲りてマドリッドに在るや、使者を發し珍寶を齎して土耳其に通せしむ。使者は途上ボスニヤを横ざりサンジャクの爲に害せらる。世或は以てカール五世の皇弟埃地利のフェルチナンドの命に出づと爲す。然れども千五百二十五年の末佛土同盟遂に成り、翌千五百二十六年四月下旬スレイマン西征の師十萬を將るて途に上り、七月上旬ベルグラドに達す。匈牙利王ル

佛陀の陥落

土軍維因を圍む

ドギヒは庸弱にして士氣廢頹し國庫空乏にして防備怠りしかば、土耳其兵直に進みてペテルワルダインを取り、ドレゴ河を渡り、エセック市を焼き、相イブラヒム・バシヤ新に兵を師めて至り加はり、衆總べて三十萬と號す。ルドギヒ王僅に羸弱の兵二萬を以て之をモハクスに邀へ戦ひ、衆寡精弊素より當らず、大に敗れて戦死す。年二十、スレイマン進んで九月上旬都城佛陀に入り、留ること半月、パイラムの葬式を行ひて東にかへる。是に於て匈牙利、ペーメンは主なく、千五百二十七年二月埃地利のフルヂナンド位にブラハに即く、トランシルヴァニア軍事都督チブス伯ヨハンツァポルヤは之を見て東土耳其、西佛蘭西の聲援を藉り精騎四萬を督してフルヂナンドと王位を争ひ爲に一び敗られしも千五百二十九年スレイマンの助を得てまた争地を侵す。フルヂナンド之を患へ歳貢を土耳其に約して敵を分たんとせしも、スレイマンは此間にボスニア、クロアチア、ダルマチア、スクラチニア等を取り、勢方に盛にして其求を退けて應せず。かへりてヨハンツァポルヤとモハクスの野に會して聖ステファン統の王冠を受け、九月上旬佛陀を取り進みて埃京維因を圍む。時にフルヂナンドはリンツに在り、バイエルンのフリーツァ、サル

スレイマンの再征

ム伯ドンベドロ、デナワラ等と獨逸西班牙の衆二萬二千を以て固守すること二旬餘にして下らず。スレイマン圍を解きてベストに退き、王冠をツァポルヤに授け、十二月中旬コンスタンチノポリスに還へる。かくて匈牙利王の位は尙決せざること數月なりしも、終にフルヂナンドの有に歸し、千五百三十一年早春休戦の約成りて東歐の弊國一時苟安を得たり。

然るに此頃フルヂナンド王はまた羅馬王に拜せられしかば、フランソア王は獨逸の抗抵派と此を排してカール帝に抗し、また土耳其と通ず。カール帝和を土耳其に求めしも、土相イブラヒム・バシヤ應せずして帝を以てたゞ西班牙王と爲し、古都コンスタンチノポリスに都するもの則皇帝なれば、全獨逸は幹都蠻帝領たるべしと爲し、連りに西進を謀る。帝大に恐れてスレムベルグに於てシユマルカルド同盟と和し、歩兵八萬騎兵三萬を以て土耳其を拒ぐ。千五百三十二年四月スレイマンは一百二十門の大砲を以てコンスタンチノポリスを發し、行く／＼沿道の兵を徵し、六月匈牙利に入るに及びては衆三十五萬と號す。フルヂナンドよ

下旬十二船橋を架してドラエ河を渡りて匈牙利を徇へて向ふ所敵なく無人の境に入るが如し。然るにグニススの小壘守成僅に七百に過ぎざるも、八月土軍之を圍み二旬を超えて抜くこと能はず。城市を占領せざるを約して僅に降を納れしも、恰も此時ソムメリング峽より塊地利に入らんとせし別軍一萬五千騎セヴスタアン・シャルトリンの爲に撃破せられ。且アンドレアドリアは水師を率ゐてモレアを攻め、カール帝は新に大軍を會して土耳其を拒かんとせしかば、櫻里丹スレイマン時利あらざるを視、佛蘭西、エネチア使臣の諫を納れて軍を卻けて東に還れり。フェルチナンドは六月下洗既にザボリアより背きし土耳其遊撃兵と和して匈牙利の王位を確立せり。此に於て皇弟始めて安んずるを得、帝は轉じて南地中海上の麻譚末教賊を伐つ。時に西班牙を放逐せられし麻譚末教徒諸國の浮浪等海に泛びてハイルエツデン・バルバロッサに歸し、バルバロッサは土耳其櫻里丹の水師提督アルジュリア代王と號し、その威地中海上を壓し、千五百三十四年ナポリ、シチリア、サルデニアを劫掠し、路を轉じてツニスに赴き、其主ムリ・ハッサンの横虐を懲艾すと稱して其地を取る。歐南諸國爲に震駭し、就中西班牙其害を蒙ること最

カール帝、ハイルエツデン、バルバロッサを征す

大なり。カール帝久しく西班牙に在りしかば終に征南の兵を起す。佛蘭西王フラシオン一世はさきにバルバロッサと和して其援助を假りてゼノヴ克復の用に充てしが、今や帝の此賊を伐つに當りてはまた其虚に乗じて獨逸と争はず。千五百三十五年六月カール帝兵三萬弱を以て南し、水師はゼノヴのアドレアドリアに委し、まづマレタ塞を抜き、バルバロッサを撃破して之を奔らし、其地に奴隸たりし基督教徒の内應を得てツニスを抜き、ムリ・ハッサンの位を復し、海盜を剿滅し、基督教徒を厚遇し、信仰の自由を許可し、毎年一萬二千デユカットの歳貢を納るゝの約を結ばしめ、海に従ひて九月バレルモにかへりたり。此に於て地中海上の麻譚末教徒一時息を屏めたり。

然れども土耳其の侵取の勢は益盛にして、千五百三十四年波斯よりはアルメニア、イクラを取り、亞刺比亞のエーマン其他諸方を占略し、遂に兵を胡茶辣に送りて印度の麻譚末教徒に加勢して、葡萄牙人と争はしめ、水師は地中海上の覇權を掌握す。アンドレアドリアまた之と海上に争ふこと能はず。歐南僅に海寇を免れて歐東また征師を蒙れり。千五百三十四年スレイマンはアロイシオグリツチ

クリツチとバルバロッサと

を將とし兵七千を率ひてトランシルヴァニアを侵さしむ。ヨハン・ツァポリア、フェルナンドと與に兵を興して之を防ぎ、グリッチを斬る。スレイマン大にツァポリアの背恩不信を怒りて百二十萬ヴユカトの償金を課してまた之を救護せず。時に土相イブラヒム・パシヤの權勢漸く衰へ、千五百三十六年謀徒の爲に刺され、スレイマンは爲に一臂の力を失へりと雖も、其兵力尙減せず。遊撃軍はボスニアより進み、十一月フェルデナンドの將カッチャチルを撃破し、また一面には佛王フランソアと呼應を約し、アヴロナのアルバニアに兵を會してバルバロッサをして佛蘭西海軍とともにまた歐南を圖らしむ。伊太利半島爲に震懼し、教皇パオロ羅馬に安んせず。アシンドレア・ドリアはメッシナに通る。千五百三十七年夏バルバロッサ乃一萬騎を以てオトラントに上陸せしも砲礮なくして都城を陥る能はず。捕囚一萬を得、カストロを取りしも佛王は約に背き期に後れしかば、土耳其はナポリ征討の軍を移してエネチアに向ひ、バルバロッサは海上の諸島を攻畧し、翌年伊太利神聖同盟成りしもエネチアを救ふこと能はず。終に千五百三十九年に及びエネチアの請を容れて休戦し、翌年十一月エネチアの衰弊に乗じ峻酷なる條約を結び、悉く占略の

エネチアの瀕

土耳其佛陀を
取る

カール帝兄弟
の失敗

地を領し、三十萬ヅカトの償金を納れしむ。曾て勢威を地中海上に張りしエネチア共和國が殆んど獨立の實を失ふに至りしは實に此に由れり。千五百三十八年ヨハン・ツァポリアはカール帝フェルデナンド王と和し、波斯王シジスムンド二世の女イサベラを妃と爲して一子を擧げしが、千五百四十年七月に殞落し、餘黨幼子を推してフェルデナンド王と争ひ物情恟々たり。土耳其櫻里丹スレイマン虛に乗じて親ら匈牙利を征し、千五百四十一年八月佛陀に入り、ツァポリアの寡婦幼兒を逐ひ、總督府を開き、教會を以て麻譟未教觀宇と爲し、爾後一百五十年領有の基を開き、悉くフェルデナンド王の請託を拒絶し、かへりて塊地利に朝貢の禮を強ひ、十一月の末都城コンスタンチノポリスにかへる。土耳其の勢威大なりと謂ふ可し。是に於て日耳曼諸邦は皆土耳其の侵畧を畏怖して惜かず、千五百四十二年スバイエル聯邦會議にて步騎四萬八千を發して東寇に當らんと議決し、ブランデンブルグのヨアキム二世之を都督し、ベストを取らんとして能はずして退く。スレイマン之を聞き、千五百四十三年また西征して佛陀に留まり、進んでグランを圍み、八月之を陥る。タタ、スツール、ワイセンボルグ、ギツセグラット、トルナの諸城前

後風を望みて皆降り、千五百四十四年土軍はクロアチア、スクラヂニヤに入る。フェルナンド大勢去るを見て翌千五百四十五年和を佛陀總督と議し、二年を経て三萬ヅカトの歳貢を納れて僅に五年の休戦を許されたり。蓋しスレイマン方に東波斯と事を構へんとするに由りてあり、而して皇弟の東土耳其に屈する此に至る時、兄帝カール五世も亦南亞非利加に麻譚末教賊を代ちて志を得ず。帝はツニス征畧の功を待みて、アンドレア・ドリアの苦諫を納れず、千五百四十一年の秋水軍を發して海寇を征し、十月二十日アルジェールに達し、風波の難に際會して船舶漂蕩し、輻重空しく、辛うじて剩殘の軍を收めしも、また疫疾の爲に窘められて、十二月カルタゲナにかへる。西班牙爲に帝に離れ、佛蘭西は其失顛をよろこびて之を争ひ、バルバロッサは部下を發してカラブリアを劫畧し、基督教徒一萬四千を虜にし、マルセイユに航して之を奴隸に賣り、千五百四十三年秋佛軍をたすけてニツアを取り、冬陣をツローロンに張り、翌千五百四十四年四月八十萬クラウンの金を受けて東の方コンスタンチノポリスに向ひ、二たび伊太利を過ぎて半島を震怖せしめしが、後二年を経て千五百四十六年七月バルバロッサはコンスタンチノポリ

マルバロッサ、ドラクトの交代

リスに歿したり。ナトリアのドラグト乃バルバロッサに代りて歐南の海權を制して驍勇の名を博し、西班牙を逐はれしムール猶太人の巢窟ツニス附近のアフリキアを取りしも、カール帝の爲に其地を奪はる。スレイマン乃軍を發して其克復を企てしも、成らず。千五百五十一年八月トリポリを取りて聖約翰の士を逐へり。翌年春土耳其人は復匈牙利の兵を動かし、佛陀總督アリはエズプリム以下數城を取り、五月アーメッドの援兵を得て、テメスグー及びバナットの諸砦を掠奪し、翌年ドラグトはスレイマンの命をうけて佛蘭西に應じてカラブリア沿海を抄掠し、ナポリ海口にいたり、八月上旬アンドレア・ドリアの水師をボンザ島附近に擊破せしも、佛軍期に至らざるを以てひきかへれり。千五百五十五年、六年土軍はシジスを圍みて克たず。此時久しく歐洲の霸柄を握りて大事變の中心たりしカール五世帝は位を皇子皇弟に分ち譲りてサンジュストに隱遁し、年來土耳其、樓里丹と東歐に角逐抗争せしフェルデナンドは皇帝の位に即きたり。樓里丹、スレイマン乃故ツアポリヤの寡妃幼兒を立て、千五百五十九年寡妃イサベラ殞してのち幼子ヨハン・シギスムンドはフェルデナンド皇帝より匈牙利の王號及びシイス河トランシ

ヨハン・シギスムンド

ルヴニア間の領土オッペルン、ラチボルのシチリア公領を請求し、土耳其その後援を爲したり、然るに佛蘭西はアンリ二世の末年國勢振はず、諸子フランソア二世、シャルル九世等相つぎて立ちしも、宗匪教亂漸く激しくしてまた外を顧みるに遑あらず。土耳其はその應援を失ひてコンスタンチノポリス政府漸く西略に倦み、千五百六十二年フェルデナンドと八年の休戦を約し、歳貢三萬ジュカトを輸せしめヨハンシギスムンドと絶ちシギスムンドはトランシルヴァニア諸領に君臨すること、爲れり、然るにシギスムンドは約に背きて後屢ばフェルデナンドの地を侵せしも、フェルデナンドは獨逸政教の繁務に忙くして東顧の間を得ざりき。

フェルデナンド一世帝の位に即くや、國內の諸侯は新舊教派の差別莫く爾後皇帝は帝冠を羅馬教皇より受くるを要せずと決議し、因習久しかりし羅馬皇帝羅馬教皇が紛争の種因は茲に除かれたり、帝は自ら羅馬舊教に歸依して、既に千五百五十六年耶蘇會士の爲に維因に學校を開きしことありと雖も、寛恕の性、治國の術によりては宗派の異同に偏せず、常に力を調停和解に用ひたり、されば北獨逸に於けるルーテル派の諸侯、伯は宗教戦争、モリツの謀圖によりて殆んど皇帝

フェルデナンド一世、マクシミリアン二世

より自立の實を有したりしも、新派中のルーテル、ツキングリ、カルギン諸派各異同を立て、相和合統一せず、バルツの撰侯フリードリヒ三世の如きはゼネラ教派に熱中せり、然れども要するに帝及び後嗣マクシミリアン、ルドルフの世を通じて六十年、國內禍亂なく蒼生太平に安んせしは洵に獨逸の幸福なりき、千五百六十四年七月フェルデナンド帝殞落し、皇子位をうけてマクシミリアン二世と爲りしも、亦宗派の異同に執著せず、自らルーテル派を信するも、政治上は加特力を重んじ、その治世十二年は獨逸の宗教全く和平にして、教争は西隣佛蘭西に暴威を振ひたりき。

獨逸マクシミリアン二世の治平に反して、その従弟西班牙王フェリペス二世の世は最も慘禍を極めたり、フェリペスはカール五世(西班牙のドンカルロス一世)の太子にして、千五百五十六年父の位を襲ぎ、最も篤く加特力教に歸依し、千五百六十八年七月後妃佛蘭西のエリザベトと通じたりとの疑案によりて前妃葡萄牙のマリアの出ドンカルロスを誅せしが、ドンカルロスは深く新教に傾きたるを以て事此に至りしといへり、西班牙はもと基麻兩教ながく紛争の地にして、教熱

西班牙王フェリペス二世

最熾なりしが、ムールの遺民は地方に散在し、フェルナンド一世、カルロス一世の時既に其窘迫誅除を受けしが、基督教に歸依したりと稱する者はマルヌノス人と曰ひ、然らざるはモリスコスモリスコスの舊稱を存し、是に到りてフェリペス王の爲に苦しめられたり、千五百六十四、五年フェリペス王は宗教裁判審司副長スピノザの言を採用して苛法峻刑を以てモリスコに望み、千五百六十六年十一月信教條例アトリスガタを發し、モリスコは風俗言語より以下歌舞音楽沐浴に至るまでその舊によるを得ず、家は戸を鎖し、婦は面を被ひ、人はムールの名を稱するを得ずと爲す、モリスコ困迫の餘、千五百六十八年春終に蜂起したりしに、王の庶弟埃地利のドンファン之を討ち、二年にして悉く其亂を平ぐ、餘衆或はフエッフエッに通れ、或はアルジェールに奔り、西班牙半島のムール人全く其蹤を絶ち、麻訶末教徒は茲に亡びたり。

然れども麻訶末教徒は尙威武を歐東歐南に逞ふし、地中海上の權は土耳其樓里丹スレイマン、麻訶末教海寇の魁首ドラグトの手に在り、始め聖約翰士マルタ島の聖約翰士のマルタ島に據りて麻訶末教賊に抗し、千五百五十九年の秋羅馬教皇パウロ四世ゼノワ、フイレンゼの諸軍とともに西班牙王フェリペス二世を助けてゼルバー島を畧せ

しも、千五百六十一年土耳其の水師提督ピアリの爲に克復せられる。爾後西班牙王は連りに兵を派じて亞非利加沿海のムール人を伐ちて殘虐を擅にせり、樓里丹スレイマン之を憂ひ、地中海上基督教軍の根據を剿滅せんため、千五百六十五年五月大舉してマルタ島を攻む、總督ピアリの率るところ百八十船、兵三萬、トリポリよりドラグトは十三船を發して之を援く、島中の養院士は七百兵九千にす、「さすといへども、首長サンのバリンドラ、ヴレト衆を督してよく防守して下らず、」ドラグトは戰死し、攻圍二月土軍功なくしてひきかへる、シチリア王ドン・カルシアド・トンド援軍を率ひて至りしも、期に後れて功なく、ヴレトは島中に新にヴレタ府を創め、歐洲列強の君王皆使を發して戰勝を慶せり、さればスレイマンは深く敗辱を恥ちて憤恚已まず、赫々の蹟を顯はさんと欲する切なりしかば、八年休戰の約期尙盡きざるに、ヨハン・シギスムンドをたすけて西侵せんと欲し、千五百六十六年五月朔親ら大軍を率ゐてコンスタンチノポリスを發し、二月を経てセムリンに至りてシギスムンドと會し、禿納河を溯りシゲトに達す、シゲトの主ツリニー手兵を以て之を扼し、撃ちて敵の一將を斬る、スレイマン怒り兵十萬砲三

スレイマンの

百を以て之を圍み、僅に之を陥れしも、九月四日スレイマン瘵氣に中り病んで歿す。此時南方にては水師提督ピアリはキオス島を下してマルタ敗挫の耻を雪ぎしが、其貢獻至らざるに及んで櫻里丹世を去りしは惜む可し。スレイマンは賢良の英主にして内治安を圖り外征略を遂げ、帝國の憲制を完美し、ボスタングスの衆を新設して園丁と爲して實は兵權を假し、新隊エニチキと均衡せしめ、都城コンスタンチノポリスの盛大繁榮を謀り、道路を通じ橋梁を架設して國中の交通の便を進め、詩文學を奨励し、自頌神の篇什あり、前後四十六年の治世よく土耳其の名聲を天下に擧げ、幹都發帝國の隆昌此に及びて極まれりと謂ふ可し。

スレイマンの長嗣子ムスタフは頗る乃父の風ありて重く民望を負ひしに、スレイマン晩年露西亞の美姫ロクソラナを寵し、其讒を信んじて千五百五十三年ムスタフの波斯に通ずるを疑ひて之を誅す。ムスタフの子ムハメットまた害せらる。此に至りロクソラナの出セリム二世立ちてスレイマンの後を嗣ぎしも、優柔放縱にして土耳其の業此より漸く衰へたり。マクシミリアン帝は櫻里丹交代の變に乗じてまた八年の休戦を約し、トランシルヴァニアよりティス河に至る地を收め、

セリム二世

レバントの海

シギスムンドは依然として舊土を保ちしも土耳其の領屬は戦前に比して漸く少し、而もセリム二世は眼を轉じて南方を経營せんと欲せしかば、また以て意と爲さず。此時に方り故のキプルス王國はエチチアに屬すること既に八十年、エチチアは三び土耳其と戦ひて常に敗績し、殆んどその附庸と爲りしかば、セリム櫻里丹は千五百七十年七月水師提督ピアリをして船舶三百六十艘にムスタフ、パシャの兵五萬を載せて之を伐たしむ。島中のエチチア兵三千人ニコシア、ファミゴスタ二城に嬰守せしが、九月ニコシア先づ陥り、民兵多く屠殺せらる。ファミゴスタ城中聞きて死を決し、守將マルクアントニオブラガダノ衆を勵まして防守せしも、翌千五百七十一年八月遂に陥り、ブラガダノ以下虐殺せらる。土耳其乃アルパニア、ダルマチア沿海のエチチア領を劫掠す。羅馬教皇ピウス五世は之を聞きて驚き憤り、西班牙王フェリペス二世エチチア共和國其他一二小侯伯と土耳其防禦同盟を組織して神聖同盟と號し、九月の末埃地利家のドンファンを總督と爲し、同盟海軍を率ゐて土耳其の水師をレバント灣に撃つ。十月七日基麻兩敵の水師大に海上に血戦して夜に入りて已まず、同盟軍終に克ち土耳其は船舶二百二十

餘艘兵三萬を失ひ總督アリ、パンヤまた戦没す。蓋し同盟軍の勝ちしは主として
エチチア海軍の力によると雖も、之よりドン・フアンの名最も世に著はる。彼ドン・
キホーテを著はして西班牙文壇に不朽の名を傳へたるミグエル・デ・セルバンテ
スまた此戦に従ひたりき。然れども同盟諸國は一び勝ちて漸く互に相忌み、殊に
主盟ピウス五世の歿後は益相乖離し、また勢に乗じてモレア其他希臘地方の土
耳其人を攘はんとせずして、各其國に引きかへる。之に反して土耳其は一敗の辱
を忍び、奮勵力行軍備を修め、一年を過ぎずして二百五十艘の水師を希臘海上に
游戈せしめて威武を示せしに、フェリペスはエネチアの再び起らんことを慮りて
またたすけず、エチチアは獨り土耳其の衝に當るを恐れて、千五百七十三年三月
七日土耳其と和し、キプルス島の割讓を諾し、ザンテの爲に二倍の貢賦を輸する
を約し、僅に東方貿易持續の特許を得たり。

土耳其エチチア講和の後二年ならずして、千五百七十四年十二月樓里丹セル
ム二世は殞落し、國相ムハメット・ソコリーは太子アムラート三世をマグチシアよ
り迎へ立つ。土耳其興りてよりスレイマン、セルムに及ぶまで、連りに侵略を業と

セルム、アム
ラートの繼承

土耳其と英佛
との關係

して東征西伐武を用ひ地を拓きしが、アムラート立つに至りて政策治安に一變
し、好交を歐羅巴諸國に修めてまた征戰を事とせず、武野の風變じて文治に化せ
しが如きも、また是強昌極まりて微弱の端を生ずるに近し、恰も露西亞の土耳其
と交渉を始めしはセルム二世の末年に起り、また英吉利の土耳其と通するはア
ムラート三世の初世に始まる。後來三百年東歐事變の端緒此に解けて、英露東方
問題の由來久しといふ可し。千五百七十八年の末英吉利の商賈キリアム・ヘーア
ポーン(ハーブルン)女王エリザベスの書を奉じて樓里丹アムラートに見え、千五
百八十一年倫敦にては土耳其貿易會社設立の許可あり、エリザベスは自稱して
偶像教を非とする眞教の保護主と曰ひしを以て、土耳其はその麻罽末教の偶像
禮拜を嚴禁するに似たるを悦びたるも、亦英土二國修交の利便を爲すに與りて
力ありたり、而して夙に土耳其と結びて獨逸皇帝に當りし佛蘭西は、アンリー四
世が新教に背反したるより土耳其の疑ふところとなりしが、尙フランスアンリー一
世に倣ひて自ら東基督教徒の權利自由の保護に任じ、エルサレム聖廟の僧侶の特
權を恢復するを得たり。然れども土耳其の爲に最も重要なるは英佛の交渉にあ

アムラート三世の西征

らずして埃地利、匈牙利との關係にして此が爲に基麻兩教の厚誼また破る、に至りしは、千五百九十三年のことなり、蓋し埃土休戰條約は屢ば重修されしも邊境の侵寇は益繁くして兩國の交誼年と共に穩ならず、此年六月ボスニア總督ハッサン兵三萬を率ゐてクルバ河を渡り、シセク附近に於て日耳曼匈牙利人の爲に擊破せられ悉く輻重砲礮器械を失ふ、國相シナン・パシヤ等乃櫻里丹アムラート三世に説き、八月兵を發して西侵し、十月エスプレームを降し、次でタタ、ラーブを取る、然るにモルダギア、ワラキア、トランシルヴァニア三州は櫻里丹に叛き、獨逸帝に應せしに、トランシルヴァニアの新教徒はかへりて土耳其に應じて耶蘇會徒及び舊教軍に抗敵して同教相殘害し、アムラートはダマスコスより神旗を奉迎し、向背錯綜最も紛糾を極む、其事未だ決せざるに、千五百九十五年一月アムラート三世殞落し、子ムハメッド三世立ちて櫻里丹と爲り、神旗軍を守らず、禿納河上の諸壘連りに陥り、シナン・パシヤ歿す、ムハメッド櫻里丹乃新相イブラヒム・パシヤを從へ親征してエルラウを屠り、千五百九十六年十月下旬埃地利太公マクシミリアン、トランシルヴァニアのシジスムンドと大にケレズテスの平原に血戰すること三日、斬

ムハメッド三世

シトプロック條約

獲五萬、大砲百門を得たり、全歐之を聞きて皆震撼す、然れども土耳其は此大勝に由りて得るところ殆んどなく、兩敵ともに資財盡き兵力窮まりて内切に和好を欲するも、たゞ條款の利を願ひて議成らず、一進一退互に小勝敗ありて決せず、千六百三年十二月下旬櫻里丹ムハメッド三世登遐し、子アーメッド一世つぐ、時に年甫めて十四、土耳其波斯の間に戰役起りしかば、益匈牙利講和の急を告げたり、然るに千六百二年匈牙利の一貴族ステファン・ボチュカイ新教黨の領袖と爲りてシジスムンドとトランシルヴァニアを争ひ、シジスムンド位を失ひてボタリ家滅び、千六百五年ボチュカイは土耳其の匈牙利總督たる首相ララムハメッドと同盟して諸城を攻略し、ラコチュの戰陣に於て匈牙利王冠を受けたり、然れども皇帝ルドルフ二世はボチュカイに説きて王位を抛たしめ、トランシルヴァニアの外になほ匈牙利の采邑若干を加封し、千六百六年十一月土耳其とシトプロック平和條約を締結し、獨逸皇帝の位を承諾せられ、一時に二十萬蘇の償金を土耳其に輸して埃地利所約の歳貢に代え、以て二十年間の好和を約せり、抑もスレイマン前後土耳其西侵の勢盛なるや、眼中また外敵なく、獨逸帝を見る

土耳其の領土

に一維因王を以てせしが、今や此約あるに至りしを思は、土耳其隆昌の運運まりて内既に漸く衰弱せんとするを察す可し、然れども其版圖は尙東はチグリス河アララト山を以て波斯に堺し、北黒海裏海の間は皆貢賦を納れ、南縛達エルサレムは土國の一治府と化し、カウス山よりニーベル河に至る黒海の西南岸アナトリア、カラマニア、アルメニア、クルヂスタン、メンボタミア、志利亞、パレスチナ、亞刺比亞等極西亞細亞一帶の地は皆櫻里丹の威令に屈し、埃及より西シブラルタルの峽に盡きるまで多少の西班牙領を除けば地中海南一帶の地また土耳其に屬し、東歐羅巴にては希臘多島海キブルス、ロデス、キオス諸島、トラキア、マケドニア、ブルガリア、フラキア、モルダヴィア、トランシルヴァニア、匈牙利の過半、ボスニア、セルビア、アルバニア皆新月の旌旗を樹てたり、其廣袤の大羅馬帝國以後絶て見ずして稀にあるところ、また盛なりと謂ふ可し、而して其盛時に當りては都城コンスタンチノポリスに七寶塔あり、第一塔は黄金、第二塔は白銀、第三塔は金銀板寶玉、第四塔は古奇珍物、第五塔は古泉、及びセリム一世が波斯埃及を征して獲來りし古器遺物、第六塔は武庫、第七塔は文庫なりしに、セリム二世多く兵馬を用ひて國用

土耳其の宮昌

足らず、府庫空しく七塔の珍寶を宮中に移し、塔を以て單武庫及國獄と爲す、アマラト三世は一窖藏を造りて珍寶を收め、三重の鎖鑰を附して親ら其上に超臥し、年に四び貢賦の財物を收むる爲に之を開く耳、當時土耳其の基督教徒は壓抑屈辱を蒙り辛慘勞苦して獲る所は悉く土人に誅求強奪せられ僅に其生を保つに過ぎずと雖も、十六世紀の末葉土都コンスタンチノポリスの希臘人は十萬に上りて富資あり、權勢あり、ミケール・カンタクゼヌスの如きは首相ムハメド・コンリーと結託して巨萬の資を作り、その邸宅は善美を櫻里丹の宮殿と競ふに至る、また猶太人は土耳其の重職要路を占むる者多く、希伯來人は概ね土耳其の商權を襲斷したりき、アーメド一世は千六百十七年十一月下旬に歿し、新隊の兵權勢を用ひて、その弟ムスタファ一世を獄中に起こして位に即かしめし、僅かに三月にして再び之を獄裡に投じ、アーメドの長子幹都蠻二世を推立せり、恰も中歐に於て三十年戦争の起るに際會し、土耳其また波蘭と兵を交るに至る、故に土耳其西侵の筆を茲に擱きて、其北に露西亞、波蘭の情勢を簡敘して章を改めむ。

始め千五百五年露西亞の宜萬三世殞落し、嗣王ワシリイ・イワノフ・ギッチは乃父の

露西亞のルグ朝

器略莫く、土耳其の邊を侵すや重賂厚聘を以て僅に其害を免る。然るに其子宜萬四世に至りて頗る祖王の遺風あり、外侵寇を退け内千五百三十三年始めて憲制を定めしが、妃アナスタシア内助の功多きを以て妃の殞後宜萬は強暴に流れて誅殺を擅にし、畏王の名を得、千五百七十一年クリムの塔塔兒邊に寇して都城に入り、後八年波蘭王ステファン・パトリ、瑞典王と連和して來寇し、ナルヴ、リガ及びリヂニア全土を降だしたるも、宜萬は之を拒ぐ能はず、千五百八十四年宜萬殞し子フェオドル一世嗣ぐ。フェオドル庸暗にして君王の實力なく、義弟ボリス、ゴブノフ國柄を掌握し、太弟デミトリ其毒手に害せられしと云ひ、貴族の西比利亞に流謫せらるゝもの多く、后妃貴族黨を樹て、ボリスを除かんとすれども能はず。ボリスの専恣益甚しきも其武功また多く、クリムの塔塔兒を擊攘し、千五百九十三年農奴土著の制を確立して富強の策を講じたり、千五百九十八年の初フェオドルイヴノヰチ殞してルリク家の正統此に絶ゆ。諸族みなつぐ者なし、寡妃イレネ位を受け之を兄ボリスに傳ふ。ルリク家は初より此に至りて五十六主、實に七百三十六年を経て滅びたり。

波蘭は、千四百九十二年カシミル四世の殞後、阿歴山、シグムント兄弟相繼ぎ、露西亞、ワラキアの爲に邊寇を蒙りしも、シグムントは二びワラキアを破りて之を屈して大王の稱を受けたり、千五百四十八年シグムント殞し、子シグムント・アウグスツス立つ。時にリヂニアは露西亞の鋒を避けて波蘭に降り、千五百六十九年ルブリン議會にて波蘭リツアニア合同の約成り、法制租法兵備は殊別なるも、君主は一人を撰むことに決したり、而して波蘭は宗教改革稍行はれしも、なほ羅馬舊教の勢盛にして爭議熄まず、千五百七十二年シグムント・アウグスツス殞したれば、翌年一月議會は諸派教徒の權利を同ふし、佛蘭西王シャルル九世の弟アンジュ・公プロアのアンリを王に推戴せしも、アンリは一年にして去る。よりにて千五百七十五年波蘭の貴族はトランシルヴァニア公ステファン・パトリを推立せり。然るに上に云ひし如くパトリは志を失ひてのち千五百八十六年に殞せしかば、波蘭人はまた君王の種を求めて故ヤゲロン家の出なる瑞典の一王子を迎立してシグムント三世と爲す。獨逸帝ルドルフの皇弟マクシミリアン太公之を争ひ、兵を率ひて波蘭に入りてクラカウを圍みしも、連りに國相ツァモイスキイに擊破せられ、

千五百八十八年シュレンジエンのビッチスに戦ひ敗れて囚虜と爲る。後年餘にしてルドルフ帝爲にチップスの地を割き厚聘を輸してマクシミリアンの身を償ひ得たりき。

是より後十年、露西亞のルリク家絶えて、千五百九十八年ボリス・ゴブヌフ莫斯科に君臨せしが、領内の貴族皆異圖を蓄へ人民は農奴土著制に苦み三び飢饉に遭ふて動搖し物情恟々たりしが、千六百三年皇弟デミトリと稱して立つ者あり。或は實はオトレビエフといふ僧なりと曰ひ、或は眞にデミトリなりと信じ、波蘭王シグムント三世は莫斯科皇子として之を輔け資用兵衆を借して露西亞を伐たしむ。時に千六百四年の末なり、露人可薩克應ずる者多く、僞デミトリは一時勢盛なりしも漸く敗れて波蘭の境に退く。ボリスはデミトリを殺さんとして得ず。千六百五年四月自殺せしかば其幼子フェオドル立ちしも、莫斯科に一揆蜂起して之を捕へ殺し、デミトリを迎へ立て、故宜萬畏王の妃マリヤも亦認めて其子と爲す。然るにデミトリ國に臨むや波蘭の風を探り外人を禁護と爲し、希臘教を奉せずして羅馬加特力派の貴妃と婚せんとするを以て、莫斯科人皆憤怒し千六百六

デミトリの變

ロマノフ朝の
興始

年皇子ツイスキ謀主と爲り都民を煽搖して急に起りてデミトリを殺し波蘭人を破りて代り立つ。然るにまた一賊帥ありて亦デミトリと號し、デミトリの寡妃マリナを捕へ説きて其夫なりと曰はしめ、莫斯科を圍むこと一年又半、露西亞爲に定まなきこと四年に及ぶ。千六百十年デミトリ塔塔兒の一會帥に斬られしが、ツイスキも其前既に波蘭王の破るるところと爲りて亡び、後亂尙三年に亙り、デミトリの殂後此に至りて内亂七年、政令廢し秩序破れ國力消耗し、瑞典人はケキスホルム、ノヴゴロッドを占有し、波蘭王ウラヂスラウは千六百十年親ら莫斯科に侵入し、一時ツイスキに代りて事を執り、みな露西亞に代らんしたり。千六百十三年母系を以て故ルリク家に縁あるロマノフ家のミカエル・フェオドロキッチ、露人の推戴するところと爲り始めて位を正すを得たり。之を露西亞のロマノフ家の始祖と爲す。後來露西亞勃興の運を開きし彼得大帝は實に此ミカエルの孫なり。

以上土耳其の西侵を説きてその昌隆に及び、露西亞波蘭史の端を敘して十七世紀の劈頭東北歐羅巴の狀勢に及びたれば更に眼を轉じて西南歐羅巴にうつらむ。

第三章 佛西英の宗教改革の亂

西班牙王フェリペス、西佛の抗争、カレリの陥落、カトカムブレジの和約、フランスア二世の時勢、英佛二國と蘇格蘭、佛蘭西の戦争と四伊の形勢、フランスアの租落とユグノーの亂、アマホアス令、サン・パルテルミニの慘劇、蘇格蘭女王メアリー、其末路、子イドルランドの來歴、内情、西班牙王室とオランエ公、エグモンド、ホーレン伯、乞丐黨、子イドルランドの動搖、アルプ公の専制、荷蘭共和國の興起、アルプ公の解任、ドン・ルイス・デ・レケモンズ、ラ・ロシエルの降、シャルル九世の祖、神聖同盟、ドン・フアン攝政、ユトレクト七州同盟、荷蘭獨立の布告、#ルンアの死、葡萄牙の情勢、セバスチオン王、西班牙、葡萄牙を併す、バルマ公對モリツ公、無敵艦隊、ミアンリの争役、プロア・アルホン王朝の交替、アンリ四世對加特力同盟、ナントの告示、スウリー公の内治、佛王安リ四世の末世、西世フェリペス二世の晩年、英吉利のエリザベス時代、荷蘭の獨立

異郷の風資を以て殊俗の民を併せ領し、よく均一の政を布き彼此の情宜に通

西班牙王フェリペス

するは英主にあらざれば能はず。カール五世は素より庸暗ならず、頗る政務に通ずるも、なほ外異の風尙を以て西班牙の民心を得る能はざりき。其子フェリペスに到りては遂に乃父の氣宇なくして西班牙の風尙を以て下に臨む。異俗殊尙の獨逸子イデルランドの離畔を招致するは勢の免がれ難きところと謂ふ可し。千五百五十五年十月フェリペスはブルゴニニ、フランドルに君臨したりしかば、匈牙利女王マリアの甥サチア公エマヌエル・フィリップトをして歐北下州の攝政たらしめ、自ら西班牙及び其屬地の政務に専任し、即位の前英吉利女王メアリーと婚し、英吉利は女王即位以來舊教に傾き、羅馬教皇の法使バウロ國都倫敦に入りてよりフェリペスは英吉利王の尊號を兼ね、島王國內抗抵派の迫害は此に始まり、ジョン・ロジャヤを始とし、グルスター、ウースター、倫敦の三僧正、カンターペリー大僧正皆害に遭へり。

千五百五十六年一月フェリペスは、父カルロスの讓を受けて西班牙王と爲りしが、翌月皇帝佛蘭西王の和議成る。羅馬教皇は、此帝王抗争の虚に乗じて自利を營むに汲々たりしかば、之を見て悦ばず、フェリペスの舊教擁護の君たるを悟らず、帝室に

西佛の抗争

對する餘憤を徒して西班牙の使節を執へしかば、ナポリ代王たるアルブ公はフェリペスの命を奉じて兵を發しカムパニヤを横ざりて羅馬に迫り、千五百五十六年十一月和を教皇と約せしも、翌月ギース公フランソアの佛蘭西より南下するに及び好和忽破れ、戦役數月に互る。西班牙王フェリペスは始め西佛戦役の爲に英吉利を煩はさずと約して女王メリーと婚せしも、此に於て約を破り密にメリーを説き、メリーは國人の意に背きフェリペスの爲に兵一萬を出だし、チードルランド攝政エマヌエレ・フィリップトは西英連合の軍に將として八月十日大に佛軍をサン・カンテンに撃破す。其地國都巴里を距ること僅に三十餘里、若し勝に乗じて直ちに進まば佛蘭西爲に震蕩せしならむ。然るにフェリペス王の策此に出でず、まづサン・カンテン附近を徇畧せしめしかば、佛王安リ二世は其間に防備を修め、南征の將ギース公を召還し、英吉利獨逸の衆は早くも戦に倦みて西班牙より離れ、十月フェリペスはブルーゼルにかへる。佛蘭西王乃ギース公フランソアを以て兵馬副都督と爲し、公の三兄弟皆顯要に居り、公家の權威王室を凌ぎ、公は翌千五百五十八年一月英領カレールを奪ふ。カレールは英吉利王エドワルド三世より英領と

カレールの陥落

爲り、嘗て英吉利王が覇權を大陸に争ひし遺彰たりしに、今やメリー女王は夫王の爲に無用の師を興して此地を失ひしかば、英吉利は復尺寸の地を佛土に有せず。英吉利は藉て以てメリー女王の罪を鳴らすに至りたり。之に反してギース公は此地を取りて名聲益揚り、四月姪蘇格蘭女王メリーを王太子フランソアに嫁す。之によりてフランソアは蘇格蘭王と號し、メリーは若し後嗣なくば國土を佛蘭西に併合すべく、佛蘭西は兵力を假し蘇格蘭租賦百萬クラウンをアンリ二世に納れんことを約せり。

斯くて西班牙佛蘭西は兵結んで解けず、士氣漸く衰へて互に利なきを曉り、千五百五十八年秋に至りて和議起り、西班牙王フェリペスはメリー女王の爲にカレールを復せんとす。其議未だ決せざるに十一月十七日英吉利女王メリー殞落して繼嗣なし。英吉利乃故ヘンリー八世が晩年に制定せし王位繼承法によりてエーンボレーンの出、王妹エリザベスを立てしも、國民は未だ其新抗抵派を復興す可きやはた姉王につぎて羅馬加特力教を擁護す可きやを知らざるなり。西班牙王フェリペスは更にエリザベスと婚して西英の連衡メリー女王の舊の如くせんことを求

カトリー・カム
ブレシーの和
約

む。英吉利従はず。フェリペス乃英吉利に絶ちてカネー恢復の議案を撤回し、千五百五十九年四月三日カトリー・カンブレシーの西佛和約成りたり。之より先ギース公の北にかへるや、羅馬教皇はアルヴ公と和し、カトリー・カムブレシー條約に先ちて佛英蘇は別に和約を結び、エリザベス女王は八年間カネーを佛蘭西に貸し、期に至りて返へさゞれば五十萬クラウンの償金を佛蘭西より得可しと約し、以て國人の意を安んせしも、要するに空約に過ぎず。而してカトリー・カムブレシーの約にては西佛互にルキセムブルグ、ネドルランド、ピカルデー、アルトアに於ける侵地を復せしも、佛蘭西はサチアイア、ビエモンテを割きて僅にトリノ以下五城を存し、またトスカナ、コルシカ、モンテ・プエルトを棄て歐洲諸方面に於て總べて一百八十九城邑を失ひたり。假令ワール、メッツ、エルドンの要地を得しといへども、アンリ王の失は以て償ふに足らず。蓋し佛蘭西の此失あるはモンモランシ公がギース家の權勢を削奪せん爲に、國家の利害を外にして好和を急ぎしと、アンリ王がフェリペス王と與に戮力して羅馬教會の争裂を防ぎ新教派の剿滅を圖らんとせしにより、當時西班牙王フェリペスが羅馬加特力派の爲に盡瘁せしは洵にそのところ

フランソア二
世の時勢

なれども、佛蘭西王アンリも亦カルギン派の國內を風靡するを見て羅馬西班牙の宗教裁判法を移し用ひて新教徒を迫害せしが、公主エリザベーを西班牙王に嫁し七月其祝宴を張り武戲を演じ劍を蒙りて竟に起たず、享壽四十有一、太子蘇格蘭王フランソア嗣ぎて王と爲る。フランソア二世是なり。

佛蘭西王フランソア二世の位に即くや、年甫めて十七、實權は后蘇格蘭女王メリーに在りて、女王の諸叔ギース家の威望また隆に、太后メデチのカテリヌの勢軽く、モンモランシ公は采邑に退き、ナブラ王アントン・ヅ・ブルボン攝政たりしも亦ギース家に屈し、ギース家は深く羅馬加特力派に歸依して國中の抗抵派を抑壓迫害す。時に佛蘭西の抗抵派は稱してユグノーといふ。稱號の源明ならざるも或は獨語アイドゲノッセン(盟黨)より出づといふ。ナブラ王アントンにして若し統率の器略あらば此盟黨の領袖たる可かりしに、其器なく、其弟コンデー公路易は隠然ユグノーの首領と爲り、サン・カンテンの戰に従ひし提督コリニエー、フランソア・ダンドロ兄弟また之に加はりて、國會の召集を迫りて拒まる、や千五百六十年二月ナントに會し、密に王をギース黨の手より奪ひてギース黨を除き、ナヴ

英佛二國と蘇格蘭

ラ王安トンをして國事を視せしめんと謀る。謀漏れ朝臣王をロイアのアムボアスに移せしかば、ユグノー起ちて之を攻めしも志を得ず。ギース黨はフランソア王の眼前に無辜を誅殺し殘暴慘虐を極めて以て謀徒に酬ひ、ギース公フランソアまた兵馬副都督に任じ、太后カタリヌと連りしも、ユグノーは之が爲に屈せず、上下新舊の朋黨敵互に相軋轢す。偶ま千五百六十年六月蘇格蘭の太后歿し、ギース黨は水師を發して之に赴かしめ、女王メリーは自らヘンリー七世の後裔なるを以て英吉利女王エリザベスの位を争へり、始めエリザベスの位に即くや英吉利舊教徒の權勢尙強く、北隣蘇格蘭はジョン・ノックスの首唱以來人民新派に趨りしも、女王メリーは加特力派の信仰厚く佛蘭西と連り、西班牙はもとより英吉利の敵なりしかば、エリザベスは頗る難局に立ちしも、徐々王權の振作英吉利教會の復興に盡瘁し、是に於て兵を遣はし蘇格蘭の新教徒を援けて佛軍をライトに破る、佛蘭西乃蘇格蘭を棄て、女王メリーは英吉利王位の望を絶ち、蘇格蘭の抗抵派は是より勢を加へたり、然れどもトキード河北の抗抵派は英吉利の新教と同じからず、寧ろ佛蘭西のエグノーに類す、蓋し其首唱ジョン・ノックスはカルギン

佛蘭西の教争と西伊の形勢

の門に出でたればなり。

斯くギース諸公が外蘇英の事に與れるに乗じ佛蘭西國內朋黨教派の罅隙は日に益太しく、千五百六十八年八月フォンテーヌブローの會議にては、宗教問題を一決せんため十月を以てオルレアンに總國會を開き、翌年一月を以て巴里に國民議會を開かんことを決す。適まモンモランシ公、コンデーの路易、ギース家を謀ること露顯し、王フランソア二世は路易の兄ナワラ王安トンをして路易をオルレアンに召さしめ、之を執へて獄に下す。時に王腫を病む、ギース黨王殂して不慮の變起らんことを恐れ、太后カタリヌにアントン兄弟を除かんことを迫りしも、太后許るさず、アントンを諭し攝政を辭して禍を避けしむ。時に西班牙はカル五世帝が獨逸と併領せしに由りて亦ルイテル派の傳派を免る、こと能はず。セギレ僧正はその則滅を企て、千五百五十九年五月新教徒若干を焚殺し、八月フェリペス王はテールドルランドより還り、羅馬教皇バウロ四世の援助を得て誅殺を以て國內のルイテル派を壓仆せしが、次で教皇殂し羅馬府民は宗教裁判の囚徒を放縱して其獄を焼き、教皇の像を毀ち、其首をチヘル河に投じ、メデチのヂアン

アンジエロ教皇の位に即きてピオ四世と稱す。ギース公等よりて以爲らく、西班牙王新教皇伊太利諸君公は必ず新教則滅を助く可しと。然るにフェリペス二世は財賦兵備乏しくして新教則滅の志あるも救助を佛蘭西に貸す能はず。教皇ピオ四世は初より其意無く、伊太利諸君公中にては獨りサザイア公エマヌエルフ、リベルト兵を出せしも、アドアに破れたり。

既にして十二月フランソア王歿せしかば、太后カタリヌは少子シャルル九世を立て、政を執り、モンモランシ公また兵馬都督と爲り、ナワラ王安トン約によりて兵馬副都督と爲り、ミシエール・デ・ロビタル攝政顧問と爲り、政教の改革を行ひ宗教の迫害を停め新派の囚徒を放釋し逐客を召還し教敵朋黨の均衡を維持せんと力む。蓋しロビタルがカタリヌの意を受けて行ふところなり。然るに新舊兩黨皆就かず。モンモランシ公はコリニの叔父を以て尙ギース黨に通じ、兩黨巴里府中に血を流して相争ふ。千五百六十一年九月九日ボアシに宗教會議を開き、次で千五百六十二年一月サンゼルメインのノテブル會議にて調和令を布きたりしも、兩黨騎虎の勢に乗じて毫も相譲らず。ギース黨之を察してロレーヌに退

フランソアの
祖落とユグノ
の亂緒

き密かに士衆を募りてかへり三月一日シャンバンヌのヴシーに於て抗抵派の教儀を停止せんとして六十人を斬り、二百人を傷く。コンデー公乃コリニト、グードロと兵五千を得てオルレアンを占領し佛蘭西ユグノの教亂爰に起りたり。

佛蘭西に加特力ユグノの教亂暴發せしかば、西班牙王フェリペス、英吉利王エリザベスは各兵六千を發して自黨に應援し、ナワラ王安トンは新派を背きて舊教黨に加はり、十月ルアンを攻めて重創を蒙りしも、ノルマンデーは爲に動く。而も新教派は屈せず、巴里を取らんとして能はず。十二月十九日ドルンに激戦しモンモランシ公を擒にせしも、コンデー公は加特力教徒の手に落ち、ユグノの勢振はず。翌れば千五百六十三年二月ギース公王師の總督と爲りてオルレアン城を圍み、ユグノの刺客に狙撃せられ、死に臨み書を太后カタリヌに上りて講和を勸む。よりて三月太后はアマボアス令を發してまたユグノの信仰を許可したり。然るにアルブ公は太后の女にして西班牙王フェリペスの后たるエリザベトを奉じて密に太后に會見して説く所あり。太后また令を改めて嚮にユグノに許す所を奪ひ、シャルル王はコンデー公を都督に擧げざりしより其心を失ひ、並

アマボアス令

語紛々物情恟々たり、偶まチードルランドに獨立の役起りしかば、王室は邊警を名として大軍を召す、抗抵派の領袖等之を疑ひ、千五百六十七年コンデー、コリュエー等はシャルル九世及び宗室を選して政府を改變せんとなす、事露はる、ユグノーの黨乃巴里を侵して十一月モンモランシ公を途上に斬る、翌千五百六十八年和らび成りしもまた忽破れ、王は悉く抗抵派の宰臣を退け、千五百六十九年三月王弟アンジュー公はコンデー公をシャレントに斬り、コリュエーを奔らす、コンデー戰歿して後はユグノー派の勢大に衰へしも、兄アントン王の妃ジャンダルブレ善く夫弟の遺志を繼承し、親ら王子アンリ、姪コンデー公子を携へて陣頭に立ち、コリュエー全黨の實權を握り、一びモンコンツールに破れしも、勢復猖獗なり、千五百七十一年王室之と和を議し、王妹マルグリットをナブラのアンリに嫁し、兵を出だしてチードルランドの抗抵教を援けんと議し、王深くコリュエーに信頼し、太后權勢の日にコリュエーに歸するを憂へ、偶まチードルランド征師の利を失ひしを機とし、アンジュー公アンリ、ギース公等と之を除かんと謀り、千五百七十二年八月二十二日まづコリュエーを狙撃して中らず、シャルル王に強説してユグノーの慶殺の議を決し、二

サン・パルミエの慘劇

蘇格蘭女王メリー

十三日夜半の鐘聲を號とし、まづコリュエーを刺さしめて虐殺を始む、之をサン・パルミエの虐殺と云ひ、また巴里の血婚と稱す、國內の諸都邑皆之に倣ひ、爲に誅殺せらる、者總べて三四萬に上れり、實に歐洲教亂中の一大慘劇と謂ふ可し、
 佛蘭西王フランソア二世殞落するや、千五百六十一年、夏其配蘇格蘭女王メリーは海を超えて蘇格蘭に還る、時に女王妙齡方に十九蘇國の文化遙に佛蘭西に及ばず、抗抵派の紛紜絶へざるを見て、佛蘭西宮裡の華奢に戀々として忘る、能はず、數ば新派の首唱ジョン・ノックスを引見せしも、素より其老熟熱誠の辯を屈する能はず、政府を抗抵教派の手に委して顧みざりしが、千五百六十五年女王は從兄ダルンリー卿ヘンリー・スタチュアルトを駢馬と爲し、議會の協贊を経ずして擅に王號主權を授貸す、然れども國人尙忍びて問はず、次で女王は、ピエモンテの樂手リチ、を寵し、リチの殺さる、や以て夫王ダルンリーのヘンリーの爲すところと爲して之を厭ひ、ボスエル伯と通ず、千五百六十七年ヘンリー弑せられ、後三月ボスエル伯は女王に尙し、之を挿みてツンバル城に入る、女王敢て拒まず、國人見て遂に耐ゆること能はずして、貴賤上下憤慨蜂起し、女王メリーはカルベリー丘に於て

メリーの末路

降り、ポスエル伯は噓馬に奔る。國人乃メリーをロホレベン城に幽し、千五百六十七年七月迫りて位を避けしめ、幼王ジームス六世を擁立す。ポスエル伯は噓馬王の爲に囚へられ、後十年を経て其地に卒せしが、廢女王メリーは遜位の後未だ一年ならずして脱し、大兵を會して克復を謀りしも、ラングサイドに敗績し、奔りて英吉利女王エリザベスに投ず。時に千五百六十八年五月なり、エリザベスは壽にメリーの佛蘭西より蘇格蘭に入るを拒みしが、此に於てまた其南下して英吉利王位廢立の漸因たらんことを恐れ、自ら進みて蘇格蘭臣民とメリーとの間に正邪を決せんとす。メリー従はずして英吉利に留まる。ノーフォルク公よりメリーと婚せんとし、英吉利國內の加特力貴族、佛蘭西、西班牙二王は皆之を擁して英吉利王に代へんと謀り、謀徒は羅馬教皇ピオ五世を推して謀主と爲さんことを力む。事露はれ、ノーサムバランド、エストモリアランド二伯以下皆蘇格蘭に奔り、ピオ教皇は英吉利女王破門の詔を發す。後數ばメリーを奉じて事を舉げんとする者ありて、メリーも亦意なきにあらず、エリザベス之を惡み、千五百八十六年バビントン隱謀の發するや、メリーを連座し、翌年二月之をフザーリングゲール城に害す。

チードルランドの來歴と内情

メリー英吉利に幽囚せらる、前後十又九年、享壽四十五、後十六年にして子ジームス終に英吉利に君臨せり。

佛蘭西にギース、コンデ諸公の教爭權争あり、英蘇南北に相闘ぐの日、西北歐羅巴にはチードルランド獨立戰役の端緒を啓けり、抑もチードルランドは十一世紀の頃、諸公領采邑、天領都市に分れしが、後漸くブルゴンニュ公家に歸し、千四百七十七年シャルル・テ・メレル公ナンシーに陣歿してのちは、其地女婿、埃地利太公、獨逸皇帝フリードリヒ三世の子マクシミリアンに傳はり、千五百四十八年カール五世は此十七州の地を帝國の版籍とし、ブルグンド道を置き、帝の歿後、此地また帝國より分離して、西班牙王室に歸せり、然れども新附の地、民情國宜合はずして、よく和平を得るは鮮し、佛蘭西に接壤せるチードルランドの四州の民は、古昔ガリアのベルギ種族の後、ワルーン人にして、古來自主獨立の氣尚盛んに、佛蘭西の方語を用ひ、西隣と併合さるゝに難からず、之に反して他の十三州は、西南のフランス、東北の和蘭ともに、多少チュトン種の風を雜えたれば、諸州はみな各一小獨立國の實を有した、各州の使節相會して國會を開き、以て軍國の大事を議す。

故に當初の君王は毫も諸州の共和政に容嘴せず、唯自ら一自由共和國の元首を以て居りしに、カール五世に至り稍や押領の權を用ひ嚴令苛法を以て抗抵教派を制壓せり。此時に方りネーデルランドの富強は驚く可き者あり、其三百五十市、六千三百邑、無數の村落に商賈工匠の數を盡くして孜々怠まず、海外貿易によりて利を射富を積み、アントエルプは西葡二國と印度通商の利を分ちて富饒の中都と爲り、國民は農牧の賤しきもなほ教養洽く、フランドルの技工はよく伊太利と拮抗して他の歐羅巴諸國能く及ぶなし。此の如き民主的文化の地は宗教改新の風動なき能はず、乃獨逸に隣れる地方はルーテル派に趨り、和蘭ゼーランドには再洗禮黨多く、西方のワルーン種族間にはカルギン派に歸する者多く、フランドル人は極力西班牙宗教裁判制度の移用を拒み、教皇の權勢を挫かんとせり。然れども積弊なほ除かず、フェリペス二世に及びて流害益太しく、王は數千の西兵を此地に派駐して民心を抑壓せんと圖る。當時和蘭、ゼーランド、ウトレヒト、西フリースラントに君臨せしはオランエ家のキルレム靜公なり。キルレムはもと中世羅馬帝國に權勢赫々たりしライン河岸のナサウ家に出づ。十六世紀の始ナサウ伯は

西班牙王室
オランエ公
キルレム伯と

ロヴンスのオランエ領を併せて始めてオランエ家を冒せしが、埃公マクシミリアンのブルゴンニ公家を併すに及び、オランエ家はネーデルランドに若干の采邑を有せるを以て埃地利家の臣従となり、引きて西班牙王家の臣と爲り、カール五世は厚くキルレム靜公を信任し、その皇位を皇弟フェルヂナンドに讓るや實に弱冠の靜公を以て使節と爲せり。然るにフェリペス王立ちて公を待つことまた父帝の如く厚からず、其ネーデルランド士民の心を得ざるはナサウ家あるが爲なりとして之を惡み、遂に目して王室の敵とし、憎怨互に加はり年を経るまゝ、に二者隱然敵對の感を生ず。ナサウ領以外ネーデルランドに威令あるはフランドル、アルトアの君たるエグモン伯ラモラル、モンモランシ家の支族ホールン伯フィリップーあり、皆オランエ家と與に西班牙の專恣に快からず。西班牙の執政は、バルマ公オッタヴィオ・ナルチセの夫人たるフェリペス王の庶妹マルガレトにして、アラス僧正グランセラの言を用ゆ。千五百六十三年オランエ公二伯と王に訴ふるところありて、グランセラ退けられ抗抵派一時勢を得しも、幾もなくしてバルマ女公は、フェリペス王の意をうけて迫害を始め、次で千五百六十五年フェリペス王の宸翰を

乞丐黨

ネーデルラントの動搖

アルプ公の事

得て益す新教派を抑壓せんとす。オランエ公は陽に舊教を奉ずるも、幼にして新派の教を受けしを以て、二伯諸貴族とともに密にフエリベス王の横施に抗し、事急なれば兵力を以て争はんとす。バルレーモン伯之を冷誣して是徒一群の乞丐に過ぎすと曰ひしかば、其徒自採りてゲース黨と名く。ゲースは乞丐の義なり。是チードルランドの民王反目の端緒なり。

斯くて民心日に動搖し、西フランドルには政教の説客織るが如く、騎乗街壘を築きて官兵の妨害を防ぐ。執政マルガレト女公大に愕きてフエリベス王に訴へ、王少く譲ると雖も、實は教皇ピウス五世と結びて堅く新教禁止を誓ふ。諸市の民相次で蜂起し聖像を毀ち寺刹を侵凌し、オランエ公は隱に間諜を放ちて西班牙王庭の動靜を探り、且兵を獨逸に募り、自ら終に新教に復歸す。千五百六十六年の末王師ワレンシエンを圍みて戦端を開き、ウトレクトを陥れ、翌千五百六十七年三月王師叛民をアントエルプに平く、オランエ公ギルレム府民を制して戦はしめず、郷里ナサウに退きて徐に形勢の動くを待つ。西班牙王フエリベスは北方の變報を得て親征せんとして果さず、千五百六十七年アルプ公をチードルランド元帥と

しゆきて北方の民兵二政を兼攝せしむ。アルプ公乃兵二萬を帥ゐて八月二十二日ブリュセルに入り、諸府市の成衛を罷めて西班牙を以て代へ、徒住を禁じ擾安法院を置きてジャン・デ・ブルガス以下諸酷吏を用ひ峻刑を以て國に臨みしかば、國人稱して之を慘血法院と號す。マルガレトの在るやなほ力めて其虐施を和げんと謀りしが、マルガレト政令をアルプ公に譲りしより公益狂暴を逞うし、千五百六十八年春宗教審司制を立てフエリベス王の裁可を経て男女老弱を論せず、誅殺を恣にせしかば、市民多く山林に遁れ、市城爲に空しきもの少からず。時にチードルランドの新教はガルギン派なるを以て獨逸のルーテル派は其援助を否みしも、オランエ公ギルレムは尙百方資料を集め、兵衆を募り、此年春チードルランドにかへり、弟ドルギヒはダレムベルグ伯を撃破す。アルプ公愕き六月エグモン、ホーレンシ二伯をブリュセル市上に斬り、自ら進み撃ちてギルレム兄弟を獨逸に奔らし、てブリュセルにかへる。國中震怖して敢て動かす。アルプ公勢に乗じて誅求し一商品につきて十斤、一收入につきて百分一の苛税を課せしかば、國內全く素れ、野に遁れし士官は盜賊となり自ら野乞黨と號して地方を剽劫し、海上に奔りし者は

荷蘭共和国の
興起

海乞黨と稱し、オランエ公より捕船免状を受けて沿海を劫略して英吉利諸港に
 沾却す。是よりアルヴ公は英吉利王と敵視し所在の英人を捕へ其資財を官没し、
 英吉利女王エリザベスは資料を假して獨立黨を聲援す。西班牙政府乃其不法を
 倫敦に訴へしかば、千五百七十二年海寇の雄帥デラマルクは二十四船を率ゐて
 英吉利よりかへり、ゼーランドの最北ブルネ島に城きて根據とし、荷蘭の諸市
 相次で蜂起し、夏八市府の使節はドルトに會してオランエ公キルレムを以て西
 班牙領荷蘭、ゼーランド、フリースランド、ウトレクトの知州事と爲す。是實に荷蘭
 共和国興起の第一著歩と謂ふ可し。荷蘭の形勢此の如きを見し、佛蘭西のユグノ
 ーは使節を送りて之を助けんとす。西班牙王フェリペス大に之を恐れ、後佛蘭西の
 形勢は忽ち一變し、サンバルテルミーの夜の大慘事ありしも、王は之を知らず、使
 を北方に派して多少の讓歩を爲して民心を撫慰せんとす。然るに時已に晚くキ
 ルレム兄弟は諸城を抜きしが、巴里の變報世に聞ゆるや、資糧盡き士衆離れまた
 獨逸に退き、之に加はりしユグノー黨は佛蘭西に歸りて誅せられ、ブラバント、フ
 ランドルの謀徒漸く沮喪す。然れども荷蘭愛國の士氣は益熾にして、キルレム靜

ドン・ルイス・
デ・レケセン

公また歸り、戦役年を連ね、冬は氷雪を踏み、湖河に戦ひ、荷蘭の一艦氷に封せら
 れ、歩卒を以て敵を防ぐに至る。アルヴ公乃渡水の法を軍中に教へて之に應せし
 も、西班牙兵は北方の峭寒に耐えずして、最も之に窘む。千五百七十三年七月アル
 ヴ公の子ドン・フレデリコ・デ・トレドは、ハールレムを陥れて其民を屠りしも、アル
 クマールを圍みし、西班牙軍は志を遂げず。アルヴ公の豪邁なるも、大勢抗し難き
 を視て任に倦み、十二月遂に自ら請ふて職を解きて、西班牙に還りたり。
 是に於て嚮にレバントの海戦に功ありしドン・ルイス・デ・レケセン・スイツニガ
 撰まれてアルヴ公の後任と爲りて、ネーデルランドに趣く、然れども時既に晚く
 して、亂緒を收むること能はず。抗爭の勢益す激しく、千五百七十四年二月下旬ム
 ーク・ヘートに戦ひ、愛國の士敗れ、ナサウのルド・ギ・ヒ其部下とともに之に死す。時
 に、西班牙軍はレイデンを圍み、此勝あるや、攻撃益す急なり。キルレム公はデル
 フイト、ロッテルダムに陣し、事の急なるを視て意を決して、八月三日イセル河を決し、
 ロッテルダムの水門を開き、洪水を引き、ミゼ河口に横溢せしめ、二百艘の平底船
 に糧餉を載せて、レイデンを救はしむ。天候利あらず、風水逆ひ走り、堤防阻隔せし

も、萬難を排して進み、大に西兵と戦ひて之を撃破し、十月三日圍解け、レイデン城中饑疫を免るゝを得たり。マクシミリアン帝はさきに一び調和を圖りて成らざりしが、之を見てまた調停を志し、千五百七十五年の初ブレダ會議を開きしも、效なくして已む。西兵また進み戦ひて勝ち、國軍の形勢殆ど危く、救を英吉利に乞ふ。雖も女王エリザベスは西班牙王室を憚りて敢て救はず。オランエの井ルレム、靜公も大事去れりと爲す。適ま千五百七十六年三月攝政ドンルイス・デ・レケセンス薨じて、ブルネセルの議會は威望失墜し、兵衆功を争ひて暴慢に給費足らずして、縱放に流れ、諸市を屠り、アントエルプを焼き、西領殆んど主なし。愛國の徒以て乗す可しと爲し、十一月八日南北諸州連合してガンの和解盟約を結び、國人は教派人種の異同を没し、戮力して西班牙人を境外に攘はんことを盟ひ、まづ力戰苦闘してガン城の西班牙の成兵を逐ひて、ゼーランド全州を徇へ、年末氣運大に張る。然れども、フエリベス王の剛復、自任なほ挫まずして、北歐の戰役尙已まざるなり。然るに此間サンバルテルミー、虐殺後の佛蘭西の形勢漸く一變せり、始め王シャルル九世は此誅殺の罪をギース黨に歸し、のちユグノー殺戮を其命に出づと公

ラ・ロシエルの降

言せしも、稍や年月を経るに及びて、漸く之を耻づ、英吉利の如きもとより此變を惡むと雖も、エリザベス王は西佛二國の連合を恐れて敢て異を挿まず、時に佛蘭西の抗抵派は尙ラ・ロシエル、ラ・シ・リテ、モントパン、ニスメ等の諸地に據る。王弟アンジュ・アンリはラ・ロシエルを圍む。城民エリザベス女王の必ず救はんことを期せしも、女王之を顧みず、かへりて千五百七十三年シャルル九世の幼公主の爲に、神母と爲るを約せしかば、ユグノー大に憤り、英吉利使節ウースター伯の船を脅かして之を捕へ、其部下を殺し、男女老弱心を同うし、ロシエルの險要に嬰守して屈せず。王師疫疾に斃るゝもの多く、六月和成り、ロシエル、ニスメ、モントパンは各小共和政區たるを約して降りたり。然れども佛蘭西の教亂は此にやまず、翌千五百七十四年の初、西南諸州はランゲドック、ギエーヌと連りて加特力教に敵せんとす。始めサンバルテルミーの變後、ナワラのアンリとコンデー公子は死を遁れんために、舊教に歸せしも、元來その素志にあらざれば、後漸く政教の謀徒に連る。國太后メデチのカテリヌは權勢に戀々として頻りに敵黨を暗殺せんと謀りしも、成らず。ネードランドのユグノーの將たりしラヌーはラ・ロシエルに至りて、通同を謀りしが、南

シャルル九世
の死

方に奔りて一軍の謀徒を率て地方を徇略す、然るに國王シャルル九世はサン・パル
テルミューの殘虐を以て自ら攻め鬼を見熱を病み、千五百七十四年五月末日に死
落す。或は以てカタリヌの毒弑に出づと爲す、要するに王の末路最も恠む可し。王
正子なきを以て、波蘭王たりしアンジュのアンリは太后カタリヌに徴されて國に
還る。其間カタリヌ政を攝して力めてユグノーと和好を修めんとせしも、佛南の
亂なほやまず、新教徒は政府に抗敵し黨を樹て社を結び、宣戰講和殺任、賦課を斷
行し、王室の成令また及ばず。アンリ三世新に位に即きしが、王威頗る凌夷せるを
慨き、ユグノーにして國教に改歸せざる者は悉く國外に放逐す可しと令す。而も
令出で、事行はれず。加特力派も漸く王に満たず。千五百七十五年二月モンモラ
ンシのダムギル其一派を率ゐてコンデー公のユグノー派と合同し、王弟アラ
ン公フランソアまた之に應じ、翌千五百七十六年ナブラのアンリは太后カタ
リヌの手を脱し、ロアル河を渡りて新教派に投ず。王アンリ三世太后カタリヌ大
に愕きて五月六日和をユグノーと結び、巴里王府以外に新派を許可し、國中の法
院には新舊兩派同數の法曹を并用し、從來ユグノーに對して發せし諸禁制を撤

神聖同盟

し、アランソン公は之によりてツールン、ベリ、アンジュの諸封地を得て王の前爵を
襲ひてアンジュー公と爲り、ナブラのアンリ、コンデー公、ゲムギル等各得るところ
ありて佛蘭西王國は將に分裂して若干の小獨立國と爲らんとす。加特力教派之
を憂へ、ギース公アンリは檄を飛ばして都市地方諸區の僧侶、耶穌會士等團結し
て加特力教會の爲に神明に盡瘁し、王室を擁護し、國憲を保持し、クロギス當時の
古自由を復し、苟くも誓盟に背く者は死に當てんとす。稱して神聖同盟と曰ふ。而
して同盟の目的はまたユグノーの全滅、アンジュー公の裁判、國王の廢立を聲言す。
王アンリ三世聞きて之を恐れ、其盟主たることを約し、新教の禮拜を禁じて自ら
禍を免れんとす。是に於て物議囂々として起り、千五百七十六年の和約破れ、ユグ
ノーまた南方に蜂起し、佛蘭西は政教爭權の動亂久しく、家國衰弊せんとし、國人
は王アンリ三世の政務に倦み、優柔宴安に耽りて、また少時の勇武なきを見て、日
に王を離れてアンジュー公フランソアに歸したり。

佛蘭西の形勢此の如きに當りて、また眼をネードルランドに轉すれば、千五百
七十六年冬ガンの和解同盟成り、翌年初ブリュセル連合成りて、より後、西班牙の勢

ド
ン・フ
アン
攝政

暫く振はず、攝政レケセンスの後任なきもの八月にして西班牙王フェリペス二世は終に嚮にレバントの戦に勝ちし庶弟ドンファンダウストリアを擧げてチードルランドに入らしむ。ドンファン微服してチードルランドに入り、形勢の太だ非なるを見て、大に讓歩し、以て民意を收攬せんとせしも、國人は皆オランエ静公に歸向し、之を尊ひて國父キルレムと號し、國會はドンファンを廢し、千五百七十八年一月ルドルフ二世帝の皇弟太公マッテアスを奉じて知政と爲し、キルレムを其副と爲す。英吉利女王エリザベスは干涉の機到れりと爲し、サー・ジョン・ノリスに騎兵一千歩兵五千を授けてフランドルに送り、諸市を擔保として軍資十萬磅を給せんことを約す。フェリペス王外國の干涉始まるを見て大軍を起し、マルガレットの子王姪バルマ公子アレサンドロ・ファルチゼを將としてチードルランドを伐たしむ。千五百七十八年一月末王師國兵をナムルのゲムブロールに破り、ドンファン連りに數城を取る。然れどもアムステルダムはかへりてオランエ公に應じ、八月ジョン・ノリス等力戦してドンファンをリメナントに破る。後二月にしてドンファンはナムル附近に薨じ、王姪アレサンドロ・ファルチゼ之に代りて攝政の職を占

ユ
ト
レ
ク
ト
七
州
同
盟

む。ワルーン諸州の加特力教派は太公マッテアスを廢してアンジュー公を佛蘭西より迎へ立つ。英吉利は爲に佛蘭西の勢力を増進せんことを恐れてバルツ撰侯の弟ヨハン・カシミールを推立す。然れども二人皆事功の見る可きなくして已み、チードルランドまた定主なく、西方の加特力諸州と新教の荷蘭ゼーランドと相争ひ、ブルユセル同盟は瓦解し、千五百七十九年一月アルーン族はアルナスに新同盟を組織して寧ろ西班牙攝政ファルチゼと和せんと欲し、オランエ公は別に荷蘭ゼーランド、ヘルデルランド諸州を會し、次でフリースランド、オフルイセル、ドレンテの三州を加へて所謂北方七州のユトレクト同盟を組織し、假令フェリペス王を戴くも國民の自由を克復するを目的としたり。ワルーン諸州は之を見て五月中旬、ファルチゼと條約を結びて王權を認諾し、六月の末、ファルチゼはマエスリックトを陥れしかば、キルレム静公はフランドル諸州を説きてユトレクト同盟に加はらしめ、ガンの秩序を復したり。よりて翌年フェリペス王はオランエのキルレムを目して人道の敵と爲し、二萬五千クラウンの賞を懸けて其首を募り、若しよく之を刺す者は悉く一身の罪を赦して貴族に列す可しといふ。キルレムまた之に應

荷蘭獨立の布告

じて大にフェリペスの罪を鳴らして、全く西班牙と絶つに決し、自荷蘭ゼーランド君臨し、佛蘭西王弟アンジユ公を招きてネーデルランド治政に擧げて援助と爲す。千五百八十一年七月ハーフ議會はプロアのフレンソアを以てフランドル、ブラバントの主と爲し、マルニックス、デサンタルゴンドの筆に成れる誓絶令を發し、民人は君王の具にあらず、君王正しくば以て民に臨む可く否らざれば廢す可きは天理の自然なりと論じて、始めて民主の要義を立て、西班牙王フェリペスを廢して、獨立を布告し、オランエ公キルレムを推して荷蘭ゼーランドの知政と爲したり。然るに八月アンジユ公境を超え、カムプライを圍み、英吉利王エリザベスと婚して改革の主領を以て目せられたり、翌千五百八十二年三月狂僧デ・オウラギ・イ・アギラルといふ者キルレムを刺さんとして成らず、キルレムは重傷を蒙りしも二旬にして癒ゆ。事實に西班牙に連なりしに、或は以てアンジユ公の指喉に出づと爲し、公の威望爲に地に墜ち、千五百八十三年一月アントエルプ蜂起し、公遁れて佛蘭西にかへる。西班牙之に乗じて勢を復して連りに諸州を鎮服し、千五百八十四年の末ネーデルランド新教の地はたゞ荷蘭地方を残すのみ、況んや此年初夏

キルレムの死

荷蘭ゼーランド伯と爲りしキルレムは、七月十日デルフトに於てアレサンドロ・ファルチゼの刺客ブルガリア人バルタザル・ジュラルドの爲に殺されたるおや、まことに北方ネーデルランド獨立役の一轉局と謂ふ可し。

葡萄牙の情勢

北方に於ける西班牙領の獨立久しく成らざる間に、西班牙はかへりて輒く西隣葡萄牙及び其領土を併呑せり。葡萄牙はしきりに海外發見に力を用ひ、通商殖民を營みて利を圖り、富を爲し、千四百九十五年乃至千五百二十一年の間位に在りしマノエル(一世)大王の頃は、東は印度を謀り、西は巴西を經略し、南は亞非利加沿岸を征して旭日東天の勢を以て、歐洲第一國の稱あり、千五百二十一年ジ・オン三世王立ちて國力なほ張りしも、王は耶蘇會士を用ひて、外海外の宣教に功ありしも、内宗教審司を置きて横虐の施制多く衰弊の源を發す。千五百五十七年、王殂し、カール五世の妹たる王妃カタリナ政を攝し、王孫セバスチオンを立つ、幼王年甫めて三歳、耶蘇會士の教養に人と爲り、長ずるに及びては寇冕を戴ける僧侶に異ならず、異教徒征略を以て無上の光榮と爲し、千五百七十四年亞非利加のムールを伐ちて功なきも、挫折せず、翌年モロッコの主ムレイム・ハメットの廢せられて

セバスチオン王

西班牙王フェ
リペス葡萄牙
を併す

來りて救を需むるや、王はまた直ちに應諾し、萬難を排し、葡、西、獨、伊の大軍を統率して、千五百七十八年の夏モロッコに入り、陸路漠地を踏んでエルアリシに至らんとしアルカシルに戦ひて大敗し、王戰場に殞る。よりて大叔ブラガ君牧師エンリケ王位をつぎしが、千五百八十年一月の末に殞落す。國人多くは王姪ドン・アントニオを奉じサンタレムによりて位に即かしめ、のちリスボンに入る。西班牙王フェリペス二世も亦實にエンリケ王の姪なりしかば之と葡萄牙王位を争ひ、兵をアルブ公に授けて至り伐たしむ。葡萄牙軍は之と戦ひてアルカンタラに敗績し、アントニオは蒙塵してカレーに奔る。翌年フェリペス王葡萄牙に入りて王位に即き、悉く海外東西に散在せる屬領を併せたり。佛英二國之を見て大に愕き、佛蘭西王はうち政教の亂に勞れて西班牙と抗敵する能はず、僅に少兵をドン・アントニオに假してアゾレスに據らしめしも、千五百八十二年七月西班牙の將サンタクルヅと戦ひて敗績す。アントニオ乃遁れてテルセイラ島を死守せり、のちまた英將フランシス・ドレーキと結びて再舉を謀りしも、事成らず。千五百九十五年巴里に逝去せり。但し佛蘭西は公然西班牙と敵たらざればサンタクルヅの佛人を虜と

爲すや浮浪の寇賊として之を誅殺せり。

嚮に荷蘭はオランエ公キルレム刺客の手に死するや、國人其功德を思ひ、長子モリツを立て、七州の主と爲し、ホヘンロヘ伯を陸軍總督と爲す。モリツ時に年甫めて十八歳なり。西班牙攝政アレサンドロ・ファルネゼはキルレムの喪に乗じてアントエルブを圍み、戦橋をシエルト河に架し、城兵をコエンステン堤坡に破り、千五百八十五年八月之を陥る。府民出で、アムステルダム、ミッデルブルグに奔り、久しく西北歐羅巴商業の覇權を握りし盛都は兵馬の蹂躪に委したり。國會乃救を英吉利女王エリザベスに乞ふ。是に於てエリザベス始めて救援の意を決し、レスター伯を將をして海を渡らしむ。年末伯は兵六千を以てフルシングに達し、フィリップ・シドニーを其地の守將とし、翌千五百八十六年九月ツブフェンを圍みしも、功なく、シドニー此戦に死せり。蓋し伯は兵略民政素よりバルマ公ファルネゼの匹敵にあらず。西班牙の兵鋒を拒ぐ能はずしてまた國人の怨を買ひ、爲にエリザベスに訴へらる。たゞ其女王寵臣の一たるを以て地位を失はざるのみ、バルマ公乃勢に乗じてフランドル全州を復し、千五百八十七年夏スルイを圍みて之を陥る。レ

バルマ公對モ
リツ公

無敵艦隊

イスター伯モリツ公と之を救ひて功なく、互に罪を他に歸して相合はず、冬伯は英吉利に還り公は自ら軍を總督せり、斯く英吉利はチードルランドに利を失ひしが、海上に於て西班牙を脅かし連りに西印度を剽略す、フェリベス王之を憤り大に水師を發し、メヂナシドニア公を總管としてニウボルト、ドンキルクの國を解きて進んで英吉利を伐たしむ、號して無敵艦隊といひ、千五百八十八年七月師英吉利海峡に入りて東に向ふ、英吉利提督ホワード卿ドレーキ、フロビシユル等之を海上に要撃して奮戦し、大に之を破る、西班牙艦隊退きてまた英吉利海峡を過る能はず、北の方英吉利島外を一週して僅に國にかへり、途上オルクネーの海上にて颶風に際會し、全艦隊悉く四散漂蕩し、西班牙に還りしもの太少し、佛蘭西にては此時ギース公兵一萬二千を會して西班牙の征英に助力せんとせしも、之を聞きて已みたり、英吉利乃勝勢に乗じてかへりて千五百八十九年ドレーキ、ノリス等は故の葡萄牙王の宗室ドンアントニオをたすけてリスボンに迫り、西班牙王を窘むるに至る、蓋しアルマダー征の失顛は半天候の不幸にして不測の禍なりと雖も、西英兩國が海權の消長は實に此一舉に關すること大なるを知る可し。

三アンの争

之よりさき佛蘭西は民心王安リ三世を離れ、王弟アンジユ公に在るは上に云ふが如し、然るに公はチードルランドよりかへりて千五百八十四年に薨じ、王また嗣子なく、プロア家の血統此に絶へんとす、國民みなナブラのアンリがルイ九世の後なるを知るも、其新教徒たるを以て王室の繼嗣たらしめず、ギース公アンリはロンオン公の後たるを以てまた王位を得んとせしが、神聖同盟はナブラのアンリの伯父ブルボンのカルヂナルを推し、密かに新教排除を以て西班牙王フェリベスと約し、月額五萬クラウンの資費を得てアンリ王に叛く、時に千五百八十五年にして、ノルマンデー、ピカルデー、ブレタンニ、皆之に應ず、アンリ王は優柔不斷、只一身の苟安を希ひて新舊兩教の間に立ちて決せず、終にかく三アンの戦役と爲れり、是に於てギース公神聖同盟は國都バリを占領し、同盟は十六人會盟を組織して軍營を襲ひ、ループルの闕を侵して大官を除き、アンリ王を廢せんと謀る、謀露はる、千五百八十七年十月二十日ナブラのアンリは王師をクトラに撃破せしも、加特力の勢熾んにギース公の兵力益大に國論之に傾く、公乃千五百八十八年五月を以てバリに入り、メヂチのカテリヌと合して權威王を傾

プロアアルホ
ン王朝の交替

け、四方勤王の士王の徴に應じて集まりしも、巴里府民蜂起し街頭に胸壁を築き王を窘迫す。世に稱して胸壘の日といふ。アンリ王大事去るを見て外に奔り大權忽ギース公の手に歸す。王よりて和をユグノー、溫和加特力派と議し、國會をプロアに開きて十六會盟の剿討を策せしも功なきを見、近侍と謀り十二月の末ギース公を斬らしめ、其弟ローヌのカルデナル、ルイを獄中に誅す。時にカタリヌ病癖に在り、變を聞きて驚き、十餘日を経て千五百八十九年一月上旬に殞落す。然るに王の謀圖外れ、ギース公兄弟殺さるゝ、ヤソルボスは忠誠解除の令を全國に布き、教皇は王を破門し、加特力教徒はギース公の季弟メエーヌ公シャルルを奉じて王に叛く。王兵を將てツールに退き、已むを得ずして四月ナヴラ王アンリと和して與に巴里に迫り、七月の末王はサンクルーに、ナヴラ王はユグノーの衆を率ゐてメドンに陣す。巴里府中爲に震撼し、ギース公の妹モンパンシユ女公僧徒を激して王を刺さしめ、八月一日ジャククレマン王アンリを其陣中に弑す。王年三十八、ヴロア朝の佛國に君臨するもの實に十三王、二百六十一年を経て、血統此に斷絶せり。ナヴラ王アンリ乃入りて王統を繼承し、ブルボン王朝此に起れり。

アンリ四世對
加特力同盟

抑もブルボン家はルイ九世の第六子クレルモン伯ロベールに出づ。ロベール伯はペリーのブルボン卿アルシャムポアの繼嗣ブルゴンニユのベアトリクスを娶りて子ルイを生む。ルイ千三百二十七年シャルル四世の爲にブルボン公に封せらる。公の後ワンドム公アントンはナヴラ王アンリの公主ジャンダルブレを娶りてアンリを生む。アンリ長じて王位を嗣ぎ、佛蘭西王アンリ三世の弑に遭ふや、遺命によりて位に即きアンリ四世と號す。然りと雖も神聖同盟の勢は尙衰へず。メエーヌ公は自ら佛蘭西國王副都督と號す。ブルボンのカルデナルを擁立してシャルル十世と稱せしめ、極端なる新舊兩派の士は皆新王アンリに背きて之に歸す。アンリ王乃巴里の圍を解きてノルマンデーに退きしが、再び巴里を攻めてまた志を得ず。ツールに據る。既にして列強多く其繼位を認識し、嚮にアンリ三世の遺弑を賀せし羅馬教皇シスト五世すら尙新王の舊教に歸依せんことを望みて、之に聲援せしかば、アンリ四世は復勢を復し、千五百九十年三月メエーヌ公をイヴリに擊破して、巴里に迫る。西班牙王フェリペス二世は故アンリ三世の姪たる己の公主の爲に佛蘭西王位を争ひ、且ユグノー派なる新王の勢を挫かんが爲、ネードルラ

ンド攝政バルマ公アレクサンドロ・ファルネゼをして巴里に應援せしむ、アンリ王國を解きて退く。九月中旬ファルネゼはメエーヌ公と相携へて巴里に入る。英吉利は之を見てエセックス伯を遣はして王を助けしめしも、同盟派は獨逸、伊太利、瑞西諸國の應援を得、殊にバルマ公の勇略よく敵する者莫し。然るに千五百九十二年十月二月バルマ公薨じ、アンリ王國亂熄まざるを憂ひ、千五百九十三年七月サン・ドニに於て羅馬教に歸し、利を巴里總督プリサック伯シャルルド・ゴゼーに啖はして、千五百九十四年三月二十二日始めて都門に入るを得たり。是に於て同盟軍の勢大に挫け、國中の要鎮相尋で降り、千五百九十六年一月フォルムブライ條約を結び、加特力同盟は茲に解散せり。然れども内亂漸く平ぎて外難起る。アンリ王は耶蘇會士が西班牙の爲に己を謀るを恐れ之を國外に放ち、千五百九十五年一月戰を西班牙に宣し、フランシスコムテを征せしも、カレ、アミエン諸城は敵に陥れり。英吉利乃海陸軍を派して佛蘭西を援けて、西班牙を攻め、千五百九十六年六月エセックス伯ホワード卿はカヂツを陥れ、償金十二萬クラウンを得たり。是に於て千五百九十八年羅馬教皇クレメンツ八世は西佛兩國を調停し、四月十五日佛王安リ

ナントの告示

四世はナントの告示を發して宗教の自由を保護し、ユグノーも亦學校病院の恩恵に浴し、文武諸官に任じ、臣民の權利を享有するを得しが、なほ十分一税を拂ひ、舊教會の安息日を存し、婚姻令を奉じ、外強と絶ちて王權を承認す。舊教徒は心裏此布告を忌むと雖も、千五百九十九年二月國會の協賛ありて、百年の教難漸く局を結び佛蘭西の内訌一時迹をたちたり。

スヌーリー公の内治

佛蘭西は戰亂久しくして國帑乏しく、民徒に重斂に疲れて用途給せず。君王の威微にして州官土豪約束を奉せず。國土爲に荒廢せり。アンリ四世既に内難を除きて治道を求むること急に、賢才ローニー男マクシミリエン・デ・ベッソンを擧げて財政を整理せしむ。男は後に所謂スヌーリー公にして、租賦徵課の法を改定し、會計を嚴檢し、百方濫官の私營を防阻して、群小の抗議に屈せず。深く王の親任を得て、租税を輕うし、國債を減じて府庫を充實し、王を輔けて農商業を經營し、或は沼澤を埋め、或は森林を養ひ、道路橋梁運河を開鑿修繕したり。此に於て佛蘭西の内政稍や緒に就き、巴里の樓臺盛に、書庫大に、文藝の士輩出し、外英吉利、荷蘭、西班牙、土耳其と通商の約を結び、海外殖民の業を興え、千六百八年シャムブランは北米加那

陀にクェベック府を創めたり。千五百九十九年冬アンリ四世は后プロアのマルゲリトを廢し、翌千六百年十月トスカナ太公の姪メヂチのマリヤを娶る。後のルイ十三世は實に其出なり。然るにサチア公シャルル・エマヌエルはサルツ侯領の佛蘭西に歸せんことを愛へ、もと神聖同盟の餘類なる不平貴族と結託してアンリ王を圖る。事あらはれて成らず。アンリ王乃六世襲王國、五選舉王國、四共和國を團結して、耶蘇歐羅巴大共和國を組織し、且ルドルフ二世帝の教熱を挫きて、獨逸抵抗派の爲にし、且埃西家門と權勢の均衡を保たんと謀り、千六百九年三月クレヴス公の薨じて嗣なく領土皇帝に公没せられんとするや、兵をブランデンブルグ、ノイブルグ公等に假して帝と争はんとし、危機一髪に繋る。適ま千六百十年五月王は刺客フランソア・ラヴィヤックの爲に弑せらる。時人或は西埃帝王の使ふところと爲し、或は耶蘇會士の舊怨を報ゆるものと爲すも、因由知る可からず。蓋し佛蘭西はアンリ王の遺弑によりて外難を危急に免れしも、嗣王ルイ十三世時に年甫めて九歳、母后政を攝するも、爲にまた内患を生じたり。

チードルランドは、西班牙の無敵艦隊潰敗の後、自立の勢日に盛に、モリツ公善

く闘ひ荷蘭の同盟七州を克復せり。適まバルマ公南佛蘭西を征して薨じ、マクシミリアン二世帝の皇子埃地利太公エルネスト代りて攝政に拜せられ、在薨任に就かず。マンズフェルト伯は衆を領するもよく爲すなし。モリツ公之に乗じ、千五百九十四年北州の重鎮グロニンゲン壘を陥れ、知政事と爲る。是に於て乎荷蘭共和國の基礎定まれりと謂ふ可し。之に反して西班牙はフェリペ二世の失敗によりて國運始めて傾き、侍郎アントニオ・ペレヅの帝意を失ひてアラゴンに奔りて獄に下るや、民衆蜂起して之を救ひ、佛蘭西に走らしむ。フェリペス王之を怒りてアラゴンの官民を誅除す。發祥の地既に王室に叛けり、衰相以て見る可きのみ。千五百九十五年王は駙馬たる可き埃地利太公アルブレヒトを以てチードルランドの攝政に任じ、後三年を経て千五百九十八年遂に其地に王たらしめ、以て西班牙の附庸と爲す。然るに太公と公主イサベラとの婚未だ成らざるに、九月中旬フェリペス二世殞落し、子フェリペス三世繼ぎ立つ。フェリペス二世は享年七十又一、在位四十三年の久しき、失弊相踵ぎ國力を消耗せしが、千五百七十六年獨逸の皇位を繼承せしマクシミリアン二世の長子ルドルフ二世も亦フェリペスに倣ひ、嚴しく新教派を迫害し、千

荷蘭の獨立成る

五百七十九年、埃地利の諸學校にては加特力教師、用書の外一切用ふるを禁じ、コロン大僧正兼撰侯は新派に歸依せしを以て羅馬教皇の爲に廢せられたり。アルブレヒト、イサベラのチードルランドに君臨せしよりのち、知州事モリツ公ますく、自立の勢を張る。ゼノヴの貴族アムプロゼスピノラは私領を沽り兵八千を募りて西班牙を援け、千六百四年九月オランダを取りしが、兩軍の損傷太しく將卒奔命に勞し、荷蘭の水師勢雄に西葡の沿海を襲掠し、提督ヘームスカルクは西班牙海軍をジブラルタル灣に殲す、千六百九年荷蘭、西班牙は十二年の休戦を約し、荷蘭は加特力王領外の兩印度と通商し、ナサウ家のオランエ公が荷蘭諸州に對する主權は認諾せらる。故に共和國の獨立の實は此に成れりと謂ふ可し、然れども國內にてオルデンバルネルト、ユゴグロート等はオランエ公と相争ひ、千六百二十五年アムプロゼスピノラは北ブラバントのブレダを圍み戦また起る。適まモリツ公薨じ、弟フレデリク・ヘンドリック代りて知州事と爲り、ブレダ陥りしが、獨逸に三十年戦役起りしかば、フレデリクはマンズフェルト伯と連合して國中の西班牙軍を攘ふ、千六百二十九年スピノラ召還せられ、ヴンデルベル

英吉利のエリザベス時代

グ之に代る。フレデリク公よりてヘルツォゲンブシュを陥れ、次でゲルデルランドのマエストリクトを取り、千六百三十五年二月佛蘭西は荷蘭と攻守同盟を約して兵三萬を發して西領ネーデルランドを伐つ。自耳義地方の士民奮戦して之を退けしが、後エストフーレン條約成りて荷蘭の獨立は歐洲列強の認諾をうけ、西班牙はフェリス三世王關愚にして嬖倖權柄を竊み、國政日に非に、千六百二十一年王殂落し、子フェリペス四世立ちてよりドン・ガスパル・デ・グッツマンの權重く國威日に益衰微せり。

最後に翻つて十六世紀末、英吉利の形勢を略敘せむ。エリザベス女王が大陸の新教徒を助けて西班牙王フェリペスに抗せしは、單に教争の爲に非ず、フェリペスがシスト教皇の後援英國内加特力派の通同により英吉利王位を得んとするを防ぐ爲なり。故にフェリペス王殂するも英西の抗敵は已まず、千六百一年以後エリザベスはなほフェリペス三世と戦へり。エリザベスの天資は瓊瑾相半ばし、その行爲は美醜相交る。例之ば終世處女王を以て居るも、實は中外の嬖幸最多きが如し、而して女王の世最も注意す可きは愛蘭土の屈從なり、抑も愛蘭土はヘンリー二世

の時初めて降りしも、なほ自立の實を失はず、ヘンリー八世エールズを服して海を渡り愛蘭土王と號せしも、島民之に服せず、皆羅馬舊教を固守して英吉利新教會を認めず、千五百六十二年北方オチイルの亂あり、五年を経て僅に鎮壓せられしも、稍もすれば則蜂起す、千六百二年英吉利其亂を裁定して全くその舊法を改めたり、エリザベス女王はまた英吉利教會を確立し、千五百五十九年統一令を發し、悉く欽定祈念經外の儀例を禁じ、宗教高等法院を創め、其權力は西班牙の宗教審司に過ぐと爲し、苟くも他の異見を容れず、獨り奮つて基督教の清法を恢復すと稱する清教徒は抗爭して或は刑せられ、或は外に奔りしも、屈せず、後エリザベス女王の殞落するやその徒議院に立つを得、エリザベスが専制は後の大革命を誘起する遠因と爲り、極端なる新清教徒は之に乗じて共和政を唱導するに至れり、蘇格蘭王ジェームス六世がスチアールト系を以て入りて英吉利王位を得てのち、子チャールズ一世に及びて國內の變亂を生ずるは十七世紀前半の事にして大陸に於ける三十年戦争と前後するを以て十六世紀の末尾を以て此章を結び、またエリザベス朝文學の盛も茲に説及せず、別にまた新に説く可し。

第四章 三十年戦役と英吉利革命の難

反動と過渡

反動と過渡、佛王ルイ十三世の初世、リシエリユ公、獨逸の抗抵同盟、加特力連合の對立、三十年戦役の開始、ペーメン方面の戦、ハルツの役、土耳其と波蘭と、驍馬王クリスチャンの南下、ワレンスタイン起つ、リッペンクの和、復讐令、ワレンスタインの解職、教争、政争の過渡、瑞典王グスタフ・アドルフの南下、ナルリー伯の戦役、ワレンスタインの遺害、起つ、グスタフの戦役、ハイルブロン同盟、ワレンスタインの遺害、リシエリユ公と三十年役、三十年役の第四期、サクセン・ワイマル公、ハルドの卒去、リシエリユ公及びルイ十三世の祖、エストファーレンの和約、蘇王ジェームス六世、則英王ジェームス一世、爆、暗謀、チャールズ一世、權利請願、ハムプテン、短議會、チャールズ王と議會との衝突、英吉利革命の亂、オリブ・クロムエル、チャールズ王議院の手に落つ、第二革命の亂、チャールズ王の利死、西班牙カタロニアの變、葡萄牙のアラゴン朝の興起、西領伊太利の變亂、土耳其の漸衰、

ルーテル始めて中歐に宗教の革新を唱導してより、諸國に新舊教派の亂朋黨

疾視の禍紛糾して已まず。震蕩茲に約一百年にして、十七世紀の始大陸の反動はまた舊教に歸するあり。南獨逸は羅馬教皇を崇戴し、チードルランドのワルーン種諸州は荷蘭地方と分離し、フランドル、ブラバンまた抗抵派の地にあらず。佛蘭西はアンリ王改宗の後ユゲノ一の徒復振はず。波蘭にては改革の徒黨を樹て派を分ちて國勢爲に割けたり。獻身宗教の爲に盡瘁せんことを誓へる狂熱の耶蘇會士此に乗じ、詐謀弑殺武力を用ひても尙且羅馬教會の爲に謀り、有數の學者筆舌の力を極めて加特力派を鼓吹す。撞著免がれず、大亂また漸く迫るは勢の必至なり。然れども之を一面より云は、是將に歐羅巴教争の局を結びて政争に移らんとするの階梯なるを知らざる可からず。

千六百十年、佛蘭西王アンリ弑せられて子ルイ十三世立つ。年甫めて九歳。太后メデチのマリア政を攝し、大貴族に擁推せられ、スウリー公の謀議を容れず。千六百十一年公掛冠の後、太后西班牙と連和せんと欲す。王遭弑より以來不安なりし國民は之を聞きて益す動搖し、革命兵禍の氣國中に滿ち。千六百十四年春、コンデール公兵を起して志を得ずと雖ども、伊太利出身の太后及其嬖臣を敵視する者甚

佛蘭西ルイ十三世の初世

リシエリユ公

だ多し。此年國會を召集せしが是より後千七百八十九年大革命に至るまでまた國會なし。翌年王は西班牙王フェリペ三世の公主アンナを娶りて、母后攝政を解き、フレンゼの人マレシャル・ダンクル・コンチノ・コンチニ母后の嬖幸を以て政を執りしが、千六百十七年王の意を失ふ。王禁衛の將ギトリに命じてコンチニを禁監せしむ。ギトリ之をルブル橋上に斬る。王また母后マリアをプロアに遷す。リシエリユ公兼ルソン僧正アルマン・ジャン・ツブレシまた之に従ひ、王は政をシャルル・ダルベル等に委し、自ら放鷹獵してまた國事を顧みず。千六百十九年二月下旬太后マリアはプロア城を脱して内亂忽起れり。リシエリユ公は王母子を調停し、千六百二十二年教皇よりカルデナルに拜せられ、二年を経て佛蘭西閣臣に列し、忽地にして首相と爲る。蓋しアンリ四世の時、スウリー公の施政はメデチのマリア太后攝政の世を経て今や殆んど迹を留めず。リシエリユ公事を執るに及びてその荒廢を興し、外は獨逸、西班牙の塊地利家の權勢を削殺して佛蘭西を歐羅巴列強の霸主と爲し、内は封建諸侯伯を屈服して王室の威を重くし、政黨としてユグノーを剿滅するの大方策を立て、以て千六百四十二年其薨去に及べり。されば其間公の佛蘭西の爲

に盡すところ多く、佛蘭西興隆の運公に負ふところ實に偉大なりと謂ふ可し、唯だ其専制を以て下に臨み獨裁を以て國事を断せしは後人の憾むところなれども、また時勢の已むを得ざるによらずんばあらず

荷蘭のアルミニウス派

時世の風は脱し難し、十七世紀の始専制の俗なほ已まざるは、信仰の自由を唱導して起ちし荷蘭共和國にもなほ宗教の迫害を免れざりしを見て知る可し、千六百九年荷蘭の神學者ヤコブ・ハルメンセン歿す、ヤコブはまたアルミニウスと稱し、其門下の高足オルデン・バルネルト、フゴ・デ・グロート等アルミニウス派の神學を唱ふ、カルギン派のフランシスクス・ゴマルの一派之と抗敵し、相迫害して互に下らず、荷蘭の知州事は各州の内治に容喙する權なきに、ナサウのモリツ公は千六百十八年バルネルト、グロート等をハーフに捕え、荷蘭、エトレクト、オエルイセルはアルミニウス派なれども、千六百十九年ドルトの宗教會議に於てアルミニウス教派の罪せらるゝを救解する能はず、五月中旬バルネルトは斬られ、グロートは禁錮せられたり、翻つて獨逸教界の形勢を見れば、北方にはルーテル派はカルギン派を酷待し、南方には羅馬加特力教徒は抗抵派を迫害せり、千六

獨逸の抗抵同盟の對立

百八年バルツ撰侯フリードリヒ四世は抗抵派の諸侯を會して抗抵同盟を組織し、バイエルン公マクシミリアンは之を見て翌年加特力連合を作りて自ら其盟主と爲りて相對峙す、帝ルドルフ二世は庸弱諸侯を制御すること能はず、千六百六年皇弟マツチアスに迫まれて奥地利、匈牙利、メーレンを讓り、またベーメンの民心を得んために宸翰を發して政教の自由を與へしが、千六百十年にバサウ僧正レオポルド大公の兵を興してベーメンを伐つを許るして間はず、翌れば千六百十一年三月マツチアス維因を發しベーメンに入りてルドルフ帝に迫りて國を讓らしむ、帝また拒む従はず、怨を吞みて千六百十二年一月に歿し、マツチアス代りて帝位に即きたり、然るに此年バルツの新撰侯フリードリヒ五世は英吉利王ジェームス一世の公主エリザベスを娶り、侯の後見ツワイブリケン公ヨハン二世は獨逸抗抵同盟の名を以て英吉利と結び、翌年荷蘭共和國と十五年同盟を約し、瑞西エネチアもまた事發せば抗抵派に聲援して加特力教徒に抗せんとす、之に反して加特力派は内和せずと雖も、其數遙に抗抵派に超えられたれば、優に相對の實力を具へ、對戰の期漸く近けり、マツチアス帝は皇位を簞ひしより、ベーメンを姪スタイ

三十年戦役の
開始

エル太公フェルデナンドに譲りしに、フェルデナンドは耶蘇會士の言を信用して新教派を剿滅せんとし、フス教派の、新に寺院を築くや之を破毀せしむ、議會聽かず、フェルデナンドは皇帝の後援を負ひ兵を率ゐてブラハ王城を襲ひて抗抵派を逐ひ其領袖を窓下に投ず、實に千六百十八年五月二十三日なり、抗抵派の首領ツールン伯マツチアス乃ペーメン王に叛き、執政三十員を撰びて國政に任せしめ、所謂三十年戦役遂に起れり。

ペーメン方面
の戦

ツールン伯のペーメンに起るや、まづ國中の耶蘇會士を逐ふ、埃地利、匈牙利の抗抵派は直に蜂起して之に應じ、亦耶蘇會士を放ち、抗抵同盟はマンズフェルド伯を、シュレジエン、ラウジツ諸州はマルクグラフヨハンゲオルグフォンエーゲルンドルフを遣はしてペーメンの叛徒を援く、皇師之を征して功なく、千六百十九年三月下旬マツチアス帝殞落し、フェルデナンド太公王政を總攝せしも六月ツールン伯來りて維因を圍み、都民闕を侵して新教裁可を迫るに及び、殆ど之に屈せんとす、適まダムビエール伯一軍を將て至り救ひしかば、形勢一變し、マンズフェルド伯はダムビエール伯と通じてブラハに迫る、ツールン伯圍を解き退きてペーメンを救ふ。

フェルデナンド太公乃フランクフルトに趣き、六撰侯の爲に撰ばれて、獨逸皇帝の位に即けり、之をフェルデナンド二世と爲す、抗抵教派は之を見て十一月上旬バルツ撰侯フリードリヒ五世をブラハに立て、ペーメン王と爲し、ジーベンブルゲン侯ペトレンガボルは兵を上匈牙利に起して、皇軍の將ビクワ伯を牽制し、年末ツールン伯は兵八萬を將てガボルと與にまた維因を圍みしも、天寒くして輻重充たず、匈牙利危しと聞きて兵を退く、ペーメン王フリードリヒは時に年二十二、自尊傲岸民心を得ず、岳父英吉利王ジームスも亦之を援けず、フェルデナンド帝は教皇パウロ五世の許可をうけて、上埃地利に信教の自由をゆるして、ペーメンと斷たしめ、加特力連合の主裁バイエルン公マクシミリアン、チルノー伯ヨハンテュルクラス等皆皇軍の上將として、西班牙王羅馬教皇及び國內加特力諸侯と相呼應して、抗抵軍に當り、千六百二十年西將スピノラは、チードルランドより下バルツを侵略して向ふところ風靡す、十一月八日ペーメン王フリードリヒはアンハルト侯クリスチアンを總督として、バイエルン公チリー伯の加特力軍と、ワイセンベルグに戦ひて大に敗れ、プレスラウを経て、荷蘭に出奔す、是に於てペーメンは悉

マルツの役

く皇帝に降り、帝は亂魁の采邑を削奪し資財を收没し、手からルドルフ帝の下せしマエステーツブリーフを毀却し、一萬蘇を懸けてマンズフェルド伯の首を募り、千六百二十一年五月抗抵同盟は解散し、リヒテンスタインの騎兵僧徒等エスタルライヒ・シュレジエンに於て殘暴を逞うして民人を屠殺し、パッペンハイム伯は塊地利山地の聖教軍を剿滅せり、斯くてペーメン方面の亂は熄みしも、マンズフェルド伯は上バルツに奔り、終に義兵二萬に將として下バルツに據る。バルツ撰侯フリードリヒ之と連和して千六百二十二年四月チルリー伯をギースロホに擊破せしが、幾くもなくして獨逸を去り、五月にはバーデン・ヅルラハのマルクグラフ、六月にはブラウンシュヴァイヒのクリスタアン皆チルリー伯の爲に破られしかば、マンズフェルドは荷蘭より英吉利に入りて救をジームス一世王に乞ふ。王時に西班牙と連和せんことを欲し、甥フリードリヒを諭して抗爭を罷めしむ。九月皇軍はマンハイム、ハイデルベルグを降だし、千六百二十三年春帝はフリードリヒのバルツ領を奪ひ、バイエルンのマクシミリアンを以て其撰侯と爲す。戰端ペーメンに起りてより此に至りて五年、事はペーメン、バルツの間に在りて、今や殆んど

土耳其と波蘭

平ぐ之を三十年戰史の第一期と爲す可し。

然るにペトレン・ガボルは一び帝と和せしも、次で土耳其を誘ひてまた兵を動かさんとす。千六百十七年十一月土耳其櫻里丹阿克メト一世殞落し、ムスタファ位に在ること僅に三月、阿克メトの長子幹都蠻二世立ち年甫めて十又四に過ぎざるも、雄武にしてよく兵を用ひ、戰を波蘭に宣す。千六百二十年九月土將イスカンデル・パシヤ兵十萬を將て波蘭軍五萬をヤッシー附近に擊破し、勝に乗じて北進せしが、波蘭王シジムンド三世の善く拒ぎ守るを以て志を得ず。千六百二十一年冬イスカンデル・パシヤは潰殘の衆を將て國部コンスタンチノポリスに還る。新隊の衆叛兆あり、櫻里丹幹都蠻其用また古の如くならざるに稍もすれば勢を挿みて動亂するを惡み、此を除んと謀る。謀漏れ、新隊の衆一時に蜂起し、國相大臣を虐殺し、終に櫻里丹を弑し、久しく獄中に呻吟せしムスタファを擁してまた櫻里丹と爲す。時に千六百二十二年五月の末なり、是に於て土耳其は波蘭と和を講ず。後幾ならずして千六百二十三年八月新隊は復ムスタファ、櫻里丹を廢し、阿克メト一世の少子アマラト四世を立つ。ペトレン・ガボル乃土耳其の援助を得て匈牙利を侵せ

噠馬王クリスチャンの南下

しも功なくして引きかへる。故に獨逸の抗抵派は爲に何の得るところもなかりしが、噠馬王クリスチャン四世が英吉利荷蘭と連りて加特力教派に當らんことを約せしは此間に在り、是實に三十年戦役第二局面開展の端緒にして、千六百二十五年五月クリスチャン王は下ザクセン道主に撰ばれて、初て書をフェルデナンド帝に致し、バルツ撰侯の處分につきて訴ふるところあり。帝はクリスチャンが外人にて獨逸の國事に干涉するを拒み、サグセンを捨つ可しと命ぜしも、王は實にシュレスヰヒ、ホルスタイン公を兼ねしかば、戦役また起れり。ブラウンシュヰイヒ公クリスチャン獨逸抗抵派の總督と爲り、マンズフェルト伯之に副と爲る。チルレ一之を北獨逸に防ぎて勝ちしも、噠馬王の入寇するに至り、救をフェルデナンド帝に乞ふ。帝乃ちベーメンの人ワルスタインのアルブレヒト・エンツェル・エウセビウスを擧げて將とす。ワルスタインは則ワルレンスタインにして、狀貌魁偉頗る武略に富み、既に千六百二十一年匈牙利の入寇を防ぎ、帝の推重するところと爲り、連りにバルツ伯、皇國侯、フリードリンド公等に拜せしが、此に於て詔に應じて起ち、掠略を以て資に充て、浮浪の私兵五萬を募りて訓練して精銳と爲し、自ら其將と

ワルレンスタイン起つ

和リニベックの

爲り、千六百二十五年ヘッセン、ハンノエル、ブラウンシュヰイヒを横行し、ハルベルスタット、マグデブルグに及び縦横敵莫し。然もワルレンスタインはチルリーと合はず、互に疾視せしに由り、抗抵派は利を其間に占め、千六百二十六年春噠馬王再び兵を動かし、マンズフェルト伯はベーメンに入りしが、ワルレンスタインの爲にデサウエル、ブリュケに撃破せられ、退きてベトレン、ガボルと合し、噠馬王は此年八月チルリーの爲にチルフエンビュテル附近ルッテルに撃破せられ、十一月マンズフェルト伯はダルマチエンに歿す。享年四十五。翌くれば千六百二十七年ワルレンスタイン、チルリーはともに噠馬王を追撃し、王は北に遁れかへり、シュレスヰヒ、ホルスタイン、ジユトランドの諸領土皆陥る。よりにて帝は千六百二十八年四月ワルレンスタインに東北海將軍の號を授けて王を海島に追迫せしむ。ワルレンスタイン進みてボンメルン公を服し、ストラールズンドの要港を圍む。ハンザ諸市爲に船舶を給せず、瑞典、蘇格蘭の兵至り救ひ、市中よく防ぎしかば、ワルレンスタインは下すこと能はず、兵一萬二千を損じて退く。チルリーまた志を得ず。噠馬王クリスチャンは之を好機とし、千六百二十九年五月二十二日獨逸帝と和をリニベックに結び、ホ

復舊令

ルスタイン公たる外、また獨逸の内事に容喙せざるを約し、戦局また收まれり、之を三十年戦役の第二期と爲す可し。

ワルレンスタインの解職
波
教
争
政
争
の
過

リュベック和約の前數週、皇帝フェルチナンドは復舊令を發布す、其所制によれば、千五百五十二年バサウ和約以來抗抵派の得たるブレーメン、マクデブルク、二大僧正領、十二僧正領及び諸小寺領法邑を復舊して、悉く加特力寺領に屬して、二大僧正領を皇子レオポルドに與へ、コンフエジオ、アウグスタナ以外の分派支屬の僧教の自由を削奪せり、是バサウ條約と矛盾せずと雖も、抗抵派は以て專恣の暴行と爲し、加特力同盟が布令を勵行するに及びて、人心また動搖せり、然るにフェルチナンド帝は抗抵派全く衰微して、またよく爲すなしと爲し、千六百三十年レーゲンスブルグの撰侯會議に於て、マクシミリアン公等の讒説を聽きて、ワルレンスタインの職を解き、其兵の半を放ち、半をチルリーに屬せしむ、然るに此時既に外瑞典王グスタフ・アドルフの抗抵派の招に應じて境に入るに遭ひ、帝其失措を悔ひしも及ばず、戦役また起れり、然れども今や戦役の真相は教争より一轉して、政争に入れり、抑もグスタフ・アドルフはグスタフ・ワサの季子カール九世の子にして、

瑞典グスタフ・アドルフの南

幼にして新教派の教を受け、八國の語に通じ、文武に兼達す、千六百十一年父烈して王位を繼ぎ、内治を改善して國力を養ひ、外は噠馬と戦ひて、侵略されし地を克復し、次で露西亞と戦ひ、千六百十七年ストルボフ條約を締結して、インゲルマンランド、カレリア、リフランドを得て、ノヴゴロド地方を返還し、千六百二十九年に至り、終に噠馬と和を成せしかば、眼を南に轉じて、獨逸に向へり、蓋しグスタフの南するやもと同派たる抗抵教徒を救助すといふと雖も、實に普魯西ボムメルンを得て、バルチック海權を控制し、進んで皇位をフェルチナンドと争はんとするの意あり、また之に聲援を假す佛蘭西首相リシェリューは、實に抗抵派の勝つを願はずと雖も、専ら埃地利家の權勢を削殺して、獨逸帝國を傾倒せんと欲する耳、故に名は尙教争に託すと雖も、今や三十年戦役は列強政權争奪の意慾に出つること明白に、茲に近世歐羅巴諸國競争の史に一變化を生じたるを知らざる可からず。

瑞典王グスタフ・アドルフは國事を國相アクセル・オクスンスツルンに託して留守せしめ、親ら兵一萬五千を將て海を渡り、千六百三十年六月リヂェン島に上陸し、別軍をしてストラールズンズンに出でしむ、ボムメルン公之を迎へ降りしも、サ

クゼン、ブランデンブルグ撰侯は疑ひて合せず、加特力教徒はグスタフは一箇の雪王、南下する能はずとして殆んど意に介せず、千六百三十一年チルリーは復讐命を用ざるマゴデブルグを陥れしも、急に瑞典王を迫撃せず、グスタフ王其間に北方を徇畧して中部獨逸に進みしに、サクゼン撰侯ヨハン・ゲオルグはマゴデブルグ陥落の慘狀を聞き、チルリー皇命を奉じ來り代つを見て、アドルフに應ず、チルリー進み撃ちて九月十七日ライプチヒ附近のブライトンフェルトに於て瑞典連合軍と戦ふ。始はチルリー殆んどサクゼン兵を撃破せしも、後グスタフ勇戦して皇師を破り、勝に乘じて北ぐるを遂ひ、州民蜂起してグスタフに應ず、サクゼンの將アルニム進みてペーメンを伐ち、十一月ブラハを陥れ、グスタフはチュリッゲン、フランケンを過ぎてライン河に出で、エルフルトよりヴルツブルグ、フランケン、フルトを経てライン河を渡り、マインツを略して冬陣を張り、翌れば千六百三十二年禿納河を渡り、四月五日レヒ、禿納會流の地にチルリー伯を撃破す、皇師乃インゴルスタットに退却し、チルリー其地に傷を患ひて歿し、バイエルンのマクシミリアン代りて皇軍を總督す、是に至りてバルツ撰侯はまた領土を克復し、獨逸抗

チルリー伯の戦歿

抵教軍の勢大に振ひ、フェルデナンド帝事意なるを見て、またヴルレンスタインを召すの已むを得ざるに至れり。

ヴルレンスタイン復讐つ

嚮にヴルレンスタインの免黜せらるゝや、ブラハに退き、公侯の生活を營み士を養ふと九百客を饗すること日に百良馬三百を蓄へて徐に天下の形勢を觀て動かす、皇師數利を失ひて帝徴せども自重して就かず、千六百三十一年冬始めて起ち、立どころに衆四萬を得、防敵の全權を託せられ、まづペーメンなるアルニムのサクゼン軍を撃攘す、グスタフ王時にアウグスブルグを占領し、マクシミリアンをインブルスタットに圍みて功なく、更に轉じてミュンヘンを攻めしかば、マクシミリアンは援をヴルレンスタインに求む、グスタフ二軍の間を阻斷せんとして得ず、兵五萬を卒て退きて、ミュンベルグに據る、ヴルレンスタイン追躡し對陣相持すること五旬、九月上旬グスタフ陣を抜きてバイエルンに向ひ、ヴルレンスタインはサクゼンに入りしが、グスタフはサクゼンの急を聞きて急に赴き、ベルンハルドと會してヴルレンスタインと對抗し、十一月十六日兩雄遂に大にリュチエンに會戦し、激闘終日、瑞典サクゼンの衆終に皇師を破りしも、グスタフ王は戰歿す、年僅

グスタフの戦歿

ハイルブロン
同盟

ワルレンスタ
インの遺害

リシエリュ公
三十年役に加
はる

に三十八。ワルレンスタインも多く將士を失ひて退く。よりてベルンハルト等抗
 抵軍を總督し瑞典は公主クリスチナを立て國相アクセル・オクスンズルン政
 務を總理し、ハイルブロン同盟を組成し、瑞典を以て獨逸抗抵教派の主盟と爲し、
 千六百三十三年ベルンハルト進みてオーベルバルツを侵略す。ワルレンスタイ
 ンは一びリュチエンに破れて多く將士を失ひし。のち、サクセン、シュレジエンの間に轉
 戦せしも、峻嚴漸く下心を失ひ、強大宮人と相忌みしかば、密に瑞典、サクセン、佛蘭
 西と通じて君側の姦を除き、西班牙黨を挫かんと謀るに及びて、敵黨の陥擠する
 ところと爲り、千六百三十四年一月二十四日その職を奪はれ、位を削られ、二月二
 十五日エーゲルに於てその幕僚とともに殺さる。フェルデナンド帝は素誅戮の意
 無りしも、之を聞きて驚き喜び厚く刺客に酬ひたり。前にチルリー、マンズフェルド
 の歿するあり。後にグスタフ・アドルフ、ワルレンスタイン兩雄の世を去るありて、
 戦役漸く落莫の感ありと雖も、抗抵派はハイルブロン同盟によりて尙屈せず。帝
 は太子フェルデナンドを總督と爲し、將軍ガルラスをして其副として之を防がし
 め、加特力教派の勢再び盛にして九月瑞典軍をチルドリンゲンに撃破せり。佛蘭

西國相リシエリュは偏に埃地利家の權勢を削がんと欲し、千六百二十四年十一
 月佛蘭西瑞西の兵ブルトリ子に入りしかば、列強の加特力派は皆リシエリュを惡み、
 密に之を圖り、ユグノーの徒また服せず、リシエリュよく之を防ぎ、千六百二十八
 ユグノーの本據ラ・ロシユルを降し、翌年ロアン公の兵をランゲドクに破り、千六百三
 十一年太后メデチのマリアを遷し、悉く國內反抗の徒を挫き、また内顧の憂なし。
 りて千六百三十一年リシエリュ、瑞典王グスタフと同盟を約し、王の歿後は國相オク
 よスンスツルンと訂盟し、チルドリンゲンの敗報に接してより和蘭、瑞典、瑞西獨
 逸の抗抵派諸侯サチア公と連合して大軍十二萬を起さんことを約す。然るに
 千六百三十五年五月サクセン撰侯ヨハン・ゲオルグ等皇帝と和議をブラハに結
 び、國中の瑞典兵を逐ひ、埃地利家はベーメンを世襲す可しと約し、ブランデンブ
 ルヒ以下諸抗抵派侯伯多く之に加はりしも、瑞典は肯ず可くもあらず。帝はサク
 セン、ヴィマルのベルンハルトにフランケンを與へて、加特力派に歸せしめんと
 せしも、ベルンハルトは應せず。千六百三十六年巴里に起き、リシエリュと約し、誓には
 瑞典王の政争なりしもの今や瑞佛二國の連和、獨逸、西班牙の連合と爲りて、亂伊

太利に及びたり、之を三十年戦役の第四局と爲す。

千六百三十六年、チードルランドの西班牙軍は佛蘭西を侵して國都巴里に迫りしに、巴里守衛の將ソアソン忠誠の意無く、舉國爲に震駭す。幸にして皇師狐疑進まざりしかば、リシェリユは王ルイ十三世を奉じ、兵四萬を將て之をコルビエに攻めて十一月之にかち、瑞典の將バーテルは十月埃地利サクゼン連合軍を并トストックに撃破せり。翌くれば千六百三十七年の初、獨逸皇帝フェルデナンド二世は維因に殞落し、子フェルデナンド三世嗣ぐ。新帝温厚戰を欲せずと雖も、瑞典佛蘭西は尙兵を熄めず。適ま年餓えて人相食ひ、餓殍途に滿ち、慘狀甚しきも、干戈結んで解けず。千六百三十八年サクゼンワイマル公ベルンハルドは大に皇師をラインフェルドに撃破し、八月ブリサクを陥れしが、翌千六百三十九年七月中旬中部獨逸に進撃してライン河上に至りて暴に薨す。或は以てリシェリユの毒手に殞ると爲し、或は新帝フェルデナンド三世の害するところと爲すも、ともに信するに足らず。グスタフ、アドルフ王の殞後、抗抵派は實に公を以て領袖と爲せしが、今此災あり、其衆と西北獨逸の諸城市は多く佛蘭西に歸し、瑞典の將バーテルは資金を佛蘭西に得

サクゼンワイマル公ベルンハルドの卒

リシェリユ及ルイ十三世の殞

てサクゼンに轉戦せしが、千六百四十年はチュリゲンに、千六百四十一年は上バルツに出で、殆んどフェルデナンド帝をラチスボンに獲んとして送げず。五月ハルベルスタトに到りて歿す。トルステンソン代りて瑞典軍に將と爲り、千六百四十二年十一月太公レオポルド、參謀ビッコロミニをライプチヒに撃破したり。時に佛蘭西はエルサスを得、千六百四十年アルクール伯は皇師をビエモンテに破り、九月トリノを取り、アルトアの西班牙人を攘ひ、リシェリユの聲望大減なり。而も尙之を謀る者あり、謀徒の巨魁サンクマルスのアンリ、デフィア西班牙と通じて、事露はれ、千六百四十二年九月首謀等リヨンに伏誅す。適まルシオン佛蘭西に降り、リシェリユの所志著々功を奏し、佛蘭西の國威漸く大にして、埃地利家に代る。他年ルイ十四世の盛代あるは實に此良相の遺功に負へりと謂ふ可し。此年十二月四日リシェリユ公薨す。享年五十七。薨するに臨み、伊太利人ジュリオ・マザリニを王に薦め用ひしむ。然れども、王ルイ十三世も亦久しからず、翌千六百四十三年五月に殞落し、一子位に即きてルイ十四世と爲る。年甫めて五歳。マザレン(マザリニ)其政を攝す。此間三十年戦役はなほ繼續し、ブルボンのアンギャン公は功をチードルランドに立つと

雖も勝敗の大なるものなく、瑞典王クリスチアン四世も講和の機を待ちしが、千六百四十四年瑞將トルステンソンは急に噠馬半島を略取したり、獨逸帝ガルラスを將として之を救はしめしも志を得ずしてホルスタインより還り、トルステンソンはヤンコヰツに勝ち、ジーベンビルゲン侯ラコチキと通じて維因を襲はんと謀り、ケーニヒスマルクは北獨逸を横行し、瑞典女王クリスチナ親しく軍に臨みしが、千六百四十五年八月に至り、瑞典、噠馬は和をブレムセプロに結ぶ時にトルステンソン篤疾に罹りて職を辭し、グスタフ・ヴァランゲル之に代り、千六百四十八年七月の末、ケーニヒスマルクはプラハに入れり。

回顧すれば、戦亂年久しく、諸國皆奔命に勞れて、また戦ふの氣力なし、よりて兩教徒各、ミュンスタル、オスナブリュクに會して和を議し、千六百四十八年九月の末、オスナブリュクの議衆、ミュンスタルに移り、終に十月二十四日、西歐史上に顯著なるエストフーレンの和議を決せり、其條約の頂條は、獨逸皇帝は、償金五百萬ターレルを瑞典に輸し、ブレーメン、エルデン二僧正領、リューゲン、ザルリン諸島、メクレンブルグ領、ネスマル及びボムメルンの大部を割讓し、佛蘭西に對しては、千五百五十二

エストフーレンの和約

年に折けしメス、ツール、エルドンの領有を認諾し、ストラスブルグ諸皇領市府以外のエルザス、ビエモンテの皇領、ビテロを讓り、獨逸聯邦にては、メクレンブルグ、ヘッセン、カッセル、ブラウンシュヴァイツ、ルーネブルグ、ブランデンブルヒ撰候等各得るところあり、サクセンは千六百三十五年のプラハ條約規定に従ひ、オペルバルツはバイエルン公に、ウンテルバルツはフリードリヒ五世の長子に分ち屬せられ、加特力、抗抵兩教派は等權を享得し、千五百五十五年規定の宗教和平は全く改新せられたり、而して最も注目す可きは、荷蘭共和國、瑞西聯邦の自立は、皆此條約に由りて認定せられしのみならず、獨逸諸邦も、事帝室に逆ふにあらざれば、内外諸邦國と攻守同盟を組織するの權能を得たることなり、千六百十八年ツールン伯の兵を起せしより、此に至りて前後實に三十年、史家之を稱して三十年戰役と曰ふ、戰役の結果、獨逸は田園荒蕪し、市邑衰微し、壯丁は鋒鏑に斃れ、老幼は溝壑に轉じ、綱紀弛廢し、帝國は尾大また棹はず、ハンサ同盟も解潰せしが、之に由りて、信教の自由は獨逸より諸國に及び、獨逸皇帝の權削平せられて、地方聯邦の實力起り、始は一百年來、教争の餘動を受けて發せし一大役の後半は、諸強の爭權抗駢と

蘇王ジェームス六世則英王ジェームス一世

變じ、之によりて澳地利家勢微に佛蘭西興隆の基を開く。史家ゴットフリーレン條約の要は由て以て近世歐羅巴政略の基礎を定むるに在りと爲せり。實に前はルーテルの教法改革の動波を收め、後は佛蘭西大革命の巨浪を起す淵源を分つ者と謂ふ可し。然り而して轉捩の運は大陸に限らず、英吉利亦此時政教の大革亂あり。始め千五百六十七年七月、蘇格蘭王の位に即きしジェームス六世は、メリー・ステュアート女王の子にして、時に年甫めて一歳諸公の擁する處なりしが、千五百八十六年メリーの英吉利に歿するに及び、英吉利と結び其西班牙の無敵艦隊に當るや、水師若干を出だして英吉利を援く。蓋し其新教を奉して英吉利と與に羅馬加特力派に敵するが爲なり、而も内權臣事を用ひ、外英吉利女王エリザベス隙を窺ひ、民望また歸せず。千五百九十一年宗族ボスエール伯フランシス・ステュアルド反を謀り、事破れて一び縲繼の辱を蒙りしも、獄を破り兵を集めて起ち、王を擒に乞、次で千五百九十四年新舊兩派の謀徒合して王をアベルデーンシャーに破る。未だ幾ならず兩徒の誼破れ、ボスエール伯は薨たれども、教匪尙已ます。千五百九十二年蘇格蘭國會は俗人の撰舉せし長老の管理する不勒斯比得派を以て國教と定めし

爆藥隱謀

に國王ジェームスは、大教師派に傾偏して上下相軋り、千六百年八月ゴウリ伯兄弟の王を脅かすあり。然るに英吉利女王エリザベスは千六百一年寵臣ニセックス伯の誅死以後快々として樂ます。病を得たり。國相ロバート・セシル竊に蘇格蘭王ジェームスを後嗣と爲さんと謀り、千六百三年三月エリザベスの歿するや、女王の遺詔を奉じて之を迎へ立つ。英吉利スチュアルト系の始祖ジェームス一世則是なり。蓋しジェームス王は父母兩系共にヘンリー七世の玄孫にして、英吉利王位に最近の血縁あればなり。エリザベス女王の晩年國中の加特力教を嚴禁して抗抵派に歸せしめしかば、加特力派は新王ジェームスのメリー女王の子なるを以て自派に利あらんことを豫期せしに、ジェームスは一面新教徒の如き極左の新義を排すると共に、また加特力派をも寛容せず。加特力派之を憤り、千六百五年十一月五日王の國會に臨むを期し、爆發藥を伏せて上下兩院を粉塵し、新政府を立てんと謀る。事發はれて謀徒誅に伏す。之を爆藥隱謀といひ、之より加特力派は更に國人の厭惡を買へり。然れどもジェームス王は果決斷行の氣鋭なく、ヘンリー八世、エリザベス女王の如く民意を収攬するの才なくして、自ら器略博識を恃み、君王神權の説を採りて

専政の蹟多く、人心日に離る。唯朝府宮庭の士概ね王に阿附し、教界の元首たる國王は神器なりと爲し、コエルの如きは書を著はして王は擅に法令を變更するを得と爲す。下院争ひて此書を禁せしも、專制の實また掩ふ可からず。千六百十七年、ジェームス王は蘇格蘭に幸し不勒斯比得派の意を失ふを見て、大教師派を以てその國教と爲してジョン・ノックスの遺業を湮滅せんとせしも、民唯王威を恐れて其意服せず。之よりさき名士オーター・ラレーは謀徒に連坐して獄に下ること十又二年、赦されて南米西班牙領に金鑛を探りしも得ず。千六百十八年國にかへるや、王は西班牙と和好を修めんため、フリップス三世の求に應じてラレーを斬る。是亦民心王室を離る、の一因と爲れり。王は又即位の始めより關稅徵求の議を以て下院と合はず。高等宗教法院を以て非國教徒を嚴制して民怨を買ひ、奢侈浪費多く府庫乏しくして官爵を賣る。ベーコン卿が收賄不正の事顯はれ職を失ひしも亦此時に在り。況や大陸に三十年戰役起れども、王は西班牙との和好を重んじて抗抵派を救ふこと國民の豫期に満たず。王は太子チャールスを西班牙に遣はし、フリップス四世の妹公主を娶らしめて、聲バルツ撰侯と獨逸帝とを調停せんとせしも、婚成

らず、ジェームスは下院に迫まられて戰を西班牙に宣し、兵をマンスフェルド伯に假して大陸に戰はしめ、内はまた加特力教派を禁壓。國民之を喜ぶ。然るに千六百二十五年三月王暴に殞落す。後人以て太子チャールス、バッキンガム伯等の毒するところと爲すも、毫も信證なし。

英吉利王チャールス一世は位に即きて年餘、佛蘭西王安リ四世の公主アンリエトを迎へ立て、后妃と爲す。密に其所出の王子を加特力派と爲さん事を約し、佛相リシユリユ公また英吉利に羅馬教を布くを以て教皇に説きて此婚を成さしむ。國民密約を知らずと雖も、后妃の加特力派にして多く其派の臣從を率て至るを視て、教會の爲に鬼胎を抱く。チャールス王は即位の當初より議會の權限に付て下院と争議し、議院の召集停止、解散等悉く王の權能に在りと爲す。下院は之をきかず。王は又財政の急に迫りて地方に誅求せんとするも、議會の協贊なきを以て皆應せず。王大に困し、千六百二十八年議會は權利請願を王に上りて古來享有せし臣民の權利を保護せん事を求むるに及びて、王は之を裁可し、由て資給の協贊を得て財政の危急を救ふを得たり。偶ま佛蘭西にラ・ロシニールを救ひ功なくしてか

チャールス一世

權利請願

へりしバッキンガム伯は此年八月ポーツマウスに刺されしかば、王若し改新の意あらば將に政治の方針を一轉す可かりしに、依然として改めず、リチャード・エストンを舉げて政を執らしむ。翌れば千六百二十九年の議會に於て議院政府の撞突益激しく、議院は王の禁止を用ひず、苟くも教會と合はざる者、議會の協賛なくして噸税磅税を課する者、納むる者は悉く王國の敵なりと宣して解散せらる。ジョン・エリオット在野反對黨の領袖たり、然るに後にストラフォード伯と爲りしトーマス・エントワースは此際節を變じて野黨を脱して朝官に列せ、後にカンターベリー大僧正と爲りし倫敦僧正キリアム・ラウドと與に、チャールズ王の股肱と爲り、后妃と宮府相助け、星院、北院、高等法院等を用ひて在野黨を抑壓せ、清教徒を窘迫し、王は百方財源を探り、エリザベス女王の時一び戰時に船舶を地方に徵集せしを例と爲し、沿海地方より船舶若くば金錢を徵し、遂には船税を全國に課す。バッキンガム・シアアのジョン・ハムプデン之を拒み、國王の違憲を痛論して法院に訴へ、舉國爲に囂々として王勝訴たりしも、ハムプデンの名聲噴々として四方を動かし、憲政派の領袖を以て目せられ、所在船税の非を訴へざる莫し。此間にエントワースは

ハムプデン

短議會

黨中に忌まれ、千六百三十一年出で、愛蘭土に專制の政治を布き愛蘭土議會を徵集し、愛蘭土軍を編制し、ウルステルに阿麻製造處を創設して殖産の利を營み、英吉利王征服以來初めて此土の經營を爲せり。然るにエントワース愛蘭土に去りて後は、ラウド英吉利の首相と爲り、大教師派の條典を以て蘇格蘭に臨みしかば、蘇人慨然奮起し、訂盟誓約して之に抗し、稱して盟約徒と稱す。時に千六百三十八年なり、此時蘇人海を渡りて大陸に轉戦する者多し、盟約徒の領袖之を召還し、軍資を徵集し、嚮にグスタフ・アドルフに從ひし、ダブリンを將とし、以て英吉利の征師を防がんとす。チャールズ王は資を西班牙に借らんとし、兵をフランドルに召さんとせしも、ともに成らず、百計盡きて十一年來召集せざりし議會を召集す。千六百四十年四月議會開けしも、軍資を否決して王をたすけず、一月に滿たずして解散せらる。所謂短議會是なり。時にストラフォード伯は愛蘭土より返りしが、王を輔け辛じて征師を編制して北征せしも、八月前軍ニューボロンに敗績し、蘇格蘭は議會を召集して和を議せんことを求む。伯は之を拒み、英吉利に臨むこと猶愛蘭土に臨みしが如くせんとせしも、チャールズ王はヨークに在りて北兵の來

チャールズ王
と議會との衝突

り衝かんと恐れ、十一月第五議會を召集せり。

第五議會開けてタギストックの議員ジョン・ピム議院を操縦し、星院、高等法院以下專壓の諸官署を改革廢停し、船税を罷めてハムブデンの裁決を翻し、國王が議會の協賛なくして諸税賦を左右するを禁じ、毎三年に上下兩院を召集す可しと爲し、十一月ストラッフォード伯を彈劾す。伯は強辯自ら解きしも其效なく、翌千六百四十一年五月十二日刑場に誅せらる。ラウド大僧正また幽禁せられ、後千六百四十五年に至りて斬られ、此他大臣或は害に遭ひ、或は外に遁れ走る。チャールズ王爲に腹心を失ひ、エジンバラに蘇人に投じ、不勒斯比得派を許可して民心を收攬す。偶ま愛蘭土の加特力教徒蜂起して羅馬舊教を興し、王權を復せんとせしかば、王意稍や喜ぶ。而もピムの一派は毫も王に假さず、王が前失を數へ、宜しく議會推薦する所の大臣に任用す可しと曰ひて、大論案を提起す。議院の溫和黨エドワード・ハイド、フアルクランド卿等之を拒みて物議囂々。議會は自ら解散せざれば他より解散する能はずと決す。千六百四十二年一月四日チャールズ王親ら甲士五百を率ひて議院を脅かし、ピム、ハムブデン等在野黨の五領袖を捕拿せんとして得ず。議會

英吉利革命の
亂

は王に兵權を停めんことを求めしも、王は聽るさずして、太子議官貴族六十議員を率ゐてヨークに退き、八月二十二日旗をノッチンガムに樹つ。革命の内亂は茲に始まり、英吉利の形勢は勤王議會の二派に分れ、西北寒荒の大野は概ね王に勤め、東南昌隆の地は議會に黨し、國都倫敦は議會の手に在り。議會は王の去るを見て直ちに公安委員を置き、エッセックス伯ロバート・デズローに歩騎二萬四千を督して王師に抗せしむ。世に勤王軍を稱して騎衆といひ、議會軍を目して圓顛軍と號す。蓋し清教徒は當時の長髮の俗に反して短髮なりしが故なり。斯くてチャールズ王は倫敦に向ひ、十二月二十三日伯とエッヂヒルに戦ひ、て稍や勝ちバルツ撰侯の子リュベルト勇戦して驍名を博し、ブレントフォードを取り、翌千六百四十三年春后は和蘭に珠玉を沾りて資とし、戰船四艘を將て至り、コルン人また王に勤め。六月リュベルトは圓顛軍をチャルグロヴに破り、ハムブデン重傷を蒙りて歿し、九月フアルクランド卿はニューバリーに戦死し、勤王軍の勢大に振ふ。然るに適ま愛蘭土の謀徒鎮靜せしかば、王は其加特力教軍を援きて助と爲せしにぞ、勤王軍と雖も之を厭ふ者多く、ピムは機乗す可しとし、直ちに英蘇宗教融和の説を立て、北方の雄兵

を招きたり。年末ピム歿せしも蘇軍境を超えて南下し、議院は兵を三路に分ち、キリアム・ウルラー、エセックス卿、マンチェスター卿を將とし、マンチェスター卿をして蘇兵と會せしむ。

卿の部下にオリブ・クロムエルあり。クロムエルはヘンリー八世の時に著はれしトーマス・クロムエルの疎族。少にして清教派に歸し、議員と爲りしも名聲甚だ揚がらず。戦亂發するに及びカムブリッジに赴き、騎衆を募りて軍に従ひ、號令嚴明、精銳敵なし。後に所謂鐵騎軍と稱せらる。クロムエル此精勇を以て、トーマス・フエーヤファクスと與に蘇兵と相應じ、千六百四十四年七月二日大に王軍をマルストンムーアに撃破す。是より形勢一轉し、王師漸く振はず。議院軍は勝に乗じ、十月また敵をニューベリに破る。然れども諸將なほ王師を憚りて追迫する能はず。よりに千六百四十五年議院は自拒令セルティック・レゾリューションを通過し、議員は軍に將たるを得ずと爲して、エセックス伯、マンチェスター卿、ワルレル將軍等の兵權を奪ひ、トーマス・フエーヤファクスを總督とし、特にクロムエルを副總督と爲して兵制を改む。六月十四日二人力を發せて王軍をノーサンプトンシャーのチズビーに破りて、王を西方に奔らし大に

オリブ・クロムエル

チャールズ王議院の手に落つ

第二編

砲礮輻重文書を得て頗る王軍の内情を知り得たり。是に至りて大勢略定まり、西英地方も王に叛き、蘇格蘭の高地にも志士蜂起せり。王はオックスフォードに在りて形勢日に非に、フエーヤファクス來り迫るを聞き、進退據守するなく、ニューアルクに奔りて、蘇格蘭軍に投ず。蘇軍王を幽禁して英吉利議院に賣り、千六百四十七年六月末日チャールズ王は議院の手に送致せられて、ノーサンプトンシャーのホルムビハウスに幽せらる。之を英吉利内亂の概況と爲す。

嚮に英吉利議院は蘇格蘭と結ぶため、盟約徒と約して不徒斯比得派を用ひ、國中の僧徒を逐ひ、カムブリッジ、オックスフォード大學の勤王派を放ち、悉く祭壇十字架畫像を破却し、ラウド大僧正を誅し、コムモンプレーヤーブックを禁じ、大教師派を停止し、王領、僧正領を公收拮却したり。然れ共議院に不勒斯比得派多きと共に、其軍中には更に自由なる獨立派最も勢力を逞くし、フエーヤファクス、クロムエル、其義子ヘンリー・イルトン等其領袖として政教の革新を議會に争ひ、議會は軍衆叛くと爲し、軍衆は議會信するに足らずとして相反目し、互にチャールズ王に款を求め、フエーヤファクスの部下は王を奪ひ去つて、ハムプトンコートに置く。然るに王は英蘇

不勒斯比得獨立派等を離間して隙に乗じて自ら利せんとせしかば、忽ち軍衆に悪まれ十一月走りてキト島守ハムモンドに投じ、爲にカリスブルーク城に幽せられ、また脱せんとするも得ず、然も蘇格蘭は王より不勒斯比得派弘布の密約を得て、兵二萬をハミルトン公に授けて南下せしめ、英吉利勤王の士氣また振ひ、エールス、西方、ケント及び北方は蘇軍境を超ゆと聞き、相續ぎて蜂起し、議會黨の形勢また危し。クロムエル乃エールスの勤王軍をベムブロクシャーに伐ち、急に北轉し、千六百四十八年八月蘇軍をプレストン、ワリントンに撃破し、長驅して蘇都エディンバラに入りて勤王の志氣を挫き、フーアファクス亦北軍の擊攘に力め、南方蜂起の軍をコルクスターに降だす。チャールス王禁錮の後此に至るの亂稱して第二内亂といへり。亂既に平ぎて議會は軍衆の強大を忌み、密にチャールス王に通じてクロムエルを圖らんとし、王は別に愛蘭土の救援を期待す。クロムエル驚きて蘇都より還りしも、また不信の王と運和せんとせず、却りて其資を明にして直ちに禍亂を止めんと欲し、兵を遣はして王を捕へ、フーアファクスをして倫敦に入り、議會を圍み、悉く獨立派外の議員を遂ひ全員をして王の罪を按す可しと決せ

チャールス王の刑死

西班牙カタロニア

しむ。乃高等正院を開き、ジョン・プラト、シャウを院長とし、千六百四十九年一月チャールス王の審判を爲せしに、院員一百三十五人中會する者七十人、フーアファクスは與らず、王審判を拒みしも功なく、二十七日に至り五十九員の議にて王を國賊罪死に抵ると判決し、同じき三十日チャールスは遂にホワイトホール、の刑場に死せり。大陸に於て三十年戦役の局を結び、エストフアレン條約の締結後實に三ヶ月に過ぎず。蓋し西歐史上稀有の革命にして、政教の争相錯綜して此に至り、王政廢れて共和政と變ず。此また教亂の政争に移るを視る可きなり。

天下の國百年運を革めざるは稀有なり。十七世紀の西班牙はまた百年前の勢無く、外チードルランド獨立の後、次ぐに、中歐三十年戦争の禍あり、佛蘭西にリシニユの策行はれて、ハブスブルグ家は衰殘に向へり。西班牙王フェリペス四世の時、ビスケー、カタロニアの反あり、佛蘭西のカタロニア領ルーションを伐つや、カタロニア人佛蘭西に應せしかば、西相オリヴレズ伯其特權を削奪す。千六百四十年カタロニア人蜂起し、知政を殺して自立し、佛蘭西應援の約を得てカタロニア共和國を興さんとす。西班牙の諸州響應す。翌年西兵カタロニアを陥る。其民乃佛蘭西

葡萄牙のアラ
ゴン朝の興
起

に降りしも、バルセロナの攻圍一年三ヶ月にして、千六百五十二年終に陥り、全州また西班牙に歸伏し、悉く傳承の特權を失へり。葡萄牙は嚮に西班牙に併せられてより、毫も利害相關せざる塊地利家の争撞に加はり、商業衰へ苛税に苦しみを以て、數ば分離獨立を謀りしも、皆功なし。然るに適まカタルニアの叛ありて、西班牙の精勇多く之に赴きしかば、葡人は好機乘す可しと爲し、カタルニア征討の王命に従はず。ブラガンザ公の幸ピントリベイロを魁首とし、千六百四十年十二月一日リスボンニ起りて、戍兵を逐ひ、官吏を斬り、西班牙の知政フェリベス二世の孫女サチアアのドンナ・マルガレトは都城を抛ちて退き、ブラガンザ公は擁立せられて王位に即き、ジョアン四世と稱す。國中の諸城風を臨みて皆降り、海外の諸殖民領も西班牙に背きて、葡萄牙王を奉じ、たマロッコ、セウタ下らざるのみ。ジョアン王は佛蘭西、和蘭と結び、また英吉利、瑞典の認證を得て、獨立の名實を完うす。されば、西班牙が全半島統一の事僅に二世にして空しきのみならず、葡王ジョアンはガリチア、エストレマヅラ地方に侵寇して、佛蘭西王ルイ十四世と相呼應す。西王フェリベス四世乃フェルデナンド三世派遣の援將ビコロミニと與に兵一萬二千を

西領伊太利の
變亂

將りて下エプロに進み、アラゴンの佛蘭西軍を拂ひしも、北方葡境の戦久しく已まず、爲に西班牙の國力を消耗すると少からず、然れども歐洲に於ける葡萄牙、佛蘭國の好和なるに反し、海外にては兩國相競ひ、就中東の方印度にては、葡萄牙の勢力漸く荷蘭に益侵せられたりしかば、西班牙は乘じて荷蘭の勢力を削殺せんとせしも、著功なかりき。而して南伊太利に於ける西班牙の威令またふるはず。西班牙多年兵革罷まず、府庫乏しくして、兩シチリアに誅求せしに、其地饑えて民命に耐えず。千六百四十七年バレルモの反は、忽平定せられしも、ナポリ知政ロス・アルコス公、菓實に課税するに及び、七月七日少年トマツソ・ア・ニエロ（マサニエロ）市場に立ちて、その横虐を痛論し、府民呼應して起ちて、知政を屈し、マサニエロ死して後は、マサ公を奉じて戦ひ、終に共和政を建て、ギリス公アンリを佛蘭西に迎ふ。佛蘭西は嘗て力を極めて、西班牙と伊太利を争ひしかば、此に於て大に悦び、千六百四十七年冬ギリス公ナポリに入りしが、のち幾もなくして、西班牙の新知政に捕へられ、西班牙に囚たりしかも、西班牙の勢威は遂に衰へゆけり。若し夫の太西洋外に於ける、葡西諸國勢力の銷長に至りては、自ら別章ありて、茲には説かず。

前世西に西班牙の隆昌なるや、之と前後して亞西歐東に威武を耀かせし者土耳其ありき。今西班牙の稍や衰ふるや、土耳其の威亦微なり。土耳其は櫻里丹アムラト四世立ちて新隊騷擾せしが、千六百三十二年事破れてより復起らず。然れども是より先、波斯興隆して其東南境を侵略し、千六百二十三年には縛達陥り、次でクリムの塔々兒邊陲を擾り、ドン・コサックは露西亞に指嗾せられ、一百五十の賊船に萬餘の衆を載せ、ドン河を下り黒海を渡りて土都コンスタンチノポリスに迫り、ボスフォールの沿海を劫剽し、四境の寇患連年已まず。アムラト櫻里丹は内新隊の憂解けてのち始て兵を外に出し、千六百三十五年大舉して亞細亞を征し、エルツェローム、エリヴン、ダブリヅ地方を克復し、千六百三十八年縛達を恢復して囚虜數千を屠り、翌年和を波斯と講じてコンスタンチノポリスに凱旋せり。若しアムラトにして天命を保たば、土耳其の勢威再び振ひしならんも、飲酒度なく耽醉自ら人を斬るに至り終に熱を病み、千六百四十年二月に殞落す。享年僅に三十。弟イブラヒム擁載せられて櫻里丹と爲りしも、亦女色に沈溺して宮を出でず。優柔不斷苟安を貪り、一意列國の鼻息を覗ひたりしが、尙エチチアと衝突を免れず。千

六百三十八年、エチチアの水師は寇賊を追討してアヴロナを砲撃せしに因り、後二十五萬セキンの償金を輸して罪を土耳其に謝せしも、土耳其許るさず。千六百四十五年四月、ユーンソフは兵五萬に將としてエチチア領たるカンディア(クレタ)島を伐ち、カチア、レチモを陥れしも、三年にして全島を下す能はず。却りてエチチアの爲にダルマチアのクリサを取らる。その報土都に至るや、政府軍隊爲に激昂して櫻里丹イブラヒムの罪を數へて之を廢し、次で之を殺し、其子麻譚末四世を立つ。年甫めて七歳。當時歐羅巴諸國は三十年戦争の禍ありて紛々たる亂離の中に在れば、土耳其の爲には乘隙の好機たりしに、土耳其は毫も西侵の意なく、暫に侵掠せられし地自立せし地を克復する能はず。外波蘭エチチアの辱を甘受し、内新隊の強横抑へがたく、千六百四十八年以後八年間に首相國政を左右するもの十五人に及び、國礎動搖してまた西歐諸國の憂を爲すに足らず。年とともに衰殘の境に沈淪し去る。顧みて百年前の英風全くなく、コンスタンチノポリス新月の色黒し。恰も是時嘗て其對敵たりしハプスブルグ家の漸く傾衰するに遭ふ。十七世紀の中葉以降の政争は章を新にして、佛蘭西の霸權興隆の章に譲らむ。

第五章 亞米利加の征服殖拓

西班牙海外経略の次第、古亞米利加の文化、墨士哥の始原、モンテズマ一世父子、モンテズマ少王の盛世、フェルナンド・コルテスの征略、コルテスとトラスカラ、コルラの陥落、コルテス墨士哥に入る、慈夜の變、ゲアテモチン、コルテスの末路、秘魯文化とインカの起原、メンドサエラスコの治、ピザロの西征、ファイナカバタ父子、秘魯帝國の滅亡、ピザロ、アルマケロ及びマンコ・カパク、カストロトとペラ、ゴンザロ・ピザロ、アルゼンチン地方の経略、巴西の發見、巴西の殖拓、荷蘭の西印度商會、ナサウ伯モリツ、巴西商會、北米に於ける英佛移植の始。

西班牙海外経略の次第

葡萄牙が印度の航路を開きてその副王アルボケルケ臥亞に據りて侵略を始めし時、西班牙は内王室動搖して未だ盛に西方新大陸の經畧に任ずる能はず、千五百八年西班牙人ポルトリコに移住し、翌千五百九年ジュアン・ヂ・エンズ・ド・ソリス及びピンゾンは南亞米利加沿海の長涯を發見して所々に上陸し、千五百十一年ヂ・エゴ・エラスケは玖馬を畧し、千五百十二年ボンヌ・デ・レイオンは當時西方の所傳

に有名なる不老の靈泉を發見せんとしてフロリダを探り得しは西侵の漸に過ぎず、西班牙の外領はイスパニオラの二大島(ハイチ、サント・ドミンゴ)玖馬、バハマ、カリビ群島、南亞米利加の北沿岸、ダリエン地峽等に散在せるのみ、然るに千五百十三年ヴスコ・ヌニェズ・デ・バルボアはダリエン峽を横斷し、シエルラ・デ・クエレカ山嶺に攀ちて始めて新大陸の外にまた渺漠たる大海あるを知りて、之を太平洋海と名け、パナマを取りて寄泊の地と爲す。クリストヴル・コロンが最後遠航の目的は實に此大洋に在りしにて、其發見は新大陸の發見と等しく歐人を愕かしたり。時に西班牙浮浪の士多く西方に航して利を奪ひ産を作るに汲々たりしが、イサベラ・フェルナンド王前後殞落して幼主國に臨み帝位將に其手に歸せんとするに及びて、財政の擴大を來たし、かば忽海外未開の地を侵略して用途に充てんとす。乃言を神聖加特力教會の基督教傳播に託し、異教の民をしてカステル王羅馬教皇の治化に歸せしめんと曰ふも、實は侵略剽奪に外ならず、其俎上の肉となりしものは墨士哥秘露なり。

古亞米利加の文化

嘗て世界文明の五起源地を論じて支那、印度、西亞細亞、埃及の四を挙げしが、今

や新世界の發見に伴ひて第五文化の發地に遭遇せり、亞米利加文明の古史は舊世界に知られずして幾星霜を経過せしや、探明する能はずと雖も、秘蹟、墨士哥、ユカタンに殘存せる宏大なる遺蹟、殘墟は、ニル、チグリス、エウフラテス河畔に見しところに譲らず、都府、戸口の盛昌、宮殿、臺榭の善美、社會政法の完備、洵に蠻夷の地にあらず、當代西航の士以て印度と爲し、支那と爲し、東亞細亞の一地角と信じたるは、故なきにあらず、或は其民西北よりカリフォルニアを経て南北大陸に移遷し來りしもの、必ずや蒙古、土耳其又は日本の水陸よりせしにあらざるやを疑ふに至れり、只文献の徵す可きなきを以て其民間所傳の説を信するに過ぎず、始め墨士哥、谷北ツラ及びユカタン半島に居りしトルテク種は七世紀の中葉以後漸次南に下りしが、十一、二世紀の頃、アマケマケン地方よりキケメカ族のアナウアク高原に至るあり、習俗、蠻野なれども、制法鞏固にしてトルテクの荒地を得、會師ゾロトル始めてテナユカに鎮して附近に命令す、蓋しテナユカは現時墨士哥の北二三里に在れども、アマケマケンの地は果して那邊に在りしやを知らず、唯其遷移の間に十八ヶ月を費したるを知るのみ、斯くてゾロトル位に在ること十餘年、

墨士哥の始原

其子の爲にトルテク酋長の女を納れ、二族通婚親和して、戸口破殖し文化發展し、ゾロトルの子孫相尋ぎて遺業を守れり、然るに十二世紀の中葉カリフォルニア灣北にアットラン國ありて、その民をアツテクといひ、漸く遷移を始めて六部に分る、墨士哥族は實に其一にして、また移遷してツムバンコに至り、其地の酋長の爲に女を嫁して後の墨士哥王統の基を創めしが、更にテヅクコ湖畔に移り、ゾロトル王の許可を得て土著せしも、他族の侵掠、迫壓を蒙りて、萎微振はず、魚介、草藻に衣食して僅に生を保ち、千三百二十五年湖中の一小島テノクチトランに一市を創め、洲渚を埋め、諸島嶼を連ねて地を拓き、近隣諸族と抗對せんために、千三百五十二年アカマピチンを撰び立て、王と爲す、墨士哥王室此に始めて起りたり、アカマピチンは位に在ること三十七年、その子はアヅカボザルコの公主を娶りて、勢威を張り、下りてアヅカボザルコ王テゾゾモクはアコルフアカンに克ちて、墨士哥王キミル、ボボカにテヅクコを、トラテロルコ王トラカコトルにフエゾトウを與へ封じたり、千四百二十二年テゾゾモク王歿して子タヤチン嗣ぎ立ちしに、同胞マヅトラトン後統を争ひて之を墨士哥に奔らし、かば、墨士哥王キミル、ボ

ボカ之を挟みて詐りてマヅトラトンを誘殺せんとし、謀漏れてタヤチンは却りて欺き殺され、キミルボボカは楚囚と爲りぬ。墨士哥人よりて故アカマビチンの子イヅコアトルを立て、主と爲し、諸族を連結して兵を起し、アヅカボザルコを陥れてマヅトラトンを殺して子ザファルコヨトルをアコルファカンの主と爲し、新に墨士哥アコルファカ、テパチカ三角同盟を誓ひて攻守相輔けんことを誓ふ。是實に墨士哥興隆の端緒にして、驍勇の將軍モンテヅマの功最多きに居る。されば千四百三十六年イヅコアトル王の殞落するや、モンテヅマは墨士哥王と爲れり、之をモンテヅマ第一世と爲す。

モンテヅマ第一世は王位に即くや、カルケセを滅ぼし、トラテロルコ王を廢立し、地を南方に拓きてクイヒヅカスを收め、西の方はトヅムバファカン略し、同盟諸州の離叛を戡定し、千四百五十七年には墨士哥灣頭のクタスタを降して威を立て、覇を稱し、内洪水饑寒の憂あるや、王は倉廩を開きて民を恤救し、墨士哥歴世第一の英主と稱せられたり。然るにモンテヅマ王の歿してアハハカトル代り立つや、前王の遺謀を紹きて力を攻伐に用ひ、トラテロルコ、マトラデンカを取り、

モンテヅマ一世父子

モンテヅマ少王の盛世

ヒキビルコ城を略して城主オトミーを擒にしたり。千四百七十七年王殞落して兄チゾク位に即きしも、其下に弑せられ、弟アフトゾトル位に即き、また外は四方を攻畧し、内は前世以來經營せし大廟宇を築成す。千五百二年アフトゾトル王歿し、故アハハカトル王の子位に即く。モンテヅマ少王ホコホチンは、是なり。墨士哥封境の廣大はアフトゾトル、モンテヅマ交替の際に至りて、其極に達し、昌盛また頂點に達せしが如く、モンテヅマはテノクチトランに都し、時に或は筆をテヅクコトラコバンに駐め、貢賦の君會六百、附庸の諸侯三十、議會、司法、行政、徵租の諸官職概ね具はらざるは莫く、技術、文學、また見る可く、司祭の僧徒、學政を掌り、社會政法の顧問に任じ、大領を有して、貴族の首班に居る。其祠堂をテオカリと曰ひ、男女十三神あり、就中國中最も崇敬せるは、軍神フィチロポチュリ、農耕技工の神ケツアルコアト等にして、其文化の進展せるまた西印度諸民俗の卑陋なると日を同うして談る可からず。天外の殊域、此大國あるは、歐人の夢想だもせざりしところなり。さればモンテヅマの祚を踐むや、漸く自ら尊大にして、豪奢を極めしかば、海外の異人至らざる前、國運既に振はず、また前代の實勢なし、都城テノクチトラン

を距ること遠からず、トラスカラの小共和國あり、モンテヅマ屢ば之を征して貢賦を納れしめんとせしも屈する能はず、千五百八年には墨士哥軍アマトラを討ちて全く敗れ、また慧星の見ゆるありて、アルコフアカン王子ザファルビリは以て東方新人渡來の前兆なりと爲す、果して西班牙人の其地に至るありて歐人の侵畧は始まれり。

時に西班牙玖馬の守將デゴエラスケツは近傍大陸の地を侵畧して領土を拓くの意あり、千五百十八年從子ジュアン・デ・グリヤルヴをしてベドロ・デ・アルヴラドと與に附近の狀況を損察せしむ、二人乃カムビアキ灣に入りて、墨士哥の沿海に上陸して、その富庶に驚き、かへりて其取る可きをいふ、島中西班牙エヌストレマヅラの人フェルナンド・コルテヅあり、浮浪にして異材ありて人に知らる、此を聞きて財を散じ衆を募り、船數艘を獲て自ら趣かんと請ふ、エラスケツ財政豊ならず、部下才幹なきを以て、假に之を許るせしが、其將に發せんとするに臨み疑惧して之を止めしも及ばず、千五百十九年二月コルテヅは志士數百を將て既に玖馬を發せり、コルテヅ先づユカタンに著し、數年前風浪の難に漕ひて其地に留まりし

フェルナンド
コルテヅの征
略

コルテヅとト
ラスカラ

西人アギラルを得て嚮導と爲し、トバスコに上陸す、三月國兵數千來りて之を邀へ戦ひしも、西兵が精甲を貫き火器を發し馬に跨れるを見て、大に畏怖して悉くコルテヅに降る、蓋し歐洲にもなほ新なる火器は素より墨士哥に知られず、馬は此國に産せざるを以て、神兵外より至ると爲せしなり、コルテヅ乃國神の像を毀ち、盛式を以て聖母瑪里の像に代へ、女囚中の美少女に洗禮を與へ名をマリナと改めて通譯に任じ、轉じて四月下旬サン・ジュアン・デ・ウロアの地に著す、墨士哥府を距ること百里に足らず、居ること四月にしてモンテヅマの使者至りて來意を問ひ、往復再四、コルテヅは其地にエラクルヅ城を築き、北隣セムボアラの強族トトナクが墨士哥政府に平ならざるを聞きて之と好を通じ、トトナクはコルテヅの爲にトラスカラ共和国を説服し、與に墨士哥を伐たんとす、こゝに於てコルテヅは玖馬の守將エラスケツと斷ち、エラクルヅの二使節に黄金珍寶を齎して西班牙に至らしめ、カルロス一世王に書を呈して事を奏し、船舶を沈めて部下の歸心を絶ち、ジュアン・デ・エスカランテに百五十人を與へてエラクルヅに留守せしめ、八月中旬征途に上り、チエラ・カリエンテの饒野を過ぎ、高原に上り、トラスカラ谷

に入り、其力を借らんとす。トラスカリの民は勇武にして主無く、或は外人と戮力して族敵アツテクを討たんと云ひしも、老雄クシコタンカトル父子可かず、衆を率ゐて出で、コルテツと戦ひしに敵せず、遂に和を請ひ、コルテツを迎へて降る。コルテツは之を納れてトラスカラに入り、衆を息め食を足し、士民の女を娶り、始めて基督教を亞米利加に布きて、形勢を視て進まんとす。墨士哥のモンテヅマ使を遣はしてコルテツに説くに、西班牙人を引きて都城に迫り、民心を動かす勿らんとす。コルテツ可かず。トラスカラの南現時のラ・プエブラ・デ・ロス・アンジェレスに近くコルラ府ありて墨士哥帝國の工藝商業の中都にして工藝和平の神ケツアルニアトルの大廟埃及の金字塔よりも更に大なる金字塔ありて昌隆殷富の地たりしが、トラスカラ人は常に之と敵視し、此に於て西班牙人の力を藉りて之を取らんとす。コルテツ乃トラスカラ兵六千を率ゐてコルラにゆき、之を城外に留め、自ら西人を帥ゐてコルラに入りしに、コルラ始は之を款待せしも、後西人を謀らんとす。一酋の妻事をマリナに告げてコルテツに達せしかば、コルテツ府中の民を會して之を掩殺し、二時間に三千餘人を誅し、府外のトラスカナ人之に應

コルラの陥落

じて四方より亂入し、殺戮劫掠を擅にし、太だ殘虐を極たり。モンテヅマ之を傳へ聞きて益々西班牙人を畏怖せり。

此時に方り、テヅクコにモンテヅマの姪イツトリルヅギトルといふものありて、同胞カカマチンと争ひ、モンテヅマがカカマチンを助くるを憤り、密に欺をコルテツに通じ、使をトラスカラに遣はして之を迎へ境を開きて墨士哥に入らしめんとす。是に於てガカマチンはテヅクコに奔りて兵を募り、モンテヅマの爲に西班牙人を防がんとせしに、モンテヅマはかへりて之を捕へてコルテツに送致し、前王子ザウアルピリの第三子クイクイカチンを立て、テヅクコ第十二世の主と爲したり。コルテツ乃トラスカラ、コルラの衆を従へてテノクテトランに向ひ、モンテヅマに會見して都府に入る。實に千五百十九年十一月八日なり。

コルテツ既に墨士哥の都城に入り、西班牙王を世界の元首と稱し、加特力教に歸依せんことをモンテヅマに勸む。モンテヅマは西班牙奉戴を諾せしも、國教を變ずるを肯せず、唯心裏竊かに昔アツテク神が海を渡りて東する時、新人を西せしめて盛世を致さんといひしを懐ひ、西班牙人を神示の新人として抗敵せず、偶

コルテツ墨士
哥に入る

まコルテツがエラクルツ附近に留守せしめしジュアン・デ・エスカランテの士衆附近の酋帥と闘争して死傷せしかば、コルテツはモンテヅマに迫まり之を挟むで己が營壘に移らしむ。モンテヅマ拒みしも力敵せず。コルテツは府庫を開き、大に財貨を得て遙に之を本國に送りて、當時財政に窮せる王室廟堂を動かし、其墨士哥征服の業を允可せしめんとす。既にして玖馬の守將は勇將パンフ・ロ・デ・ナルヴエツに歩騎千五百砲二十門を授けて至り、コルテツの職を廢せしむ。コルテツ之を破らざれば威信立たずと爲し、ペドロ・デ・アルヴラドをして墨士哥を留守せしめ、親ら部下の精兵を抜きてかへり、風雨に乗じてナルヴエツをエラクルツ附近のセムボアラに襲ひ執へ、其兵を併せたり。然るに其間にアルヴラドは部民の蜂起を恐れて、祭宴を襲ひて都中の貴族六百を掩殺せしかば、滿都の士民忽起りて西班牙人を圍み、コルテツかへり防戦に力めしも衆寡敵せず。勢日に迫まり、モンテヅマは夾要せられ壘上に立ちて都民を憐撫せんとして矢石に傷き、千五百二十年六月末日に歿し、翌夜コルテツ以下暗に乗じて外に遁れ、要撃せられて、多く士馬を失ひしも、都民主將なく尾撃せざりしを以て幸に圍を脱するを得たり。後

悲夜の變

西班牙人之を稱して悲夜 *La noche triste* といへり。

コルテツ一び退くや、モンテヅマの弟クイトラファアチン位に即きて國に臨みしも、數日にして疱瘡を患ひて歿し、モンテヅマの姪グアテモチン代り立つ。蓋し墨士哥未だ會て疱瘡なく、此時西班牙より始て之を傳へたるなり。グアテモチンは時に年なほ少壯、氣甚だ鋭く、力を外敵討攘に盡くし、コルテツをオツムバに擊ちて敗れしも、糧を積み壘を築きて征旅の備を修めて怠まず。コルテツも亦トラスカラに退きて力を養ひて再舉を圖る。時にテヅクコの主歿してイヅトリルンキトル其地を得てコルテツを助けしかば、未だ半年を過ぎずしてコルテツの衆太多く、年末進みてテヅクコに入り、イヅトリルンキトルの兵五萬を併せ、大に船を造りて墨士哥城下の湖江に浮べ迫り、千五百二十一年五月末日を以て府を圍む。偶ま西班牙政府はコルテツの征略を裁可して遙に總督に拜して援軍を發す。然もグアテモチン兵を督して善く防ぎ、城中食匱しく力窮まりしもコルテツの勦降を聽かず。八月十三日力盡きて降る。コルテツ乃附近に退き城市を再建せしが、西班牙人は豫想せし貨財を得ざるを以てグアテモチンの隱匿に由ると爲

グアテモチン

して之を死に處し、またトラコパンの領主を誅す。都城既に陥りしかば、國內諸城風を望みて潰え、西兵過ぐるところ人なきが如く、諸會尙君帥の空名を存するも、實權はコルテツの手に歸したり。

コルテツ既に墨士哥を下したれば、更に四隣の地を經略し、ミコアカンを招く。その主タンガホアン二世(カルゾンジ)來らず、クリストバル・デ・オリドの兵境に臨むに及びて、西班牙に歸服し、墨士哥に至りてコルテツに謁す。斯くて三年の間にコルテツは亞米利加の大領土を招き、新西班牙と名けて、遂に西班牙王に獻じて定遠の大功を立て、是より後地方の徇畧領土の經營に盡瘁し、千五百二十四年其將アルブラドはグアテマラを開き、東南更に強國ありと聞き之を伐ちてクスカトンに入り、ホンヅラス、ニカラガ前後相尋でみな西班牙に降りたり。其間コルテツの威亞米利加を動かし、屢ば本國に來往して拓殖に力めしが、威望漸く墜ちて重んぜられず、西班牙にかへりて顯要の地を得んとしたるも、新に南米征服の舉ありて廟堂また墨士哥をいふものなく、コルテツ失意病を爲し、千五百四十七年冬カスチレヤ・デ・ラ・クエスタに逝きたり。

コルテツの末路

アンドンザエエスコの治

コルテツ今の墨士哥の地を定略して、西班牙王に獻じ、號して新西班牙といふ。わが古史に所謂濃毘數班是なり。西班牙王カルロー一世より始めてアントニオ・デ・メンドザをその代王と爲し、千五百三十五年秋アントニオ任地に到り、治政良しきを得て任に在ること十五年にして、南秘魯に去り、ドン・ルイス・デ・セラスコは千五百五十年の末、その後をつぎて新西班牙代王と爲る。蓋し新西班牙の代王は權能殆んど本國王に減せず、たゞ之を制する所以は、國王の敍任權レシジチと控訴院アウディエンシアあるのみ。されど代王はなほ控訴院長たり。また市邑の議政にはカピルド、アユンタミエント等の稱あり。法典は諸種の成規舊典を纂輯せる印度法纂を用うといへども、利はつねに西人にありて、土人の争ふて敗れざるは莫く、羅馬教界の力はマドリド政府の手を経ざれば新世界に及ばざるを以て、西班牙は間に居て利を貪りて已まず。然れどもメンドザ、セラスコの二代王政令を明肅にしてよく統御の根底を固めたれば、是より後十九世紀に到るまで墨士哥遂に動かすなぐ、西班牙の羈扼の下に屈したりき。

秘魯の政體は古埃及に肖て、國民は多く奴隸の狀を脱せず、その上に自由の良

秘魯文化とインカの起原

民あり、地方には、長官クラカあり、その上にインカ種ありて統治を掌り、施政行法の爲に人民を十族宛に分ちて統御の便に宜せしが、時世の推移に従ひて此族別漸く變じて領土に分るゝに至れり、政治は祭政一致にして、インカは帝王にして最高司祭を兼ね、最高太陽神の神詔神意に因りて國民に臨むと爲し、苟も之を冒す者は罪死に抵る。その國教の拜星教にして太陽太陽諸宿の星辰を崇拜するに因りてなり、其國の所傳に據れば、如上の制法文化は此土本來のものに非ず、十一、二世紀の頃、異人マンコカバクといふ者其妹にして妻たるママオセルロを伴ひて始てチチカカ湖畔に來り、自ら太陽神の苗裔にして神命により蒼生を蠻野の域より救ふために來れりと號し、民に農耕工藝紡織の技を教へ、法制を布き教理を説き、四隣を徇服征略して政教を弘め、子孫遺國を繼紹して十五六世紀に及び、國力益昌なり、然るに歐羅巴諸國の船舶海に浮びて地を四方に探るに方り、太平洋海を發見せしヌエヅ、デバルボアは始めて秘魯帝國に入らんとせしも事成らずして已みしに、パナマの西班牙殖民地にフランシスコ・ピザルロといふ賤民あり、勇膽よく事に耐え、嘗てバルボアに征途に隨ひ遺略の大志を懷き、デエゴ・デア

ピザルロの西征

ルマグロと西南境を探りて黄金の産地に至らんことを謀り、僧ヘルナンド・デルクの資給を仰ぎ、二船一百五十人を得、パナマ太守ペドラリアスの許可をうけ、千五百二十四年南征の途に上れり、時に千五百二十四年十一月中旬にしてピザルロ齡已に五十又三。

斯くてピザルロの一行は始めは秘魯の北方なるピル會帥の地に上陸し、沿岸の邑洛に款待せられしも、未だ侵略を爲すの實力なく、備さに艱苦を経て功なりしかば、パナマ太守悦ばず、爲に援助を與へず、千五百二十七年の冬ピザルロはツムベツ市に至りて金屋の殿堂廟宇を見、始めて大に悦び、西班牙に還り國王カルロス一世に見えて此發見を奏し、勳爵をうけ、アデラントと爲り、征服の裁可を得、アルマグロと功を争ひしも、また和し志士資財を募りて、パナマに至り、千五百三十年十二月三船三百餘人を將ゐてツムベツに達し、クヅコ、カハマルカの殷富更に大なりと聞きて進んで之を攻めんとせり、之より先秘魯の始祖マンコカバク十世の孫王ユバンキは地を南の方智利に拓きてマウレ河に及び、國運益昌隆にして孫フアイナカバクに及び、又文武兩道に秀で強國キトを討平して地を

フアイナカバク父子

北に拓き、農耕工業を勧め、道路を開き、インカ文明を四方の蠻野に布きしが、歐舶洋上に出没するを見て、船舶兵器の精巧に驚き、その必ず來りて國患を爲さんことを恐れしが、千五百二十九年に歿し、長子フアスカルは秘魯を繼承してクヅコに治し、庶子アタフアルバは母系の尊を以てキトを得てカハマルカに據りて、領土南北に分れ、互に相對抗して下らず。アタフアルバの生母は故キト王の公主なればなり。斯くて國争の役起り、アタフアルバ勝ちしが、國人亂に遭ひて、外人の國に入るを顧みる能はず。ビザルロ此間に乘じて國勢を計量し、地をタンガララにトして新邑を創めてサンミグエルと名け、アタフアルバを挾むで征略を完うせんため、步騎僅に一百七十を將て千五百三十二年十一月十五日カハマルカに入りてアタフアルバに會す。アタフアルバ因りて西人擅に沿海を掠略せしを責めしも、交盟を約し、翌日請によりて公場に出で、西人を見る。ドミニコ派の一僧ビザルロの命を受け突如として基督教の聖典を捧げて之に迫りて改宗歸依を強る。故に聖典を地に投じて、聖教を蔑如せりと爲し、伏兵發してアタフアルバを生擒せり。然れどもカハマルカ附近の國人はアタフアルバに附かず、爲に之を救ふ

秘魯帝國の滅亡

ビザルロとアルマグロ及びマンコ・カパク

者なく、嚮にグアスカル征討に従ひし兵衆また解散して用を爲さず、之に反して千五百三十三年二月アルマグロ新兵を率ゐて來りしかば、ビザルロの勢益加はり、インカの價金百三十二萬ペソを得て、上は西班牙王室に獻じ、下は將士に頒ちしも、終にアタフアルバを放釋せず。北方勤王の兵起ると聞きて、八月下旬之を死に處したり。九月ビザルロはカハマルカを發し、ハウハに殖民地を置き、途上自らインカの嫡統と號するマンコカパクを擁し、十一月中旬秘魯國都クヅコに入り、マンコを立て、要鎮に兵を屯して、假政府を置き、秘魯帝國此に亡びたり。斯くてビザルロは秘魯を篡ひしも、南米の亂雲尙收まらず。千五百三十四年三月、西班牙の將ドンペドロ・デ・アルヴラドは志士五百を以てカラケス灣に到り、キトを取りて、ビザルロに抗せんとせしが、議成りて、船舶士衆を擧げて、ビザルロに賣りたり。ビザルロはクヅコ都するに便ならずとし、千五百三十五年一月新に市府をリマク谷に創奠して、名をリマと命じ、經營太だ力む。アルマグロは其虛に乗じてクヅコを陥れ、西班牙よりビザルロ經畧以南の地を得るの勅許を得たれば、クヅコは其有たりと聲言して、動かす戰端將に發せんとす。ビザルロ之に説きて、

更に南に去りて智利を取らしむ。然るに一難去りて一難起り、マンコカバクは西人の待遇薄きを憤り、クヅコを遁れ、千五百三十六年二月大兵二十萬を嘯集してクヅコを圍みて半ば之を焼き、所在の國人降起して西班牙の鎮將を斬り、進みてリマに迫まらんとす。ビザルロ兵を發してクヅコを救はんとすれども、道路雍塞して通せず。クヅコの包圍半年に及びて僅に解けしも、智利を伐ちしアルマグロは國人の擊退に遭ひ志を得ずしてかへりて、またビザルロを討て勢太熾なり。ビザルロ力戦して千五百三十八年六月之をクヅコ附近のラス・サリナスに擒にして、國中またビザルロに抗敵する者なし。よりてビザルロは威福を擅にし、專恣横行、また憚らず。西班牙政府亦奈何ともする能はず。終にウカデ・カストロを遣はしてビザルロと協治せしめ、其死を待ちて朝政を布かしむ。恰も此際ビザルロはアルマグロの失顛を耻ぢ、ドン・ペドロ・デ・ヴチギアをして智利を伐たしめ、親ら本軍を以て之に繼がんとす。然るにリマにアルマグロの遺子アルマグロあり、密に黨人を結び、千五百四十一年六月二十四日急に襲ひて、ビザルロを斬りて自ら之に代りたり。ビザルロ享年六十又六。

カストロ・エ

時に西班牙王の使官ウカデ・カストロはボバヤンに至りて、此變報に接し、キトに入りて歓迎せられ、政廳建始の王命を宣べ、使者を四方に派遣して歸順を勧め、進みてリマに入る。アルマグロはクヅコに在りて之を聞き、カストロと商議せしも、議合はず。千五百四十二年九月之とクパスに戦ひて敗死す。カストロ乃新令を布きて従來の秕政を除き、學校を立て、基督教を教へ、土人を保護して康安を圖りしに、西班牙にては南米土人は悉く王臣たるべく、奴隸を放釋して自由の民たらしむ可しとし、ブラスコ・ヌニヅ・エラを秘魯代王に拜し、屬僚を従へて海を渡らしむ。千五百四十四年三月上旬、エラの一行ツムベツに著し、直ちに奴隸の解放を始む。秘魯國中爲に動搖し、故ビザルロの弟ゴンザロ・ビザルロをクヅコに招き立てて秘魯假都督と爲し、兵を募りて代王を伐たんとす。エラはリマに至りて亦戦備を修め、疑ひてカストロを收め、リマを退かんとす。自ら敵に獲られ、十月下旬ゴンザロ・ビザルロはリマに入りて黨人を以て要路に配す。カストロは遁れて西班牙に還り、辜無くして獄に下り、ヌニヅ・エラはツムベツを守りて、勤王の師を會せしも、千五百四十六年一月キトに戦歿し、秘魯はまたビザルロの手に歸したり。

ゴンザロ・ビザルロ

事西班牙に達するや政府は大に驚きしも力争の利なきを思ひ、才幹の僧ペドロ・デ・ラ・ガスカを遣はし智略を以て民心を收めしむ。ガスカ秘魯に至り徐に事を圖りしも、ゴンザロが武力を以て王位を得んとするを見、終に干戈に訴ふ。之より先千五百四十一年秘魯征南の先鋒ウルデギアは智利に入りて向ふところ殆んど敵莫く、マボコ河畔にサンチアゴ府を創めしが、是に於て秘魯にかへりガスカを助けてともにゴンザロを伐つ。千五百四十七年ゴンザロはハキイハグアに敗れ死す。ウルデギアはまた智利に入り、威令南方に行はる、こと前後十又二年、千五百五十九年アラウカニアの土人を討ちて戦死せり。ウルデギア市は實にその建設せしところなり。斯くて後秘魯はガスカの新政策によりて民心西班牙に歸嚮したりしが、智利はウルデギアの没後また亂れ、治亂常なきもの殆んど一百八十年に亙りしが、千七百二十二年和約成り、土人と西班牙領とはピオビオ河を以て界と爲し事始めて平きたり。

西班牙人は一面には秘魯智利を取る間に、他面には今のアルゼンチン地方を徇略せり。千五百十六年シユアンチアツデソリスはリオデラプラタ河口を發見し

アルゼンチン
地方の経略

て西班牙王の爲に沿海の地を定めしも土人の爲に殺さる。然るに後十年を経て、千五百二十六年セバステアンカボトは河を溯ること百餘里、支流アルセロに入りて堡壘を築き、衛戍を置き、土人の金銀器を有するを見て河に銀河と名けしが、西班牙は此を聞き直ちにドンペドロ・デ・メンドザに衆二三千を授けて至らしむ。千五百三十五年メンドザは銀河に至りてブエノスアイレス府を奠め、ポトシに達し、尋で其地に銀坑を發見し、アブラグエーのアスンシオンを建設したり。然れども沿河の土人グアラニ種は凶悍服し難く、ブエノスアイレス爲に焚かれ、千五百八十年に及びて市府始めてなりしが、その前西班牙人は既に内地にサンタフェ、メンドザ以下の殖民市を創置して漸く沿海地方に及べり。蓋し南米殖民の一異例なりと謂ふ可し。而して此地方別に總督ありと雖も秘魯の政令を受け、且當時の海外商賈ブエノスアイレスより秘魯に商品の流入してパナマ航路の利を別たんことを思ひ、西班牙政府に説きてリオデラプラタの商業を禁じたりしかば、ブエノスアイレスの名は後久しく歐人の間に知られざりき。此外ギアナも亦千四百九十九年西班牙の海客ギンテ・ヤネズ・ピンゾンの發見にかゝりしも、其殖民

は千五百八十年ポメルーン、エッセキボ河畔に到りし荷蘭人に始まりのち千六百三十年前後英吉利人のベルビク、スリナム河邊に地を拓く者ありしも、なほ十八世紀の末葉に到るまで蘭人その地の大部を掩有したりき。

西班牙人の地を洋西の新世界亞米利加に探るに當り、その西隣たる葡萄牙はかへりて東亞細亞の舊天地に通航商賈の權勢を伸張せり、然りと雖も葡萄牙もまた西に向はざるにあらず、南米巴西の拓植は實に葡人の業なりき、嚮に近世の初海外探險の條下に葡人西征の偶事をいひしが、今其詳を補はむ、始め千四百九十九年コロンムブスの友キンチント・ヤニヅ・ビンゾンをはじめて聖アウグスチノ岬より陸に沿ふて、亞馬孫河を経て、オリノコ河に抵り、其地を取りしも、民を移植せずして還りしかば、翌年葡萄牙王の命を受けて東方に向ひし提督ペドロ・アルブレヅ・カブカラルの海上風に遭ひて西漂此地に至るや、四月ポルト・セグロに入り、十字架を建て國土をサンタ・クルヅと名け、使をリスボンに遣はして新地の發見を奏す、是よりサンタ・クルヅの名久しく官府に用ゐられしが、國中ブラジル樹多きにより後遂に以て國號と爲すに至れり、斯くてカブラルは印度に向ひしも、

巴西の發見

巴西の殖拓

葡王マノエルは提督アメリゴ・ヴェスプチに三船を授けて巴西に至らしめ、ヴェスプチは千五百一年、千五百三年其地を探險し、人を留めてかへりしも、當時印度亞非利加の利福多大なるを見し、葡萄牙王は巴西の利獲少きを見てまた顧みず、しきりに西半球の柘植經營に盡瘁せる西班牙すら未だ巴西の遺利を知らずして、教皇より西方領有の裁可を得なから、尙其地の葡領に歸せしを傍觀せり、然るに三十年を経て巴西多く金銀珠玉を産すとの説傳はり、歐羅巴諸國冒險の徒陸續南米に航せしかば、葡人亦座視する能はず、ジョーン三世はマルチム・アフォンソ・デ・ソウサの議を容れ、將士官吏を派せず、公資を投せず、志士に甲比丹をゆるし、私財を以て土著拓植せしめ、敢て政法の干渉を爲さず、自治の發達に任する方策を執り、まづソウサ及び弟ベロ・ロベス・デ・ソウサを遣はす、千五百三十二年一月兄ソウサはリオ・ジャネイロの沿海を測りて、聖ギンセントと名け、弟ソウサは之を距ること遠からず、に聖アマロ殖民地を創め、次で東の方印度にて貨殖の功を奏せし、ヴスコ・フェルナンデス・コーチニョはシオジャネイロを開き、貴族にして航海に秀でたるベドロ・デ・カムボ・ソリンヨはカブラルが始めて發見したるポルト・セグロに堡壘を

築き、土人と和して永住し、ブイグレイド、ゼラルデス相次でイルエオスを、ペレイラ、コーチニヨはリオ聖フランシスコよりバイアに至る沿海の地を得、またドンツアルテ・コエルヲ・ペレイラはベルナムブコを得てオリンダ市を創め、ペドロ・デ・オエスはバライバの甲比丹と爲りしも功を遂げず、史家ジョン・デ・パロスはマランヤオの甲比丹を得て、フェルナン・アルブレステ・アンドラダ、アイレス・ダ・クニヤとともに拓植に従事したりき。

斯く葡萄牙の志士甲比丹と爲りて巴西の沿海に移植せしも、金銀球寶を得るなく、専ら農を業とせしかば資本を要し且兵賦の制立たずして防守の道完からず、西班牙人はアッサムブションよりパラゲーの水源を溯りて秘魯に通じ、オレラナは秘魯より出で、亞馬孫河を下り、佛蘭西亦地を沿海に得んとして已まず、よりに始めて總督設置の議生じ、千五百四十九年ドム・トマス・デ・ソーサ之に拜し、六船を率てバイア灣に到り、聖サルヴドル府を創めて都府と爲し、敢て諸殖民の自治習制を改更干渉せずた、力めて諸甲比丹を連結し外諸土人の侵寇に備へ内耶蘇會士を用ひて基督教を説き人文を開發し前後四年の任期良治を以て康平

を得たり、次でヅアルテ・ダ・ゴスタ至りてソーサの後を繼承し遺圖を紹述し、その伴ひ來りし耶蘇會士ルイス・ヂ・グランはピラチニングの野に聖保羅學校を創始し、千五百五十八年メム・ヂ・サの任を襲ふに及ひて成れり、然るに佛蘭西も亦殖民を巴西に圖りき、之よりさき佛蘭西は教亂の爲に分裂し、ユグノーの一領袖ニコラ・ヅランはアンリー二世王の裁可をうけ、千五百五十五年十一月三大船を率て南米に來り、フォルト・コリニを開き、ジエゾのカルギンに報ず、カルギン新教の地を海外に得しを悦び新に士を送りしに、新來の士ヅランと争隙を發し佛蘭西に歸りて太く之を刺りしかば、ヅラン國に歸りて刑せられ、葡人其間に乘じてフォルト・コリニを廢し悉く巴西の佛人を攘ひたり、此時巴西の運大に進みしに千五百七十八年西班牙王フエリス二世は葡萄牙を併吞せしにぞ、巴西も亦西班牙領と爲り、英吉利人連りに沿海を侵掠し千六百十二年佛蘭西復マラヨ島を取りしが、荷蘭海上權の發展して東西洋の貨權を動かすに及び、巴西亦震揚を免れざりき、十七世紀の始、荷蘭は連りに天下の貨權を掌握するに力め、葡萄牙が西班牙に屈せられて本國の勢振はざるに乗じて、其殖民貿易の利を奪ひ、之を東の方亞細

荷蘭の西印度
商會

亞に屈するとともに、また西の方巴西に迫まれり、則千六百二十四年荷蘭は亞非利加亞米利加間の商利を毀断せん爲に、西印度商會を起し、水師提督キリケンスは一艦隊を率ゐて西征し、巴西總督ドム・ヂオゴ・ヂ・メンドンサを奔らし、聖サルバドルを陥れ、劫掠を擅にし、成兵を駐めて東にかへる。巴西の葡人蜂起して、克復を圖り、千六百二十六年ドム・マノエル・ヂ・メチゼス大兵をもつて至り、救ひ蘭人を攘ひ得たり。而も是より西印度商會はしばし、巴西の沿海を侵し、千六百三十年オランダを屈し、次で千六百三十七年總督ナッサウ伯モリツ南米に至りて、ベルナム、ゴタマラカ、バライバ、リオグランデ、四甲比丹領に臨み、悉く葡人を攘ひて、一大帝國を建設せんとし、侵略に代ふに賦課を以てし、聖サルバドルを攻めて陥る、能はざりしも、堅壘モリツブルグを置きて、都城と爲し、威令巴西を掩はんとせり。偶ま千六百四十年歐西に變運動き、葡萄牙は六十年來の屈辱を雪ぎて、西班牙より獨立し、ブラガンザ王家起り、しかば巴西葡人の氣大に昂り、此時に乗じ、聖保羅の衆はアマドル・プエノを立て、王と爲して自立せんとし、プエノ可かずして、事巴みたり。然るに千六百四十四年モリツ伯本國にかへり、後の荷蘭總督政を失し

ナッサウ伯モリツ

西巴商會

て、葡人土人の心離れしに乘じ、マデイラ人、ジャオン、フェルナンデス、ギエイラ起ちて、巴西商會を創めて、荷蘭と頡頏し、千六百五十四年オランダを取り、巴西を克復し、千六百六十一年終に蘭人をして、巴西拋棄の約を結ばしめたり。此間ブラガンザ王室は微弱にして、海外の殖民に力を借す能はざりしも、殖民土著の根底既に固くして、荷蘭の勢を以てするも、抜く能はず。茲に及びて千六百九十九年大に黄金を發見して、ペドロ王を喜ばしめ、巴西の富強是より駭々として進み、西半球一大共和國の今日あるの素を爲せり。蓋し是其西班牙殖民と異にして、農耕牧畜の實力を以て起り、東方の移民と異にして、家族土著の永制に出で、侵略を事とせずして、専ら拓植を力めしによらずんばあらず。

北米に於ける英佛移植の始

此時代に於ける亞米利加の經略は、西葡兩國海外發見の效果に外ならず。故にその偉業最も見る可きは、墨土哥、秘魯、及び巴西に在りて、北米開殖の如きは十七世紀に至りて始めて見る可きも、なほ南方の盛に及ばず。セバスタアン・カボがブラドルに達せしは、コロンブスの前に在り、次でガスパル・コルテレアは、聖ローレンス灣を發見し、千五百三十五年に至り、佛人カルチエ、聖ローレンス河を溯り

て後のモントリエル地方に達し、千五百四十一年西人デントはミシシッピー河に至り、千五百七十七年英人フロビシャのフロビシャー峽を發見し、翌年フランス・ドレキはカリフォルニアのニュー・アルビオンを、千五百八十七年にはジョン・ダギスのダギス灣を命名せる等、十六世紀北方亞米利加に於ける歐人の蹟甚だ稀なり。然るに千六百四年佛人ド・モン後のノブスコシアに始めて殖民地を拓き、名けてアカデエといひしより、北方殖拓の事稍や見る可く、千六百六年には倫敦ブリマウス兩商會は英王ジェームス一世の許可を得て北米殖拓に著手し、翌年五月ブルジニアのジェームスタウンを創め、英人米洲に雄飛するの淵源を開き、六七十年來加那陀地方に來往せし佛人は漸く業を始め、翌千六百八年シャムブレイン・ケベック市を建置して北米佛人の根據を定めたり。新大陸に於ける英佛頡頏の因此に在り、而して此時荷蘭東印度商會の英人ヘンリー・ハドソンは亞米利加の北海に航してハドソン灣を發見し、千六百十三年蘭人マンハタン島を取りて土人と交貿を始めたり。是則後の紐育の地なり。然るに此間に英吉利より難を海外に避けし清教徒巡拜父老の一行は阜月花號インフラワットに搭じて千六百二十年の冬北米に航して新

英蘭を起し漸く地を四方に拓きたり。荷蘭人は其コンネチカトに入るを拒みしも功なく、瑞典人亦デラワール灣に至りて新瑞典と稱して蘭人と抗争し、東北亞米利加は紛々として諸歐殖民の争地と爲る。千六百四十三年新英蘭殖民合同盟成り幾ならずして百二十邑落あり、千六百八十二年にはキリアム・ペンのペンシルヴァニアに殖民を創むるあり。佛蘭西も之よりさき北米の諸大湖を巡檢して、ミシシッピー河に沿ふて下り河口の地を取りてルイジアナと名けしも終に英吉利殖民の地多くして根底確固なるに及ばず、引きて十八世紀の争撞に及べり。

以上は十六世紀に於ける歐人が南北亞米利加大洲拓植侵略史の大要なり。英佛蘭の諸國力を此に用ひざるにあらずと雖も、業圖なほ遙に西葡の後に在り、而して西葡は獨り西の方此新地に向ひしのみならず、また東の方亞細亞の舊國に通交經路の業を立て、現時に至るまで滔々として已まざる西力東漸の先驅を爲せり。請ふ東方史局の變を敘して此東漸の蹟を説かむ。

第二 明代の東南亞細亞

第六章 明の中盛

高麗の末世、李氏朝鮮の建國、明の成祖の南征、三保大監、成祖の北方經略、成祖の祖孫、高麗の變、宣宗の南征、三楊、王振と麓川變、成祖以後北邊の形勢、土木の變、額森北京を圍む、明初の宦官、曹石の徒、衛拉特、韃靼の盛衰、哈密の情勢、鴉片の亂、汪直、李宗の小康、李宗の外交、劉瑾等の素政、地方の諸賊、江彬と宸濠、大禮の議、土魯番の莽蘇爾、明の經學、明の文章、八股文、明詩、劇曲小説、

東西の史實を綱絃して西方は十七世紀の半エストフーレンの和議に至りしが、時は東亞細亞の歴史にては明末、南亞細亞に在りて、莫臥兒帝國の中葉に屬す。故に今また二百數十星霜の前に溯り、永樂以降の明史及び當時の極東の形勢、特穆爾以後の印度、中西亞細亞等の史變を一括して、前編の後を續かざる可からず。亞米利加の情勢を描きし筆を載せて太平洋海を超え、まづ東亞細亞より始めむ。十五世紀の劈頭、永樂靖難の一亂は特穆爾土耳其を擊破して大陸西半の覇權

高麗の末世

を奪ふと時期略相當れり、李氏朝鮮の建國は其前十二年に在り、我日本の倭寇が大陸を剽略するは更に其前數十年に在りて、北は高麗、南は元の沿海其害を蒙り、以て明代に及び、北虜南倭の語あるに至れり。されば高麗は千三百五十二年頃より後入道其禍を蒙らざるなく、内は恭愍王の後、僧遍照の子辛禰遺命によりて王位を繼ぎ、狂暴にして畋獵宴樂に耽溺し、李仁任の黨威福を擅にし、北の方元に通ず。明の太祖立ちて辛禰は王統にあらざるを以て封冊を與へず、且鐵嶺以北の元領を返還せず。辛禰大に怒り、千三百八十八年、明の洪武二十二年、蒙古と兵を合せて遼東を侵さんとする。時に成鏡道、永興の人李成桂は倭寇を擊攘して威望國中に高かりしが、辛禰の北征を諫めて聽れられず。諸將と謀りて辛禰を廢し、王族瑤を迎立して恭讓王と爲せしも、瑤は柔儒にして民望なく、成桂の威權日に盛なるを忌みて之を圖る。謀泄れしかば、千三百九十二年、明の洪武二十五年七月、成桂は瑤を廢して自ら王位に即き古號を復して國を朝鮮と號し、明は先に成桂が北侵を諫めし好意を徳として之に封冊を加へたり。よりて高麗は五代以來二十二王四百七十五年を経て此に滅亡し、極東半島に新王國興りて明の外藩となる。則現時の大

李氏朝鮮の建國

韓國是なり。明は既に朝鮮を東藩と爲し、更に海を超えて使を我日本に通じ、わが足利將軍と修交し、九州征西府と來往せしが、永樂の變に燕王棣南京を陥れて成祖と爲りて後まづ西南の經畧に著手せり。

元室の衰ふるや、安南王陳暉夙に好を明に通せしも、庸暗にして内治まらず、外占城の爲に邊境を侵略せられ、或は國都敵手に陥るに至れり。浙江胡氏の後黎季犛よく兵を用ひて之を擊逐し、其功によりて勢威を博し、政權を掌握してしばしば弒逆廢立を擅行し、千四百年其主陳爰を廢して自立し、國を大虞と改稱し、舊姓胡を復し、後二年にして位を子漢蒼に譲り、使を明に遣はして詐りて陳氏の血統絶ゆと言はしむ。成祖新に位に即きて漢蒼を以て安南國王に封す。然るに故の王族陳天平は國難を避け流落して明に入り、成祖に見ゆ。成祖乃使を遣はして季犛を詰責せしに季犛罪を謝して之を迎立せんと請ひ、其至るや之を芹站山諒山府鷄陵關南中に要殺す。成祖聞て大に怒り、千四百六年(永樂四)張輔を遣はして大虞を伐たしむ。輔は沐晟等と連りに敵を破り、翌年五月大に其軍を富良江に擊破し、北ぐるを逐ひ奇羅海口に至りて季犛漢蒼父子を擒にして京都に檻送し、新に交

明の成祖の南征

趾布政司を設けて安南を領治せしめてかへる。然れども國人陳氏の後立たず國俗また改まるを見て悦ばず。陳氏の將簡定まづ亂を作し、陳季擴を立て、帝と稱せしむ。千四百九年(永樂七)十一月張輔之を破りて簡定を獲、次で陳季擴を月常江(清化府の東)愛子江(順州の東北)等に破り、千四百十四年(永樂十二)春季擴の走るを追ふて老撾に入りて其三關を破り之を擒にしてかへる。かくて張輔交趾に至ること凡そ四回、郡邑を建置し驛傳を増設し、規畫整然、南方の畏るところと爲る。沐晟また之に副として功多し。成祖其功を論じて二人を公に封じ、平安南歌を賦して之を喜びたり。蓋し安南の支那帝國を離る、こと唐以來四百餘年の久しきに及びたればなり。而して千四百十三年(永樂十一)成祖は古の羅施鬼國の地を下して貴州布政使司を置き、後終に八府四州を有するに至れり。

成祖は又靖難の變に建文帝の終を知らざるにより、或は其海外に奔りたらんを疑ひ、千四百五年(永樂三)安南の人中宣鄭和に兵三萬七千、大船六十二艘を授け、金幣を給與して南海諸國を探らしむ。和よりて蘇州劉家港より發し、諸國を歴訪して明威を宣示し、服せざる者あれば兵を以て之を懾す。是より後、和は仁宗、宣宗

三保太監

の兩朝に歴仕し、七び命を奉じて南洋諸國に來往し、三佛齊の會陳祖義錫蘭王亞列奈兒の一家、蘇門答臘の王子蘇幹利等を擒にせしかば、諸邦威命を聽き、使を遣はして朝貢するもの、琉求、真臘、暹羅、滿刺加、渤泥、蘇門答臘、瓜哇、榜葛刺等三十餘國に上り、是より互市通商して來往ながく絶へず、故に當時三保太監西洋に下るの説あり、後の使命を海表に奉ずるもの盛に和を外人に誇稱したり。

成祖の北方經略

明威漸く南方に振ふとともに、また武を北方に用ひざるを得ず。蓋し成祖は北燕より起りしを以て北虜の關係多からざるを得ず。千三百八十八年元の特古斯特穆爾其下に弒せられて後は、蒙古部土崩瓦解してまた統卒なく、後五傳して珉特穆爾弒せられてのち郭勤齊^{クハ}篡立して國號を去り、自韃靼可汗と稱し、靖難の舉に當り兵を出だして之を助けしかば、成祖位に即きてのち使を遣はして銀幣を遣る、烏梁海部は滿洲吉林地方の通古斯族にして、其地元の時大寧路たりしが、元滅びて明は泰寧、朵顏、福徐の三衛を置き、成祖の兵を北平に起せしとき、烏梁海の部衆奇兵と爲りて數功ありしより此に及び大寧の地を得て根據と爲す。哈密はもと漢の伊吾廬の地、元末に威武王納古里の鎮所にして、其弟恩克特穆爾は成祖に

降りて忠順王と爲る。衛拉特はもと蒙古の部落にして元の臣孟克特穆爾之に據りて亦成祖篡立の後援を爲し、孟克特穆爾の歿後は其衆三分して瑪哈木特、太平、巴圖孛羅に分屬せしかば、成祖各封じて順寧、賢義、安樂の三王と爲したり。然るに韃靼の知院に元室の疎族阿魯臺をいふ者ありて、可汗郭勤齊を殺し、元の裔布尼雅錫哩の亂を避けて巴什伯里に在るを迎へ立て、可汗と爲し、成祖の招諭に應せず。終には明の使者を殺ししかば、千四百九年(永樂七)成祖邱福を將として之を伐たしむ。福北征して臚胸河畔に敗死し、全軍盡く没す。成祖憤慨し、翌れば千四百十年(永樂八)大軍五十萬を發して親征し、臚胸河を渡り、其名を飲馬河と改む。布尼雅錫哩大に懼れて西に奔り、阿魯臺は東に遁る。成祖布尼雅錫哩を追ふて鄂諾河畔に及びて大に之を擊破し、軍を轉じて阿魯臺を撃ちてまた之に勝つ。然るに衛拉特の瑪哈木特は強盛を恃みてまた明威を重んぜず、西奔し來りし布尼雅錫哩を弒し、其子塔爾巴を立て、可汗と爲して、自ら權勢を擅にせんとす。阿魯臺はもとより衛拉特と對立仇視せしかば、之を見て韃靼の余衆を將て明に降り、兵を發して瑪哈木特を討つ。先鋒たらん事を請ひ、瑪哈木特は阿魯臺を襲ふと揚言し

成祖の殂落

兵を飲馬河に出だして大舉南侵せんとす。帝乃北京に如き阿魯臺を和寧王に封じ、千四百十四年(永樂十二)皇太孫瞻基を從へて親征し、六月大に衛拉特を和拉和錫衰に破り、北ぐるを追ふて圖拉河に至りしかば、馬哈木特困窮して出で降り、北方の二強虜並に明に入貢するに至れり。然れどもともに一時の權宜に出でたるなれば、數年を経て生聚蕃富なるに及び、阿魯臺また畔きて興和に入寇す。よりに成祖は千四百二十二年(永樂二十)また親征し、秋七月興和の北沙狐原に至りしに、阿魯臺懼れて輻重を庫倫海側に委棄して遁れ去る。成祖乃轉じて烏梁海を伐ち、大に其衆を啓拉爾河に破り、河西を徇へてかへり、翌年冬また北征して上莊堡宜北府萬全縣の北に至り、蒙古の王子額森托子の來降をうけ、其請によりて阿魯臺をうち、千四百二十四年(永樂二十二)六月達蘭納穆爾河に至りしも、成祖既に兵を厭ひしかば糧食の盡きしを以て引きかへり、七月榆木川(開平城の西北)に至りて病んで殂落せり。

成祖は靖難の役を興して明初に一内亂を爲せしも、内政は大體太祖の遺圖を守成して變革せざれば、政治に就きては殆ど特記す可きなし。蒲臺(山東武定府)の

高煦の變

妖婦唐賽兒の亂ありし翌千四百二十一年(永樂十九)春國都を北京に遷せしと、帝位繼承の軋轢ありしのみ。成祖の次子高煦は勇敢無賴の名ありて靖難の役に功あり、父帝の喜ぶところと爲り、太子たらんとせしも得ず、雲南に封せられしを憤りて任に就かず、樂安に移されて益平ならず。是に於て兄太子高熾立ちて仁宗昭帝と爲り、在位僅に一年にして殂し、千四百二十五年六月其太子瞻基位をつぎて宣宗と爲る。高煦之を見て怨望に耐えず、日夜軍器を造り壯兵を募り、五年四哨を立て、張輔に内應を勸む、輔應せずして使を捕へて宣宗にいたる。千四百二十六年(宣德元)宣宗親征して樂安に至りて高煦を降し、廢して庶人と爲し、後遂に之を殺したり。晋王濟潢は仁宗の從弟にして嚮に其父兄を構陷せしが、此に及びまた高煦に通じて廢せらる。宣宗既に内皇室の亂を平げてまた外安南の事あり、祖帝成祖の世張輔數ば安南を征して功を立て、黃福頗る人心を得しが、亂因遂に除かれず、輔、福等去りてのち俄樂の黎利衆を煽搖して反し、千四百二十六年(明の宣德元)冬明の王通の軍を應平(交州府)に破る。宣宗聞きて大に駭き、柳升、沐晟に命じて南征せしむ。王通は擅に黎利と和し、其使を介して入京上表せしめ、千四百二十七年

宣宗の南征

柳升の倒馬坡(鷄陵關)の南に戰歿するに及び利の重賂をうけ陳氏の後を立てんと詭り奏せしむ。沐晟の軍は和成ると聞きて中途よりかへる。宣宗は利の詐を知りしも、安南の叛服常なく征費多きを厭ひ奏言によりて悉く安南の官吏軍民八萬餘人を召還して安南を捨て後利が陳氏の後絶えたりと稱して命を請ふに及び、千四百三十一年(宣德六)權に利をして安南國事を辨署せしむ。利乃元を改め帝と稱し、交州、清華兩府を立て、東西二都と爲し、國中を十三道に分ち、制度多く明朝に模擬し、陽に明の命を奉ずと雖も、獨立の實を有し、次で利の子元龍麟に及び、千四百三十六年(明の正統元)明より安南國王の封冊を受け、爾後三百數十年に互る安南の國祚此に始まれり。

千四百三十五年(宣德十)春、明の宣宗殂落し、太子祁鎮位に即く。英宗帝是にして、年尙幼きを以て、楊士奇、楊榮、楊溥の三人、張太后の命を受け心を同うして政を輔翼し、士奇は學行ありて國體に通達し、榮は善謀にして能く斷じ、溥は質直廉靜なりしかば、時人之を三楊と曰ひ、また居弟を以て士奇を西楊、榮を東楊、溥を南楊と曰へり。然るに蔚州の王振といふもの、狡黠多智にして、仁宗の時より用ひられ、此

三楊、王振と麓川の變と

に於て英宗の寵任を受けて司禮監と爲り、英宗に勸めて、麓川(雲南永昌府騰越州の附近)の蠻部を討たしむ。始め太祖の時大理、金齒の諸蠻部を下し、明の西南境は麓川部と接壤せしかば、太祖は平緬の會思倫發をして麓川の地を兼統せしめ、次で其地を三府四官司に分ちて雲南、金齒に分隸せしむ。思倫發死して子思任發其職を襲ぎ、桀黠兵を喜び四方を侵略し、英宗の撫諭を聽かず。千四百三十九年(正統四)明將方政之を討ちて龍川江に戰歿し、沐晟の弟沐昂代り征して功なく、思任發また降を請ふ。帝意廷議みな之を許さんとす。獨り王振は事を用ひ、威を外に示さんと欲し、千四百四十一年(正統六)英宗に勸め、蔣貴、王驥を將とし、東南諸道の兵十五萬人を發して麓川を伐たしむ。侍講劉球諫むれども、英宗聽かず。王驥等麓川に克ち、思任發は走りて緬甸に入り、其子思機發は降を乞ふ。時に楊榮既に卒し、楊士奇事を以て朝に出でず。楊溥年老ひ、勢孤弱に、三楊振はず。張太后亦殂落せしかば、王振獨り政權を擅にして、毫も忌憚するところなく、朝議、思機發の請を許さんとせしも、振は不可とし、侍講劉球が上言して之を論せしを怒りて球を殺し、千四百四十三年(正統八)また麓川を伐つ。翌年楊士奇卒し、更に二年にして楊溥卒せしか

ば、王振遂に悉く中外の大權を掌握し、勳戚を視ること奴僕の如く、諸勳戚また振を尊びて翁父と曰ひ、上下之に抗禮する者唯張輔一人あるのみ。振よりて千四百四十八年(正統十三)又王驥をして麓川を伐たしめしも、終に思機發を得る能はず。時人皆驥等が一隅を以て天下を騷動するを誹れども、王振を恐れて發せず。後五年を経て緬甸人思機發を執へて京師に送りしも、其前に土木の戰役ありて王振は之を見るに及ばざりき。

成祖以後北邊の形勢

蒙古一帯の地は、成祖の時明に歸服せしも、韃靼、衛拉特は互に對峙して隙を窺ひしが、馬哈木特の子托歡の世に及び、千四百三十四年(宣德九)秋韃靼を攻めて部長阿嚕臺を穆納山に殺せしかば、阿嚕臺の子謬博爾濟延は明に歸し、部衆遠く東の方輿安嶺下に移りて科爾沁部と爲る。托歡乃自立して可汗と爲らんとせしも、衆可かざるを以て元室の後托克托布哈を立て、可汗と爲すも、實は其命を奉せず。托歡の子額森勇略ありて善く兵を用ひ、西の方哈密、河西を略し、東の方烏梁海を降す。蓋し此時明の王振連りに威武を外に輝かさんと欲し、千四百四十四年(正統九)英宗に説きて朱勇を將として烏梁海の三衛を擊たしめしかば、烏梁海明を

土木の變

怨む。王振また衛拉特の入貢を喜び、賞資金帛算なかりしかば、其數を減するや額森憤怒し、千四百四十九年(正統十四)秋七月諸部を誘ひ大舉道を分ちて明に入寇し、托克托布哈は烏梁海と遼東を侵し、阿拉知院は宣府に寇し、警報相つぐ。王振英宗に親征を勸む。英宗よりて于謙、王直等の諫を聽かず。弟郕王祁鈺をして留守せしめ、官軍私屬五十餘萬人を率ゐて北征し、居庸關を出で、宣府に至る。群臣留まらんことを請ひしも、王振肯んせず。英宗は大同に至り始めて郭敬の言によりて師を班へしたるに、額森の爲に軍後を襲はれて後軍潰散し、次日土木宣化府懷來縣に次す。額森の軍四面より之を圍み撃つ。王振、張輔等皆之に死し、英宗は額森に擁せられて北行す。之を土木の變と爲す。失計一に王振に出づ。敗報北京に聞ゆるや、胡太后使を額森に遣はして、英宗を贖はむとせしも、報を得ざるにより、郕王祁鈺に命じて國政を暨せしめ、于謙を兵部尙書と爲し、王振の家を籍し、其族を夷げ、九月祁鈺をして帝位に即かしめ、遂に英宗を尊びて上皇と爲す。祁鈺は則景帝なり。翌月額森は英宗上皇を奉じて紫荆關より入り、長驅して東し、北京を圍み、上皇をして城中を諭さしむ。于謙諸將を督して善く防ぎ相持する五日、額森は邀請應

額森北京を圍む

せず、戦利あらず、四方勤王の師至らんとすとき、て上皇を擁し紫荊關より出でて衛拉特にかへる。後衛拉特はしきりに明の邊境を侵略す。蓋し土木の變に北に降りし官者喜寧その間諜たればなり。然るに千四百五十年、明の景泰元喜寧誅死して南侵の利を失ひ、托克托哈汗の空名を擁するも實力は額森に及ばず。阿拉知院の兵また少く、三人外親しきも内鼎立の形あり。その衆を合せて南下するや利は多く額森に歸し、害は均しく受くるを以て、托克托布哈阿拉知院ともに貳心を抱けり。額森使を明に遣はして和を議す。景帝帝位の紛紜を恐れて之を憚ばかりしも于謙は天位已に定まれり上皇を迎ふるは唯だ以て邊患を弭めむためなりと曰ひ、上皇また使を遣はして登極を願はずと曰ひ、八月英宗上皇北京に歸り、景帝之を迎へて南宮に居らしめて明の屈辱初めて復せり。

明初の宦官

漢唐以來歷朝の内憂は稍もすれば宦官の弄權に起れり。明の太祖は古來の成敗に鑑み、内官の秩は四品に過ぎず、政事に參與する勿らしむ。然るに成祖位を篡ふに及び、諸將多くは太祖の舊人にして已に服せざるを疑慮し、宦者の内應を徳として之を親任せしに、宦官中また鄭和、侯顯等の異材ありて漸く勢力を伸張し、

曹石の徒

正統年間王振事を用ひてより上下中外處として宦官の在らざる莫し。英宗上皇歸京の後、景帝と兄弟相和せず。帝は上皇の長子なる皇太子見深を廢し己の子見濟を立て、見濟卒して後は太子を立てず。千四百五十七年、景泰八、英宗の天順元帝病むに至り、石亨、張軌は官者曾吉祥と謀り門を奪ふて宮に入り、英宗を擁して復祚せしめ、于謙等を殺し、景帝を廢して郕王と爲して西内に移す。郕王次で薨じて、帝位の争やみしも擁立の功によりて石亨は忠國公に、長軌は太平侯に封せられ、曹吉祥は太監と爲り、其子欽は昭武伯と爲り、權柄を攬り威福を擅にし、英宗は王振の爲に祠を立て、内政漸く紊れ、宦官弄權の弊をなすに至れり。世人稱して曹石といふ。然るに北方は英宗南歸の後久しからずして衛拉特、韃靼の盛衰地を代え、千四百五十七年、韃靼部長保喇は明の延綏、寧夏に侵入す。英宗は石亨をして之を拒がしめし、功なく、朝臣于謙を想ふを切なりしが、千四百五十九年、天順三、亨の従子石彪は保喇を安邊營、榆林府定邊縣に擊破し、軍功によりて侯と爲り、勢盛に志驕り、石亨と内外相表裏して兵柄を握らんと謀り、事顯はれて獄に下る。亨よりて英宗を怨みて反を謀り、亦顯はれ、千四百六十年、天順四、亨、彪以下皆誅せらる。石

氏の一類亡びしかば、太監曹吉祥は自安んずる能はずして、千四百六十一年(天順五)養子曹欽と反し、欽は孫鐘に撃破せられて死し、吉祥は磔死せり。是に於て曹石の禍已に除かれしも、さきに王振あり、後に曹吉祥あり、ともに太監と爲りて英宗の政を紊り、千四百六十四年(天順八)の初英宗殂し、太子見深立ちて憲宗と爲るや、また大監汪直の肆恣あり、後武宗の劉瑾を用うると前後相連りて、明朝奄侍の禍を刹し、朝政の腐敗を馴致したりき。

衛拉特、韃靼の盛衰

明朝内政の壊敗漸く萌すに當り、外邊塞の警を顧れば、衛拉特は托克托布哈、額森の姉を娶りて子を生子も之を立てざりしより額森憤り、且其明を通じて已を害せんとするを疑ひ、終に攻めて托克托布哈を弑して、明に入貢す。子謙機に乗じて衛拉特を討たんと請ひ、景帝從はざりしも、額森の使に報答せず。此間に額森は諸部を迫脅し、東は烏梁海に至り、西は赤斤、哈密を威服し、千四百五十三年(景泰四)八月自立して大元特克紳汗と稱し、之より後強を持して日に益す。驕恣、阿拉が太師たらんと請ひしを拒み、且其二子を殺す。阿拉憤怨し、千四百五十四年(景泰五)冬十月、額森を弑し、代りて其衆を領す。未だ幾ならずして、韃靼の部長保喇は阿拉

を撃殺し、額森の家族玉璽を奪ひ、瑪拉噶と謀り、故托克托布哈の子穆爾格爾を求め立て、小王子と號せしむ。額森の子弟奔りて哈密に據り、衛拉特部は是より遠に衰微し、部衆四散せるに反して、韃靼部の勢復熾に、英宗の天順年間、保喇、瑪拉噶等部衆を擧げてしばしば、明の邊陲を擾亂し、或は書を明帝に致して和を乞ひて入貢するも、寇掠は已めず。既にして穆爾格爾歿せしかば、蒙古勒克呼青吉斯亦小王子と號し、保喇、瑪拉噶等と先後相繼ぎて延綏を抄掠す。然れども、韃靼の諸部は統一せずして、内互に相争ひ、保喇は蒙古勒克呼青吉斯を殺し、瑪拉噶は保喇を殺し、使を遣はして明に入貢すといへども、また寇掠を已めず。朱永、許寧、王越、楊信等の諸將つねに其衝に當りて防戰擊退に力めたりしが、その叛服和戰つねなきを以て、頗る奔命に苦しむたり。

哈密の情勢

哈密は恩克特穆爾の後、世々忠順王に封せられて、明の西藩たりしが、衛拉特の勢力強大なるに及び、其侵畧を蒙りて、國勢振はず。忠順王布拉噶薨じて子なきに及び、韃靼の伽嘉色凌其地を侵掠して之に據らんとせしかば、千四百六十六年(成化二)哈密の都督巴圖穆爾は明帝に請ひて、國事を攝行せり。伽嘉色凌乃ち轉じて、頗

羅鼎、阿勒楚爾に従ひて明の邊境に入りて、河套に據り、次で阿勒楚爾を殺し女を以て元の裔們都埒に妻はし立て、汗と爲し、自ら其太師と爲る。時に千四百七十二(成化八)年なり、然るに哈密の都督巴圖魯爾卒し子哈商都督と爲るや、西隣に土魯番ありて頗る強盛にして、櫻里丹阿里は千四百七十三年(成化九)哈密を襲ひ、妹婿伊蘭をして之を鎮守せしめ、明の西域の咽喉を奪ふ。明の憲宗は兵を發し、哈商を助て吐魯番をうちしも功なくして歸り、哈商を苦峪(西安府淵泉縣の東南)に居らしむ。實に千四百七十七年(成化十三)なり、而して鞑靼の瑪拉噶、頗羅鼎は稍や衰へ河套の伽嘉色凌は其下伊斯瑪音等に殺され、們都埒汗亦歿し、塞外の諸強會相繼ぎて略ぼ盡きしかば、明の邊境は一時安く、邊人爲に稍や肩を息むるを得たり。

英宗復祚以來、明は外、鞑靼、吐魯番の侵寇を拒ぐと共に、内また、猺、獠、諸苗蠻の討に従事したり。就中大藤峽、潯州府桂平縣の西北は潯、柳二府の間に跨り、四方に山を繞らし、綿亘百里、猺、獠の巢窟たりしが、千四百五十七年(天順元)年以後、亂を爲し、兩廣の苗、獠蜂起して、廣西を殘燬し、大患を爲せり。よりて顏彪、趙輔、韓雍等相繼ぎて之を征討し、殊に千四百六十五年(成化元)年には、韓雍は直ちに大藤峽を搗き、名

猺、獠の亂

汪直

を斷、藤峽と改め、石を勒し、功を紀して歸りしかば、諸蠻の勢衰へ、千四百七十五(成化十二)年朱英、兩廣に任に就きては、専ら撫綏に力め、四萬餘戸十五萬口の歸順を得たり。然れども外、猺、獠れて内、獠起てり。成祖の宦官を用るや、東廠を設けて、官者をして逆謀、大奸を訪緝せしめしが、千四百七十七(成化十三)年、憲宗は更に西廠を設け、大藤峽の猺、種たる、太監汪直に命じ、之を督して外事を調刺せしむ。汪直よりて數ば大獄を興して、剔抉羅織し、無辜にして冤死する者相つぎ、下爲に安んぜず。兵部尙書項忠は直を彈劾せんとして斥けられ、大學士商輅は疾を引きてかへり、大臣免せらる、者前後數十人、士大夫皆首を垂れて直に事ふ。直既に勢を得しかば、邊功を立て、自ら強うせんと欲し、千四百八十一年(成化十七)自ら將となりて、鞑靼の入寇をうちて、宣府に出づ。帝始めて直の惡を知り、翌年西廠を罷めて直を貶したれば、中外之を見て欣然として喜びしも、衰政また回す可くもあらず。汪直除かれしも、南昌の方士李孜省代り用ひられて、淫邪方術によりて寵幸を得、江夏の妖僧繼曉は秘法を以て進められて、國師となり、ともに太監梁芳、韋興等と内外表裏より政事を亂り、官廠、祠廟を興し、佛寺を造り、累朝七宮の財帑を、奢侈奇巧に

孝宗の小康

糜費し、民財を苛斂す。萬貴妃また之と結び服用僭擬を極め、父兄弟姪を縁灸して宮中を横行せり。故に憲宗の世二十三年を経て明室の政治益下れり。其晩年の一掉は一時哈密を復せしにすぎず。千四百八十七、成化二十三年春、萬貴妃卒し、憲宗震悼幾ならずして其秋病んで殞落したり。太子祐楹位に即く。孝宗皇帝則是なり。

孝宗既に帝位を得て、直ちに前朝妖佞の臣太監梁芳、萬安喜、李孜省等を誅除し、妖僧繼曉を棄市して禍源を除き、庶政を更新し、大に言路を開きて直言遺書を四方に求め、國中に預備倉を設け、前朝末年の制法たる納粟の例を停廢し、鹽法を更め、或は應天蘇松の田租を免じ、或は黃河の決水を治め、或は蘇湖の水利を經理し、又禁兵を簡閱して、東西衛軍を置き、刑部尙書白昂に命じて律例を冊定せしめ、十八年間の施設見る可き者少からず。千四百九十一、弘治四年、戸部の調査によれば、國中の戸九百一十一萬三千五百人口五千三百二十八萬千二百あり。明朝十六帝中、孝宗獨り能く恭儉にして政を勤め、民を愛して兢々として泰盈を保持せりと稱せらる。后弟張鶴齡の如き外戚を以て稍や權寵を恣にせりと雖も、以て孝宗が小康を嫉げざるなり。若し夫れ外交に至りては、歷世多事の後を傳承して邊陲の警

孝宗の外交

なきを得ず。之よりさき、千四百八十二年、成化十八、苦峪の哈商は襲ふて哈密城を拔き、吐魯番の伊蘭を奔らし、勝勢に乗じて連りに八城を復し、故土に入るを得しかば、憲宗は大に喜び、哈商を以て左都督と爲せり。然るに孝宗の世に入りて吐魯番の阿里の子阿哈瑪特は、櫻里丹と爲り、哈商を欺きて誘殺したりしも、遂に千四百九十一、弘治四年、哈密城を明に獻せり。孝宗之をうけ、故の哈密の忠順王の後裔善巴を求めて、其地に王たらしめ、哈商の弟恩克保喇を都督とせしに、二年を出でずして善巴は吐魯番の阿哈瑪特櫻里丹と争ひて城陥り、身害せられ、明の沙州もまた吐魯番の侵畧を蒙る。孝宗の兵を發して、哈密を拔き、守將伊蘭を奔らしめ、千四百九十七、弘治十年、再び善巴を忠順王と爲したり。此間に韃靼は諸強相繼ぎて凋落せしも、特古斯特穆爾の後苗たる達延雄畧ありて、諸部を統一し、大元可汗と號し、巴延蒙古王、伊畢刺伊木王等としばし、明の邊を侵し、遂に和碩とともに賀蘭山後に居りて邊患を爲す。その千五百一、弘治十四年の入寇の如きは、大兵十萬道を分ちて、固原、寧夏の境に入り、戕殺慘酷、齒骸野に遍ねく、關中ために震駭するに至れり。されば外交の難少からずといふも、尙哈密を失ふに至らず。孝宗を以て

併文

劉瑾等の暴政

明朝中世の良主と爲すは蓋し過褒にあらずといふ可し。然れども孝宗が更新泰盈は衰頹の大潮勢を回へす能はず、千五百五弘治十八年、孝宗殂落して太子厚照立つや、内難大に起れり、厚照は則武宗帝なり、其東宮に在るの時侍豎の寵を得し者劉瑾等八人ありて、日に帝を導きて遊戯したれば、位に即きて後も尙事を用ひて已まず、大學士劉健、謝遷、李東陽、戸部尙書韓文等諸九卿と共に八人の罪を論じて之を退けんとを請ひしも、武宗は瑾の言に惑ひかへりて之を司禮監と爲し、其黨馬永成、谷大用に東西廠を掌らしめ、健遷等を退け次で韓文の職を削りたり、よりて中外の大權悉く瑾に歸し、瑾は詔を驕めて朝臣五十三人を目して奸黨と爲し、朝堂に榜示し、又朝官三百餘人を執へて獄に下し、東西二廠の外に復内廠を立て、自ら之を領し、苟も己の意に合はざる者は悉く誣ふるに舊事を以てし、罰米を輸せしめ、朝政を濁亂し、縉紳を荼毒す、蓋し瑾の暴横は焦芳實に之を導けるなり、是に於て人心恟々として安んぜず、加ふるに運炭餓饉ありて、流賊四方より並び起り、天王將軍清邱仁等は湖湘の間に出没し、江西また諸賊各山寨に據り、福建、廣東の境に蔓延し、順天王藍廷瑞等は衆數萬を擁して

地方の諸賊

四川により官軍を恐れず、千五百十(正徳五年)太祖の玄孫安化王貢錡は劉瑾を除くを名として反す、武宗乃ち楊一清をして軍務を總制し、張永を監軍として之を討たしむ、玉泉營(鞏夏府の西南)の遊撃將軍仇鉞は變起るや直に貢錡に應じて城に入りて陰に壯士と結び、急に起ちて貢錡を縛して京師に送る、八月征師京に歸り、張永は帝に見えて瑾が安化の變を激成して心自ら安んぜず不軌を謀る事を奏して劉瑾を誅除し、其黨與を除くを得たり、然れ共地方の流賊は尙已まず、蕪州の降盜劉六、劉七兄弟は驍悍にして山東を轉掠し、其徒楊虎、趙鏗等は河南を擾亂し、縱横數千里、州縣を殘破する事百を以て數ふ、官軍は多く執袴の子弟にして畏怯して戰ふ能はず、河南の賊の如きは十三萬二十八營の多きに上る、千五百十二(正徳七年)に至り彭澤、仇鉞漸く河南の賊を平げ、秋八月陸完は山東の賊を狼山に追撃し、劉六、劉七等を誅し、彭澤は次で四川を平げ、王守仁は南贛汀漳を巡撫し、千五百十八(正徳十三年)に至り江西の賊を平げたり、守仁は則陽明先生なり、抑も明室は孝宗より武宗に及びて、名節の臣少きにあらず、劉大夏は忠勤懇篤一び孝宗の知遇を受けてより身を忘れて國に殉し、李東陽は朝に立つこと五十

江彬と宸濠

年に互りて清節渝ららず。王鏊は博學にして識鑒ありて當世の宗師に推され、馬文昇は文武の才ありて名外國に聞え、皆顯職に居り、歿後三公に贈尊せられたりしが、惜むらくは朝政中官に移りてより其陷擠することろと爲りて終をよくせず。想ふに、皆氣節の守る可きを知るも、大勢を動かす時局を斷するの器器無きに因れり。蓋し中官内に朝政を紊り、流賊外に治を亂る。滔々たる衰勢大器に非ざれば防ぎ難し。劉瑾除かれて後僅に二年、驍勇にして狡獪なる大同の遊擊江彬は山東の賊を討ちて還りて帝に見え、武宗の寵幸を受け、四鎮の邊兵を調して京に入れ、之を兼統して自ら固め、諸倖臣を遠ざけて權威を竊穰せんと欲し、帝に遠遊を勸む。武宗其言を聽きて千五百十七(正徳十二年)微服して京師を出で、居庸關を出でて宣府に幸し、是より後諸臣の諫を用ひずしきりに邊塞に遊幸し、從者多く險阻に斃る、も意と爲さず。太祖六世の孫寧王宸濠は久しく異志を蓄へ、帝の儲嗣なくして遊幸時なく人心危懼せるを見て反を謀り、千五百十九(正徳十四年)夏六月意を決して兵を起し、州縣を陥れ、左右丞相以下の諸官を置き、九江、南康を下し、長江の流に順ひて東の方南京を衝かんと欲し、まづ安慶を圍む。王守仁時に福建

に在りしが、變を聞きて直に兵を起し、攻めて南昌を降す。宸濠驚き、安慶の圍を解きてかへり援ひ、守仁と樵舍鎮(南昌府新建縣の西北)に戦ひて敗績して擒虜となり、前後僅に三十五日にして事平く。武宗は變報に接するや、親征に託して南遊し、途上捷報を得しも駕を回へさずして南京に入り、翌年北京にかへり、宸濠を誅したり。然れども討賊の將たる王守仁は賞せられず。江彬の徒は益す驕横にして、諸政を專にし、明政また振はず。千五百二十二(正徳十六年)春武宗歿落して嗣子なし。皇太后は武宗の從弟厚熹を迎へ立つ。厚熹乃楊廷和、張永等を召し、江彬等を執へて獄に下し、次で之を市上に磔殺して、位に即き、一切前世の弊政を除きてまた明政を振作せんとせり。嘉靖帝として知られし世宗皇帝是なり。

明の世宗名は厚熹は憲宗の第四子、興獻王祐杭の世子なれば、前帝武宗の從弟に相當せるを以て位に即くや大禮の議起れり。世宗位に即きて所生興獻王を追尊せんと欲せしかば、楊廷和は漢宋の故事を檢按して尙書毛澄に授け、澄は之に據り大に文武百官を會して帝の伯父たる孝宗を皇考と曰ひ、父たる興獻王を皇叔父、その妃を皇叔母と稱す可しと議す。帝大に愠り、議三び上りて三び却けらる。

大禮の議

帝の母また大に悲りて京師に入らず。進士張璠よりて上疏して別に聖考廟を京師に立てんといひ、「大禮或問」を著はして帝位^をを迎へしかば、帝大に喜びて連りに禮官の議を駁せり。廷臣已むを得ずして、孝宗を皇考とし、興獻王を本生皇考、興獻帝、その妃を本生皇太后と稱す可しといひ、帝も亦勉めて之に従はんとす。然るに二年を経て後南京の刑部主事桂萼は、上疏して孝宗を皇伯考と曰ひ、興獻王を皇考と曰ふ可しと議し、張璠亦本生の稱を去らんことを曰ひしより、帝の意また勵きて廷議に附したれば、廷臣は闕に伏して哭争し、帝は怒りて數十人を杖誦するに至る。席書等更に議定して、終に孝宗を皇伯考、その后を皇伯母、興獻王を皇考、その妃を聖母、武宗を皇兄、その后を皇嫂と曰ふに決し、詔して天下に告げて尊稱此に定まれり。時に千五百二十四(嘉靖三年)なり。是より先、憲宗の生母を追尊せんとするや、百官闕に伏して禮を争ひて上意を翻へしたるを以て、大禮の議起るに及び、また此に出でしも、世宗は實に孝宗の殞後二年に生れたるを以て、事遂に彼の如くならざりき。事もと尊稱の一領事に屬すと雖も、争議は前後四年に亙り、爲に朝臣の進退する者多く、置々一時國中を紛擾せしを以て、後世明史の大事を以て

土魯番の莽蘇爾

目せられたり。

明は初より外交甚繁かりしが、武宗の末より世宗の初世に亙りてまた哈密のことあり。初め哈密の善巴卒し、その子巴雅濟封を襲ぎて忠順王と爲りしも、淫虐にして政を親らせず、その屬部の己を圖るを恐れ、千五百十三(正徳八年)其國土を棄て、奔りて土魯番の梭里丹莽蘇爾に投ず。莽蘇爾は阿哈瑪特の子なりしが、其印を奪ひ、和卓塔濟迪音を遣りて哈密に據守せしむ。明の武宗は彭澤を遣はして之を經理せしめしも、莽蘇爾の爲に欺かれて哈密を收むる能はず。三年を経て僅に之を復せしも、巴雅濟は依然として土魯番に留まれり。千五百二十四(嘉靖三年)に至り、土魯番の莽蘇爾は二萬騎を以て明の邊に寇し、肅州を圍む。世宗は尙書金獻民に命じ往きて之を禦がしめしに、獻民未だ至らざるに、陳九疇は寇を防ぎ、塔濟迪音を斬ると聞きて還る。然るに九疇等は莽蘇爾戰死すと爲して奏せしを以て、防禦の功ありてかへりて他の陥るところとなりて罪せられ、王瓊之に代り邊事を督す。之より莽蘇爾ますく驕り、叔父伊蘭内附するや、衛拉特を誘ふて河西の地に入寇せしかば、千五百二十九(嘉靖八年)明廷議して肅州以西の地を棄て、また

哈密の城印巴雅濟の存亡を問はずのち穆爾瑪哈穆特といふもの哈密を有して、土魯番に服屬せり、然るに此時また西北韃靼の入寇あり、次で東南より倭寇の侵略あり、嘉靖已降邊警益急を告げて明室漸く傾倒の運に趣けり。

明の世宗哈密を棄つるの年、兵部尙書王守仁卒す、享年五十又七、斯に明朝の中盛より晩衰に移るに方り、此學界の一偉人を失ふ、少しく當朝文學の歸趣を顧みて章の結末とせむ。

明初の學者は元の遺儒多くして、専ら宋學を修め、科擧の法も亦元の遺制を繼承し、經義は一に程朱の説を奉じ、殊に成祖の永樂中『四書大全』『五經大全』『性理大全』等の全書を編纂して、各學校に配附せしかば、一時の學風此外に出でざりき、然るに英宗の世河東に薛瑄字は德温、千三百九十四年出、千四百六十四年歿出で、醇儒を以て篤く程朱を信じ、躬行を務めて以て後生を誘ひ、政機に與るを得しより國中の學者之を宗とし、之に繼ぎては吳興弼字は子傳は稍や朱陸二家の間に出入し、曹端、胡居仁等皆一時の名を博せしと雖も、亦先儒の腐説を傳承して其正傳を得たりと爲し、敢て改錯することなし、然るに新會の人陳獻章字は公甫、千四

明の經學

明の文章

百二十八年生、千五百年歿出で、陸象山の説を採りて讀書靜生を説きて、道學に名を得、餘姚の王守仁字は伯安、千四百七十三年生、千五百二十九年歿はまた其につぎて道を心に求め、良治を致すを以て學者の任と爲し、篤く信じて疑はず、ともに朱子の説と背馳し、學術始て分れ、門戸の競争此に生じ、宗瑄の一派を河東の學といひ、獻章の流を江門の學といひ、守仁を宗とするものを姚江の學といひ、後遂に陽明學の稱あり、無錫の顧憲成が東林書院を起すに、至り、陽明の學派盛に門徒天下に、徧く、終には學派政黨相軋して、明末の禍難を爲せり、然れども之を要するに、明朝の儒學は門派の異同に論なく、みな性命理氣の空談にして、また漢唐時代の精專なる註疏なかりしかば、後の論者をして科擧盛にして、儒術微なりとの評を爲さしむ、且當朝の經義科擧は、文壇に一種八肱文といふものを生じて、流弊を殘し、之より支那古來の漢文を古文辭と爲すに至れり。

明代の古文辭は宋濂を以て第一流とす、濂字は景濂、號は潛溪、千三百九十九年生、千三百八十年歿、浦江の人、其文敷腹朗暢にして、蔚然として開國の氣あり、雄奇の文を作りて、明初の文壇に數へられし、劉基も之を稱して第一と爲したり、永樂の變

に成祖の爲に詔書を作るを拒みて誅せられし寧海の方孝孺字は季直(千三百五十八年生、千四百三年歿)は實に宋濂の門下に出で、又豪放縱横の文を以て名高く、王禕字は子充も醇朴の文を以て濂、孝儒等と並稱せらる。太宗、宣宗の際に及びて、楊士奇は臺閣體の文を始め更に下りて孝宗、武宗時代には李東陽字は賓之出でて盛名を博し、海内の詞宗と稱せられ、文柄を持すること三十餘年の久しきに互りしも、其文は宋元に模したるのみ、故に李夢陽字は獻吉は努めて贅牙の字句を用ひ、先秦を師として復古を謀ると曰ひて一時を風靡せり。此時恰も儒界一新の鴻學王陽明出で、博大昌明の文を作りて、世潮俗流の滔々として模擬剽竊をのみ力むる間に立ちて、卓然として一家を爲したりき。然るに之より後は、歷城の李攀龍字は子麟、太倉の王世貞字は元美の徒起りて、所謂李王一派の模擬ます。甚しく、其間に晋江の王慎中、武進の唐順之等、歐曾の文を範として力を古文に肆にし、王唐の號ありしも、終に李王の弊流を回へず、能はずして近けり。是則王遵巖、唐荆川にして、之に次ぎて唐宋諸家の文を標準として古文を作り、李王と抗敵せしものを崑山の歸震川と爲す。震川は名は有光、字は熙甫といふ。のち山陰の徐文

八股文

長、歸安の茅鹿門、公安の袁中道等ありしも、明の文壇また振はず。八股文は官吏登庸試験の應答に用ひし一定の格式を具せし時文にして、前後各四股の對偶を用るを以て此名あり。文格既に一定せるを以て千篇一律また特に稱揚す可きものを見ず。若し詩に至りては開國の功臣たる青田の劉基字は伯溫、千三百十一年生、千三百七十五年歿は沈著、頓宕の詩を以て一家を爲し、詩壇の先聲と爲り、長州の高啓出で、遠く元遺山以上に接し、高く一代に傑出せり。啓字は季迪といひ、青邱と號し、漢魏六朝以後出入せざるなく、最も七古七律に長じ、楊基、張羽、徐賁等と與に吳下の四傑と稱せらる。而して四人皆終を善くせざりしは最も憐む可し。啓と前後して華亭の袁凱字は景文あり、雄健蒼老の作多きを以て稱せらる。然るに永樂以後楊士奇等文に臺閣體を粉むるとともに、詩また勃牢の氣なく、のち李東陽の雅馴清徹なる諸作あるに及び、僅に臺閣の弊習を碎破して唐宋の古風を復するを得たりしが、李夢陽、何景明、徐禎卿、邊貢、康海、王九思、王廷相の七子相標榜して、秦漢の文、盛唐の詩を唱導するに及びて、明詩の運一大轉せしは、なほ文界の一變を來せしが如し。下りて李王の徒また七才子社を結び、徒に模擬剽竊を事とす

明詩

劇曲小説

るに至りてはまた論ずるに足らざるが如し。詩文の外元明に至りて發達せしものは劇曲小説にして、明代劇曲の名家には沈青門、陳大聲、湯顯祖等あり、牡丹亭返魂記の劇曲に於ける『西遊記』『金瓶梅』の小説に於ける、支那輕文學中の傑作にして、みな後世の珍とするところたり。嘉靖以後明祚なほ百二三十年、その内政外交の變は更に一章を加ふ可きも、世益す下りて文運また衰頽したれば、明朝文學の一斑は此に筆を擱かんのみ。

第七章 明季の東亞細亞

韃靼の形勢、諸達の入寇、倭寇の起、日本と明との通交、通商、倭寇の猖獗、世宗時代の安南、緬甸、世宗の内政、明代の道佛二教、明代の基督教、喇嘛教、諸達、巴噶奈、濟農、諸達の歸降、張居正、土默特、泰寧、諸部、韃靼、青海、朝鮮の初盛、朝鮮の漸衰、豐臣秀吉の征韓、楊應龍の亂、安南の内亂、緬甸、東林の黨議、明末の三案。

明の世宗の嘉靖年間、最邊患の大なりしものは諸達の入寇と倭寇の侵掠なり。始め韃靼の達延汗死して三子あり、長を阿爾倫、次を巴爾色、季を札賚爾といひ、札

韃靼の形勢
八二五

諸達の入寇

賚爾は漠北蒙古の地に封せられて喀爾喀部を領し、巴爾色は漠南蒙古の西半を領して濟農と爲る。濟農は副王の義なり。阿爾倫は所謂小王子にして、最も富強にして控弦十餘萬し、明の憂を爲せしが、其子ト赤に及び、稍兵を厭ひて千五百三十二嘉靖十一年帳幕を東に移し、専ら漠南蒙古の東半を直隸す。其最も明に近きを以て挿漢兒部といふ。近接の義なり。然るに濟農、巴爾色亦三子ありて、長子究弼哩克は父につぎて濟農と爲り、居を河套に移して鄂爾多斯部の祖と爲り、次子暗達はその北陰山の邊に在りて、後の土默特部の先と爲り、季子は婁把圖爾といひ、韃靼數部に分れたり。中に就きて暗達最も強傑にして、兄濟農としばしば明に入寇し、千五百三十六嘉靖十五年の如きは、大兵十萬を以て至る。明の世宗乃ち劉天和を兵部侍郎と爲して之を拒がしむ。之より邊塞烽火連りに起りて、兵革已ます。千五百四十四嘉靖十九年、天和は濟農を黑水苑固原州の西に擊破して、其子錫沙王を斬りたり。後幾ならずして濟農は死し、其子朗臺吉等は河西に散處して、諸子相和せず、勢分崩して力衰へたりしも、暗達は獨り日に盛強にして、濟農の餘衆をも併領し、千五百四十二嘉靖二十二年大舉して山西に入寇し、男女を殺傷する